

ESD 実践研究 2025

ごあいさつ

高田 知紀

ESD 推進ネットひょうご神戸代表
兵庫県立大学／兵庫県立人と自然の博物館

ESD 推進ネットひょうご神戸は、それ自体が明確な意志をもった一つの組織体というよりも、強い中心性をもたず、境界も不明瞭な、つかみどころのない曖昧模糊としたネットワークです。しかし通底しているのは、地球を想いながら、「現場」と「実践」を大切にしている人たちが集まっているということです。活動する地域やテーマが異なる人たちが自ずから交わることで、それぞれの現場で化学反応が起こり、新たな展開が生まれていきます。

「ESD 実践研究集会」は、持続可能な社会をつくろうとする実践者の出会いの場です。また、それぞれが現場で抱える葛藤を共有し、そこから共に未来を描いていく場でもあります。8回目となる今回の研究集会では、そのような場を、ESD 推進ネットひょうご神戸のメンバーだけでなく、全国の ESD にかかわる人びとと共に作りあげていきました。基調講演あり、リレートークあり、ワークショップあり、シンポジウムありと、集会に参加した人は、内容の振り幅の大きさに少し戸惑ったかもしれません。しかし、会場のようすをみると、いろんな「ESD のタネ」ができていたように思います。

本レポートは、怒涛の 2 日間の熱量をできるだけそのまま表現できるように心がけ、構成を考えて、みんなで執筆しました。ぜひ、この ESD のための「知の宝庫」から、ビビッとくるキーワードを探し当て、それぞれの現場での実践に活かしてもらえたら幸いです。

目次

代表からのごあいさつ	高田 知紀	i
目次		ii
1. 第8回 ESD 実践研究集会 (2025 年度国内 RCE 実務者会議&日本 RCE ユース会議) 報告		
開催要項		1
基調講演まとめ		7
ESD リレートーク (ポスターセッション) 報告	鴨谷 真 山本 結子	11
ESD 企画づくりワークショップ報告	後藤 聡美	12
総合シンポジウム報告	高田 知紀 吉良 佳晃 齋藤 優子 池田 拓也 白根 愛子	13
参加者アンケートまとめ		16
参加者の声		
学び合い、エンパワメントする空気の中で ～ESD 研究集会での「出会い」と「気づき」～	岩橋 嘉大	22
全国から集う熱意に学ぶ、これからの ESD 実践の可能性	尾崎 優子	23
ESD の活動が「総合的」であるために	末廣 晃	24
「ごちゃまぜ」の中に見いだす ESD の価値と、人と人が出会う意味 ～RCE 兵庫－神戸への期待～	龍原 梢	25
ESD への期待と予想	中村 信太郎	26
グレーゾーンは存在する	野崎 隆一	27
何のためにボランティア活動をするのか	藤原 ゆうな	28
〈資料集〉		
基調講演レジュメ		29
ESD リレートーク (ポスターセッション) ポスター&要旨		34
ユース会議参加者の声		93
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長あいさつ	太田 和宏	101

1. 第8回 ESD 実践研究集会報告

2026 年 3 月 20 日、21 日
@神戸大学鶴甲第二キャンパス

第 8 回 ESD 実践研究集会

合同開催：2025 年度国内 RCE 実務者会議・日本 RCE ユース会議
開催要項

1. テーマ

交差する知と実践～ユース・実践者・研究者が描く ESD のこれから～

2. 大会趣旨

8 回目の開催となる今年の ESD 実践研究集会は、日本国内の RCE※関係者やユースと一緒に実施します。ESD（持続可能な開発のための教育）の推進においては、多様な領域のステークホルダーが接触・交流し、その相互作用を通して、新たな価値や動きを生み出すことが求められています。しかし、効率性・生産性を重視する風潮の強い近年は、カテゴリー・テーマの分断が広がり、それらの「間（あいだ）」に生まれるはずの豊かな学び・気づき・つながりが軽視される傾向にあるようです。SDGs の達成においても、そのテーマ間の矛盾や葛藤を問う場がなければ、個別の実践を「持続可能な社会づくり」へと展開していくことは難しいのではないのでしょうか。

このような課題を背景として、大会テーマを「交差する知と実践～ユース・実践者・研究者が描く ESD のこれから～」と設定しました。さまざまな分野・地域・世代をクロスさせながら、参加者の皆様とともに ESD の本質に迫ります。ぜひ、神戸にご参集いただき、具体的な活動や思いを共有しながら対話を深めることを通して、これからの ESD 実践に求められる仮説・方法・学びのあり方を探っていきましょう。皆様のご参加、心よりお待ちしております。

※RCE：Regional Centre of Expertise on ESD（国連大学が認定する ESD 推進のための地域拠点）。2025 年 12 月現在、世界で 200 地域（うち国内 8 地域）が認定されている。

3. 期 日 2026 年 3 月 20 日(金・祝)・21 日(土)
4. 会 場 神戸大学鶴甲第 2 キャンパス (〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11)
5. 申 込 指定の「参加申し込みフォーム」から事前申し込みが必要です。
3 月 9 日 (月) までに、下記フォームよりお申し込みください。
<https://forms.gle/oWLWEnkWqeH6EdFS9> 
6. 主 催 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
ESD 推進ネットひょうご神戸 (RCE 兵庫-神戸)
7. 共 催 ESD プラットフォーム WILL
8. 後 援 神戸市教育委員会／兵庫県教育委員会／
兵庫県私立中学高等学校連合会
9. 協 力
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教育系教育研究分野／
ESD 推進ネットひょうご神戸協力団体
AICL 国際協働学習実践グループ／NPO 法人あいな里山茅葺同人／あすパ・ユース震災語り部隊／NPO 法人あんだんて KOBE／NPO 法人いまじん／NPO 法人インクルひろば／海と空の約束プロジェクト／エルナード水道筋商店街／一般社団法人おいしい防災塾／王子スポーツクラブ フラッグフットボールチーム ドルフィンズ／賀川記念館／NPO 法人環境カウンセラー会ひょうご／Camp Life／くすのき農園／クラーク記念国際高等学校／くららベーカリー／NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構 (JEARN)／甲南子育て広場／甲南女子大学／神戸まちづくり研究所／神戸 YMCA／神戸 YWCA／神戸新聞社／神戸大学サイエンスショップ／神戸大学フェアトレード団体 PEPUP／神戸大学附属中等教育学校／コープこうべ／NPO 法人里地里山問題研究所／JICA 関西／すずらん台児童館／NPO 法人スペシャルオリックス日本・兵庫／株式会社ゼネラル・パートナーズ／NPO 法人ソーシャル・デザイン・センター淡路／地域協働プロジェクト／のびやかスペースあーち／NPO 法人 BERT／haha かふえ／NPO 法人はりま里山研究所／公益財団法人 PHD 協会／東お多福山草原保全・再生研究会／NPO 法人ひと・コネクト兵庫／兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県漁業協同組合連合会／兵庫県国際交流協会／兵庫県立兵庫高校／兵庫県立舞子高校／ひょうご市民活動協議会／兵庫大学短期大学部／兵庫県ユニセフ協会／NPO 法人 Peace & Nature／福田川クリーンクラブ／NPO 法人プラス・アーツ／ミチのムコウ／南あわじ市教育委員会／ミャンマー関西／れいんぼう☆キッズ

10. 事務局

神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11 神戸大学鶴甲第二キャンパス

TEL 078-803-7970 または 7721 FAX 078-803-7971 MAIL rce.hyogo.kobe@gmail.com

11. プログラム

3 月 20 日（金・祝）	
12:00	受付開始
13:00	開会 挨拶：高田知紀（ESD 推進ネットひょうご神戸代表・兵庫県立大学／人と自然の博物館）
13:10	基調講演「ESD のロマン」 松岡広路（神戸大学）
14:30	ESD・RCE リレートーク（ポスターセッション） セッション 1
15:30	ESD・RCE リレートーク（ポスターセッション） セッション 2
17:00	情報交換会（18:30 終了）
3 月 21 日（土）	
9:00	受付開始
9:30	環境省・国連大学からの情報提供
10:00	ESD 企画づくりワークショップ （2025 年度国内 RCE 実務者会議・日本 RCE ユース会議） ※共催：国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）
13:00	休憩
14:00	総合シンポジウム・討議 「交差する知と実践～ユース・実践者・研究者が描く ESD のこれから～」 コーディネーター：高田知紀（兵庫県立大学／人と自然の博物館） 登壇者：齋藤優子（日本生活協同組合連合会） 吉良佳晃（吉良農園・一般社団法人 AZE） 池田拓也（灘中高等学校） 白根愛子（ESD プラットフォーム WILL・神戸大学修士 1 年）
15:30	クロージング・終了

3/20 13:10~14:10

基調講演「ESD のロマン」

場所：F263

20 年間にわたって兵庫・神戸を拠点としながら ESD 実践／研究を進めてきた松岡氏による基調講演では、大会テーマ「交差する知と実践～ユース・実践者・研究者が描く ESD のこれから～」の解題とともに、ESD 推進ネットひょうご神戸（RCE 兵庫-神戸）が目指そうとする ESD や、これからの ESD をめぐる課題と展望を示していただきます。SDGs の目標達成期限となる 2030 年まで残り 5 年を切った今、ESD には何が求められているのでしょうか。基調講演を通して、2 日間の見通しを立てていきましょう。

登壇者プロフィール：松岡広路（まつおか こうじ）

1996 年、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位修得退学後、神戸大学発達科学部講師。1998 年、神戸大学発達科学部助教授。2008 年、神戸大学人間発達環境学研究科教授。神戸大学人間発達環境学研究科・教授。ESD 推進ネットひょうご神戸（RCE 兵庫-神戸）の立ち上げメンバー。元事務局長。2010 年にブラジル・クリティバで開催された 5th International RCE Conference における全体会で、キーノートスピーチ“ESD and Empowerment of the Oppressed: Based on Paulo Freire”を発題。これまでに、日本福祉教育・ボランティア学習学会会長、日本社会教育学会理事などを務める。

3/20 14:30~16:30

**ESD・RCE リレートーク
（ポスターセッション）**

場所：F257

ESD 推進ネットひょうご神戸（RCE 兵庫-神戸）は、防災・減災、まちづくり、環境保全、生物多様性、環境教育、多文化共生・異文化理解、福祉・人権、開発教育、平和教育など、多様な分野・領域で活動を展開する実践者のネットワークです。これまでの ESD 実践研究集会でも、その多様な活動を紹介するリレートーク（ポスターセッション）は本ネットワークの魅力を示すプログラムの一つでした。今回は、推進ネットメンバーの活動だけでなく、日本国内の RCE の活動や各地のユースの活動を含んだ「拡大版」で実施します。マルチステークホルダーの地道な実践・活動がダイナミックに「交差」する場をお楽しみください。

▶ **ESD・RCE リレートーク（ポスターセッション）にエントリーされる方へ**

- ✓ ESD に関わる活動・実践をされている方はどなたでもエントリーしていただけます。
- ✓ エントリーされる方は、**本集会申し込みフォーム**の所定の箇所にチェックをした上で、**発表者（共同発表可）とタイトル（仮でも可）をお知らせください。**
- ✓ ポスターは **A0 サイズ**で作成してください。
- ✓ 印刷は事務局（神戸大学）で行います（持参していただいても構いません）。
- ✓ **事務局によるポスター印刷をご希望の方は、3 月 13 日（金）までに PDF 形式のデータを下記宛先まで送付してください。**
宛先：rce.hyogo.kobe@gmail.com

- ◇ ESD・RCE リレートーク（ポスターセッション）は、前後 2 つのセッションで行います。
- ◇ ひとつのセッションの構成は以下の通りです。
発表者全員が各 3 分程度で概要を説明し、その後 30 分程度、参加者が自由に質疑応答し、発表者と対話する時間を設けます。

3/21 10:00～13:00	合同開催：2025年度国内RCE実務者会議・日本RCEユース会議 ESD 企画づくりワークショップ	場所：F257
本セッションでは、ESDの本質的な課題ともいえる「異質なものの（人・組織・価値観・テーマ等）の交差」を主題とし、RCE 兵庫-神戸の実践事例を示しながら、参加者同士の実践・活動を掛け合わせたワークショップを行います。多様な立場の人との接触から、さまざまなスキル・アプローチ方法を学び、アウトプットすることを目指します。2025年10月に14th Global RCE Conferenceで採択された「岡山宣言2025」も参考にしながら、ESDの実質化を図ります。企画づくりのプロセスを通して、異なるテーマ間に存在する矛盾や葛藤に触れつつ、ESD実践の展開に求められる仮説・具体的な方法・学びのあり方を検討・提案していきましょう。 ▶タイムスケジュール（予定） 10:00 趣旨説明・事例紹介 10:30 ESD 企画づくりワークショップ 11:30 共有セッション 12:15 実務者・ユース混合グループワーク 13:00 終了 本セッションにご参加いただく方は、以下のURLよりアンケートにご回答ください。（国連大学 UNU-IAS） https://jp.surveymonkey.com/r/JAPANRCEYOUTH2026		

3/21 13:30～15:00	総合シンポジウム・討議	場所：F257
午前の国内RCE実務者・ユース会議「ESD 企画づくりワークショップ」を受けつつ、大会テーマ「交差する知と実践～ユース・実践者・研究者が描くESDのこれから～」にも掲げている「ユース」「実践者」「研究者」のそれぞれの立場から2日間の成果をアウトプットしていきます。フロアの意見も交えながら、本研究集会での到達点と課題を確認します。次のアクションにつながる学びを生み出していきましょう。 コーディネーター：高田知紀（兵庫県立大学／人と自然の博物館） 登壇者：齋藤優子（日本生活協同組合連合会） 吉良佳晃（吉良農園・一般社団法人AZE） 池田拓也（灘中高等学校） 白根愛子（ESDプラットフォームWILL・神戸大学修士1年）		

12. 昼食等について

会場近隣にコンビニ・レストラン等はありません。各自ご持参ください。

13. 情報交換会

日 時 3月20日（金・祝）17:00～18:30
会 場 レストランさくら（神戸大学六甲台第一キャンパス内）
参加費 学生・院生・ユースとしてご参加の方：3,000円
それ以外：6,000円

※事前申込が必要です。

※参加費は当日お支払いいただきます。

会場への交通のご案内

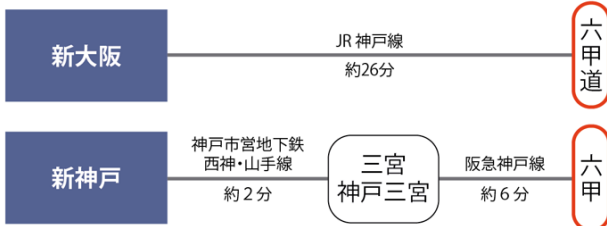
会 場：神戸大学鶴甲第2キャンパスF棟
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学鶴甲第二キャンパス

▼キャンパスマップ



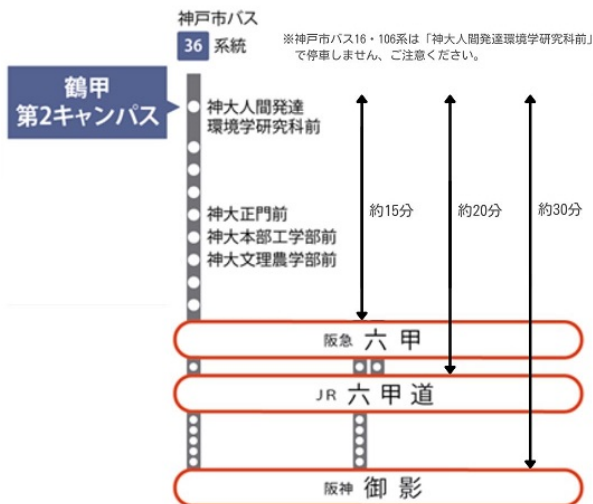
○遠方からのアクセス

▼新大阪駅・新神戸駅から

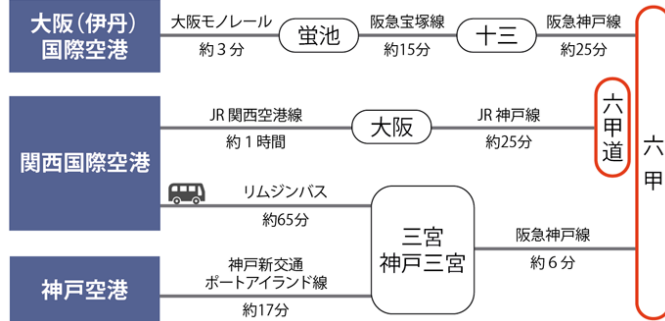


▼神戸大学鶴甲第2キャンパスまで

神戸市バス(阪神「御影」駅、JR「六甲道」駅、
阪急「六甲」駅から) **36系統**「鶴甲団地」行き
に乗車(「鶴甲2丁目止」行きでも可)。
「神大人間発達環境学研究科前」下車。
バス停より徒歩すぐ。



▼空港から



詳しくはホームページをご確認ください (<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/access>)

※駐車場に限りがありますので、自家用車での入構はご遠慮ください。特別な事情がある方は、事務局までご連絡ください。

■ 基調講演まとめ

文責：黒木 宏太（日本コムシンク株式会社）

この講演は、「当事者性の変容を生む実践」と「草の根の社会運動」を大きなテーマとしています。講師である松岡氏は、パワーポイントを使わず、配布資料（レジュメ）に基づいて持続可能な開発（SD）と ESD（持続可能な開発のための教育）の歩みについて、たくさんのユーモアを交えて参加者に話しかけるように、お話しされました。

以下、要点をまとめました。

1. 持続可能な開発（SD）の理念との出会い

- **「Our Common Future」の衝撃**：1987 年、27 歳の時にブルントラント委員会の報告書「Our Common Future」を大学院生の仲間と読んでいた際に、「持続可能な開発」という言葉に出会う。当初「持続可能な開発」という概念について、「経済成長を否定しておらず、人権や福祉の視点がターゲットにされていない。中途半端な宣言」と感じた。
- **ハンプルク宣言での幻滅**：10 年後のハンプルク宣言においても「持続可能な開発」が触れられていたものの「エコロジカル」「equitable」が「持続可能な開発」の修飾語として「サステナブル」から外されて書かれていたため環境問題や人権などを重視しない経済中心なのか、と幻滅した。
- **「持続可能な開発」概念のゆらぎ**：これらを踏まえ「持続可能な開発」の定義に当初から揺らぎがあったと松岡氏は指摘する。RCE 兵庫・神戸の初期や、ユネスコの国際会議の参加者でも揺らぎや極端な視点からの理解が多かった。
- **人間存在そのものを変える視点**：一方で僧侶や宗教家が ESD の国際会議に参加し「システムや個別の課題を変えるのではなく、人間の生き方・存在そのものを変えていく実践だ」と話していた。また ESD の国連大学のキーワード「Ubuntu（ウブントゥ、私がいるのはあなたのお陰、私とあなたが一緒になって社会を作っていくという南アフリカ・ズールー語の考え方）」のような「言われてみれば日本では当たり前のライフスタイルをどのように実現するか？」という発想で ESD を実践する人もいた。
- **ESD の 10 年**：このように「持続可能な開発」の概念が分かりにくく、社会に広めることに苦慮したために、2005 年から「国連・ESD の 10 年」が推進されたが、ESD 関係者のあいだでも迷いがあった。

2. SDGs と ESD の関係

- **概念に固執しない**：国連大学元総長ハンス・ファンヒンケル先生を神戸大学にお呼びした際には「For が大事なんだ」「『持続可能な開発』をはっきりさせるのではなく、ぼやっとした概念に向けて、様々な動きを集約することが大事だ」「この世に絶対的な正義がない中で、Education を作り上げていくのだ」と仰っていた。

- **SDGs の普及**：分かりやすさを重視するために生まれたのが SDGs である。2015 年に設定された SDGs は、複雑な問題をテーマ別に整理したことで、個人や組織が目標を持ちやすくなったというメリットがある。
- **SDGs の懸念点**：一方で、権能を持つ「ステークホルダー」中心の運動になる点が懸念された。No one left behind という標語にしても「お情け頂戴」というニュアンスが感じられ、実際に「零れ落ちている人や周辺化されている人が SDGs の取り組みに入りにくい」ことが指摘されている。また科学技術（テクノロジー）による解決に過度に期待する傾向も問題である。
- **拙速で偏った変革**：そのような変革は「拙速で偏った変革になるのではないか」「優先順位を勝手に決めて課題に対応することで、後悔するのではないか」という危惧がある。
- **SDGs と ESD の関係**：このように SDGs にはいくつかの問題があるため、SDGs が進めば進むほど逆説的に ESD が大事になるであろう。「複数の異なるテーマの問題を総合的に調和的に解決していく存在に人間がなっていく」そういう実践がますます求められるようになっていくのではないか。

3. RCE 兵庫・神戸の歩みとネットワーキング

- **組織の変容**：2007 年に設立された RCE 兵庫・神戸は、当初は大きな組織のリーダーに声をかけて 10 人程度でスタートしたが、それぞれが組織の責任を背負っていたため、思ったような融合が起きなかった。その反省から市民団体に声をかけて、真摯に「持続可能な開発」に向き合う場へと変化させていった。
- **ESD シンポ in 神戸**：ソーシャルビジネスの生みの親であるモハメド・ユヌス氏と、日本のソーシャルワークに命を懸ける阿部史郎氏に対談していただいた。片や、資本主義の仕組みにおいても貧困を撲滅できると考える人、片や、貧困を、当事者のエンパワメントと福祉活動で解決しようとする人、まさに水と油の二人に、両者の接近と連結の可能性があるのではないかと期待を寄せ、そして「ESD をもっと多くの人に開いていきたい」という願いを込めて「開け！ ESD」というテーマを設定した。しかし、ますます ESD は分からなくなってしまい数年が経ってしまった。その後 2012 年 4 月、「ESD 推進ネットひょうご神戸」という通称を付け、分からなくなってしまった ESD を、さらにいろいろな立場の人と考えぬこうと、運動システムの変更をした。
- **「ESD を促進するライフスタイルとは？」**：2015 年には SDGs がスタートし注目が集まっていた時期。「ESD を促進するライフスタイルとは？」というテーマを掲げた。「ESD が生まれる」とはしなかった点に注目して欲しい。暮らしながら徐々に問題意識が生まれていくライフスタイルに焦点を当てたのだ。

4. ESD 実践研究集会の挑戦と発展

- **E・S・D の分科会に満ちたパワー**：第 1 回 ESD 実践研究集会は、E・S・D の 3 つの頭文字ごとに分科会を設置した。答えは全くでなかったものの、色々な可能性を感じることができる、とても面白い集会になった。
- **つながりを重視した第 2 回の実践研究集会**：「我々は、社会・地域のことを本当に知っているのだろうか」という問題意識から、第 2 回 ESD 実践研究集会は

「つながり」をキーワードに掲げた。また分科会のテーマを、「い・しょく・じゅう」とひらがなにすることで、多様な解釈が生まれ様々なアイデアが生まれた。

- **SDGs を深く知るための第 3 回**：SDGs が 2030 年までという期限があることを踏まえ、より詳しく SDGs を知るために第 3 回のテーマを「SDGs 大研究」とした。SDGs の 169 のターゲットまで詳細に確認したうえで、「ESD 推進ネット ひょうご神戸」のメンバーが取り組んでいる活動やローカルな問題意識と、重ね合わせるシンポジウムなどを行った。
- **誰もが関わることを重視し始めた第 4 回**：しかし第 3 回だけでは「足りない!」「もっと深めなきゃいけない」ということで、第 4 回は「続・大研究 SDGs!」～あらゆる人が SDGs 運動の主体となるには?というテーマにした。このころから「No one left behind」「誰もが主体になる」ということをもっとしっかり考えるべきだ、という問題意識が強くなり始めた。
- **with コロナ社会の ESD 活動**：2020 年からはコロナの影響でオンラインが増え、出会う機会が減ってしまった。一方で、オンラインは自分のペースで聞けることができる。そのため第 5 回、第 6 回の ESD 実践研究集会はすべてオンラインだったが、案外面白かった。
- **ネットワーキングの 4 次元化**：第 6 回のテーマ「ネットワーキング」は、実践仮説にもなっている。点と点を結ぶ「1 次元」、面として広がる「2 次元」、面が立体化する「3 次元」、ここまではよくある内容だが、ESD では時間軸（過去・未来）を加えた「4 次元」が重要である。過去の人達と繋がる取り組みや、100 年、200 年先の人たちの生活にイマジネーションが湧くことができたらすごい。さらには、目に見えないスピリチュアルな繋がりや、高田先生の研究テーマである「妖怪」のように「拡張したネットワーク」まで実現させたい。

5. 「当事者性」の変容とこれからの展望

- **ESD における学びのキーワード**：レジュメ 4 ページ上部のキーワードを全て含む活動を行うのではなく、それぞれ強調点を持った人・組織が一定の関係性を持ち長い時間をかけて学びが生まれてくることが大切である。そのためには、たった 1 つの優秀な活動を見つけようとするのではなく、多様な活動をどう連動させるかという発想を持つ方が良い。
- **「当事者性」を構成する要素**：ESD の多様な活動を説明するためには、Ubuntu などの伝統的な言葉が使われていますが、日本語では何かと考えたときに「当事者性」だと思いついた。「当事者性」は単なる「当事者意識（わがこと意識）」だけを意味するのではなく、そのテーマに関する「身体的な経験」「知識や情報」「人間関係」そして「ワクワク感や希望」などの 6 つの要素が総合化したその人のポジションを示す。このあたりは、後藤事務局長が整理されているが、複数の当事者性が混じり合い、新たな当事者性が生まれてくるところに、ESD の本質があるのではないかと考えている。
- **結びに代えて**：「ESD は SDGs のツールである」とよく言われるが、「SDGs が ESD を推進するツールの 1 つである」。ESD は 100 年、200 年かけて人類が

自然と調和し未来の人の想いを汲みながら、生産や消費の仕方を変えていく着実な「文化運動・社会運動」であり、大きな物語に流されずに着実に続いていくべきではないか。

以上、簡単にまとめました。

質疑応答のポイント

- **ワクワク感についての質問に対する松岡の返答:**共通のワクワクを無理に起こすのではなく、異なるテーマを持つ者同士が出会い、自分の関心が別のテーマにも重なり合っていく過程が重要である。
- **当事者と当事者性の違いについての質問に対する松岡の返答:**当事者は、ある問題やテーマを特定し、そこでの当事者性が深い人を指すが、一人の人間は、複数の当事者性・属性（ジェンダー、環境、福祉など）の塊であり、いわば、「当事者性の束」である。ある当事者性が表に出たり、陰になったり、また別の当事者性が明らかになったりする。そうした人間の多面的な本質を示すとき、当事者性が有効である。他者との接触を通じて当事者性が深まったり、当事者性の構成パターンが変化したりする。それを誘発する「ネットワーキング型の学び」を推進することが、ESD の役割のひとつではないか。

■ ESD リレートーク（ポスターセッション）報告

ブロック A

今回の第 8 回 ESD 実践研究集会におけるポスターセッションでは、これまでと比べて教育関係者に加え、学生や生徒による発表が多く見られた点が印象的であった。教員による実践発表は、自校の課題に限定されるものではなく、複数の教育現場に共通する視点や課題を横断的に捉えた内容が中心であり、ESD の広がりを感じさせるものであった。また高校生の発表では、学校内にとどまらず地域社会へと活動の場を広げ、地域課題や社会的問題に主体的に取り組む実践が多く報告された。中でも芦屋市で活動する高校生（OG・OB を含む）の事例では、課題認識から取り組みに至る経緯、具体的な実践内容、継続のための仮説、さらには活動を通じて見えてきた課題に至るまで、いずれの問いにも明確に答えていた点が非常に印象的であった。これらは実践を通じた経験や気づきに加え、過去から未来へのつながりを意識し、日頃から主体的に考え続けている姿勢の表れであると感じた。

文責：鴨谷 真（ESD プラットフォーム WILL）

ブロック B

私が進行を担当した B ブロックでは、当日 24 組が発表した。発表で取り上げているテーマ、実践内容、実践の背景にある社会課題や各々の思い、そしてそれを一枚のポスターに落とし込む表現の仕方や聴き手への語り方まで、どれ一つとっても、発表者の数だけ異なり、それぞれの考える「ESD とは何か？」が発表の端々に表れていたように思う。「ユース」「実践者」「研究者」といった立場にとらわれることなく、自分たちの実践について熱をもって伝え、同じだけの熱量をもって他の発表者の語りを聴く。そうした場をつくるために発表者それぞれが自分たちの、そして他の実践者の発表に向き合っていたのではないかと感じた。他の実践者の実践に対して敬意を払いながら、それでいて批判的に捉え、そこから得た知見を自分たちの実践に還していく。それが異なる複数の実践が「交差」し、新たな実践、動きを生み出していくために大切となることの一つなのだろうか、またそのためにはどんな仕掛けが必要なのだろうか、とそれぞれの発表や発表者同士の交流から私自身も考えさせられる場となった。

文責：山本 結子（神戸大学国際人間科学部 4 年・ESD プラットフォーム WILL）

■ ESD 企画づくりワークショップ報告

異質なものの交差が生む ESD の新たな可能性

後藤聡美（神戸大学）

本セッションでは、ESD の実践を広げ、社会文化的な運動として展開していく上で不可欠となる「異質なものの交差」をテーマに、参加者自身が ESD 推進のための企画づくりを行うワークショップを実施した。ここでいう「異質なもの」とは、人や組織、世代、価値観、専門性、社会課題として扱われるテーマなどを指す。異なる主体が同じ場に集まるだけでは、新たな実践につながるとは限らない。そこで、異なる立場や関心をもつ人々が交差し、互いの発想を組み合わせながら企画を構想するプロセスそのものを、ESD を推進する学びとして位置づけた。

本セッションは、日本 RCE ユース会議との合同開催であった。これまで RCE ユース会議と国内 RCE 実務者会議は別の空間で行われていたが、今回はユース側から「非ユースとももっと交流したい」という声があったことを踏まえ、両者が混ざり合う構造を意識して場を設計した。単に同じ場に集まるのではなく、ユース同士で安心して本音を語ることのできる場を確保しながら、異なる世代の経験や視点から学び合うことを目指した。

前半では、参加者が「ユース」と「非ユース」に分かれ、ESD を進めるための企画づくりに取り組んだ。その結果、ユース側からは既存の枠組みにとらわれない自由な発想の企画が多く生まれた一方、非ユース側では、現実の社会課題や地域の状況に即した、実現可能性を意識した企画が多く見られた。その後、参加者が他グループの企画を自由に見て回り、自分たちの企画を相対化するとともに、異なる発想との接続可能性を探った。

後半では、「ユース／非ユース」という区分を解き、両者が混ざったグループを再編成した。そして、「これから ESD を進めるためには、どのような動きが大切か」という問いについて議論した。前半で生まれた異なる発想を持ち寄ることで、個別の企画づくりから一段階視点を引き上げ、ESD を社会文化的な運動として展開していくために必要な関係性や動きについて考えた。

本ワークショップでは、異なる人・世代・経験を実際に交差させ、企画をつくり、他者の発想に触れながら問い直すプロセスそのものを学習機会とした。特に、ユースの自由な発想と、非ユースがもつ社会課題への経験や実践知を対比させるだけでなく、それらを交差させることで、双方から学び合い、新たな ESD の動きを生み出す可能性を探った。今後も、異なる主体がそれぞれの強みや視点を持ち寄り、互いの違いを活かしながら実践を生み出す場をどのように設計していくかが課題となる。

■ 総合シンポジウム報告

高田知紀（兵庫県立大学／兵庫県立人と自然の博物館）

第8回 ESD 実践研究集会の最後のプログラムであった「総合シンポジウム」では、ESD 推進ネットひょうご神戸から4人のスピーカーが登壇し、2日間にわたる集会の内容を振り返りつつ、今後のESDの実践に向けた展望について、参加者全員とディスカッションを行った。

わたしが総合シンポジウムのコーディネーターとして意識していたことは次の2点である。1点目は、「壮大な雑談の場」として、会場にいるどんな発言・コメントも受け止めることである。時には論点が飛躍し、前後の文脈に関連性がなかったとしても、そのリアルな対話の状況をそのまま受容し、それぞれが内面化しようとする努力こそが、ESDの営みだと考えるからである。2点目は、2日間の集会で少しずつ浮かび上がってきたキーワードや視点を、無理につなげたり、あるいは全体として結論づけたりしないことである。集会全体の共通認識のような結論が見出されたら、参加者はスッキリするかもしれない。一方でわたしは、実はそこにさまざまな矛盾や葛藤が内在しているということに注意を払う姿勢が、ESDにおいて不可欠であると考えている。

総合シンポジウムでは、最後に参加者が少しの「モヤモヤ」をお土産として持って帰れるような「不完全で、複雑で、美しい対話」を目指した。その一つの成果としてのキーワード群を示す。

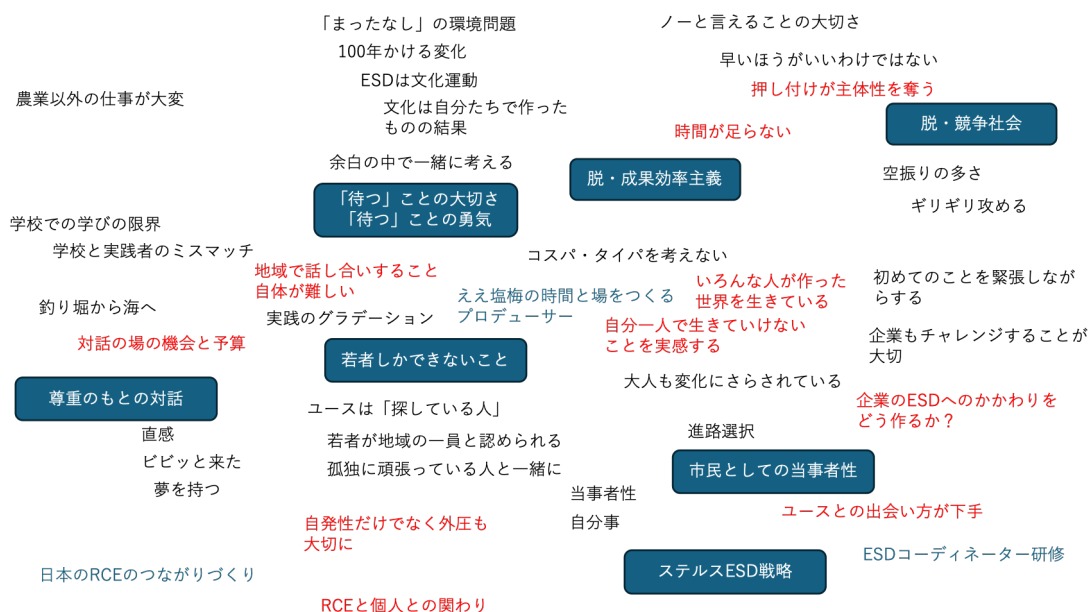


図 総合シンポジウムで抽出されたキーワード群

吉良佳晃（丹波篠山 吉良農園）

経営者として農業を「継業」し、農家として地域を「継承」する立場から、丹波篠山における現場実践を通じて ESD のこれからについて共に考えることができた。

人口減少や少子高齢化による影響がどこか遠い「言葉・現象」でなく「日々の暮らし」の変容に直結する段階になると、「問題の表出⇒即課題解決へ」というフレームになり、ビジネスライクな「見える化」「成果」の直線的設定と切り分けが進むことが多いと感じる。そこにはもはや余白がない。現実には本実践研究集会のようにごちゃまぜであり、分けるほうがよいもの、そのままとらえるべきものが幾重にも層を成しているのに。

知と実践が交差し、予定調和でない発見が醍醐味だと感じる ESD の実践。これからも私たちは土着≡暮らしとしてあえて分けない、越境≡フィールドとして客観視もできるという当事者と当事者性が行き来するカオスな「創造的継承の場」である農村地域を大切に紡いでいこうと思う。

齋藤優子（日本生活協同組合連合会）

総合シンポジウムの中で ESD は、「100 年かけて変化を起こしていく文化運動」であるとの視点が共有され、その本質は、一人ひとりが市民としての当事者性を持ち、対話や経験を通じて社会のあり方を問い続けるプロセスにあると感じた。特に、「押し付けが主体性を奪う」というキーワードは印象的であり、成果や効率が求められる風潮の中で、良かれと思って用意した「学び」の場が、ともすれば答えに効率的にたどり着くための「お仕着せ」になってしまうリスクにも気づかされた。ESD 実践で大切にすべき偶発的・偶然的なものをキャッチできるような余白・ゆとり・時間をかけた対話と経験は、どのような場や関係性の中で生まれていくのか、それは果たして意図的に仕掛けることができるものなのかということについて、考えていきたい。

池田拓也（灘高等学校）

学校現場で働く視点とあすパ・ユース震災語り部隊のような地域での若者の活動に関わっている視点から、総合シンポジウム場で発言をした。

学校で学べることはたくさんあるが、教員や社会全体が「学校での学びの限界」を認識することも大事である。校外の実践者は子ども（若者）がたくさんいる学校へのアプロー

チをされるが、学校の文脈やタイミングなどを考えて繋がらないと、お互いにとって不幸になることもあるので、注意したい。本当は教員がそのコーディネートをするべきであると考えている。

また、学校外だからこそ「待つ勇気」も必要である（本当は学校でもそうありがたいが、なかなか難しい）。「若者しかできないこと」に出会わせるしかけも必要である。そのような取り組みの中で、「市民としての当事者性」に気づく活動が求められているように感じている。

白根愛子（ESD プラットフォーム WILL／神戸大学大学院人間発達環境学研究科修士2年）

シンポジウムでは ESD 推進に向けた「乗り越える壁」として、「脱成果主義」「脱競争社会」などが挙がり議論された。シンポジウムで出たキーワードとは異なるが、全体をふり返ると、現代の「みえにくい社会」は乗り越えるべき非常に大きな壁であると考えます。インターネットの普及で情報は溢れ、むしろ見えすぎているものも多いが、その情報の背景や仕組みを考える機会は少なくなっている。衣食住、自然や伝統も、誰かの営みによって支えられているにもかかわらず、その過程は見えにくくなっていると感じる。それゆえ成果にこだわったり、背比べしたりすることでの可視化がよく行われている。しかし、目先の結果ではなく、見えにくい価値やつながりに光を当て、問い続けながら実践を積み重ねることが ESD の本質であるという認識がシンポジウムでも共有された。私自身、ESD に出会い 5 年ほど経つが（まだ 5 年）、みえていないものがきっと多くある。アンテナを張り、経験を重ね、対話を通して気づきを深めながら、多様な人とともに一歩ずつ「乗り越える階段」をのぼっていきたいと思う。

■ 参加者アンケートまとめ

第 8 回 ESD 実践研究集会 アンケート結果まとめ (回答数 61 名)

文責：北村 胡桃（神戸まちづくり研究所）

1. 参加されたプログラムを教えてください。

参加者の多くは基調講演およびポスターセッションに参加しており、2 日間を通して参加した方も 15 名いました。

参加プログラム	人数	割合
基調講演＋ポスターセッション	22	36.1%
全プログラム参加	15	24.6%
ポスターセッションのみ	10	16.4%
基調講演のみ	7	11.5%
その他	7	11.5%

2. 本研究集会について何でお知りになりましたか

最も多かったのは「友人・知人からの紹介」で、人的ネットワークを通じた参加が中心でした。

きっかけ	人数	割合
友人・知人からの紹介	35	57.4%
ESD 推進ネットひょうご神戸メーリングリスト	7	11.5%
他団体のメーリングリスト・ホームページ	3	4.9%
ESD プラットフォーム WILL メーリングリスト	2	3.3%
その他	14	23.0%

■主なその他回答

国連大学からのお知らせ／RCE 岡山、RCE 北九州からの紹介／社会教育主事講習受講者への案内／担当教員からの紹介など

3. 内容はいかがでしたか

「満足」「やや満足」を合わせると 95.1%となり、高い評価を得ました。

回答	人数	割合
満足	51	83.6%
やや満足	7	11.5%
どちらともいえない	2	3.3%
やや不満	1	1.6%

■ 参加者アンケートまとめ

4. よろしければ具体的に感想・意見をお書きください。

①基調講演への感想（5件）

- 基調講演がまず面白かったです。その後の ESD.RCE リレートークで実際に様々な活動の輪が広がっていることに感動しました。
- 松岡先生のご講演はとても楽しく惹き付けられました。リレートークでは多様なご活躍や考えを学び、自分の日々の教育活動を ESD の観点から考えたいと思いました。
- 松岡先生のご表情が ESD の素晴らしさを物語っていました。終盤の、「高校生と僕も繋がれるわけですよ…なんだその顔は一！」のくだりとか、もう本当に良かったです。社会教育って、笑いありきだよな…と実感しました。
- 基調講演が特に面白かったです。「持続可能な開発」の定義など、スルーしてしまいそうになるようなことについて情報を提供していただいたことが貴重な経験でした。
- はじめて参加しました。基調講演のおしゃべりは上手です。一方で専門用語や業界用語が多く、一般参加者には分かりにくい部分がありました。

②ESD への理解（10件）

- 今回初めて参加させていただき、またポスターセッションでも発表の機会をいただきました。日々の実践をこうした形で伝える場はこれまでになかったので、多くの方々に聞いていただき、また関心も持っていただき励みになりました。基調講演では、ESD という言葉についてまだ不勉強ですが、少し理解が深まったように思います。
- ESD の意義を考えるとともに、実践を知ることができて良かったです。
- 本集会が継続されてきた過程に、遊び心から始まった取り組みがあり（「E, S, D それぞれからのアプローチ」や「い、しょく、じゅう」）それが多様性を生み出し、様々な分野の人達とのつながりやアイデアが生まれたとのお話が印象的でした。柔軟な発想で中心軸はブレずに考えることの大事さを感じました。当事者性をもっているとは、単に経験があることでなく、知識、情報を十分にもち人脈があり、それと共にワクワク感があるとお話に共感しました。
- ぼやっと思っていることを認知化していただき大変興味深かった。
- 自分は、ESD というものを深く知らなかったが、基調講演やポスターセッション等を聞き、興味がわいた。またこのような活動があると知らなかった。もっと視野を広げる必要があると感じたし、自分の探求をもっと深めようと思った。
- ESD に関してさまざまな視点からの意見、活動が聞けてよかったです。
- 正直あまり、ESD について考えたことがなかったんですが、今回楽しく講演やポスターセッションを聞かせて頂き、多方面から学びを深められました。
- ESD という言葉を初めて出会いました。ただ発表する目的で来たけれど、基調講演がとても面白くて、自分の新しい道が見えた気がします。
- ESD とは何か、がよくわかりました

■ 参加者アンケートまとめ

- 第8回 ESD 実践研究集会に参加して、持続可能な社会づくりに向けた教育の可能性を改めて実感しました。さまざまな学校や地域での実践事例を聞く中で、理論だけでなく現場での具体的な取り組みが重要であることを強く感じました。

③実践事例・ポスターセッションからの学び（14件）

- 教育についてはあまり触れることができなかったですが、暖かい雰囲気で見聞やアドバイスをくださる方が多く、とても良い時間を過ごせたと感じます。他の方の発表に関しては、地震への対策についての教育の発表をされているところや、まちづくりについての発表を行っているところなど、興味深い内容が沢山ありました。
- 様々な取り組みや活動している人だからこそ共感できる悩みや問題意識に触れ、共有することができました。今後の活動に生かせることが沢山あり大変勉強になりました。
- 他地域の RCE やユネスコ関連の動向を知ることができ、有意義な時間になりました。
- 色々な方々の活動を聞くことができ大満足です。
- 沢山の実践を聞けました
- よい取り組みが多くあり、参考になった
- 様々な世代の方の発表が聞けてよかった
- 様々な活動を知れてよかったです。
- 色々な活動について知れるのはもちろんのこと直接質問できるのがよかったです。質問することによって理解が深まりました。
- 様々な人の ESD に向けた多様な活動に感心した。
- 他の団体の発表を見れた。よかった。
- いろんなことが聞いて、いろいろ勉強できました。
- 知らなかった分野の発表を聞くことができました。
- 多世代の取り組みが知れてとても勉強になりました。

④交流・ネットワーク形成・多世代交流（9件）

- ユースと色々な地域の RCE の方々とが最終一緒になり、交流できたことが一番良かったです。ESD は世代間や多様な方々の価値観を尊重するところが重要だと思います。ユースに足りない所、RCE（大人とします）の方々の足りない所を埋めるという事ではなく、それぞれの強みや長所を活かした活動を融合して新たな活動を生み出すことが社会の変容につながると思います。現実には少子高齢社会です。どの世代も大切に世界、いや地球の生き物も同じです。対話や議論を重ねて最終、地球の幸せの一助になれるように微力ながら参加を続けて行きたいと思いました。自己反省をしながら。
- ESD について改めて深く議論し、RCE の価値を再認識することができました。中学生から長年 RCE に携わられている方など多世代、他分野のかたが集まり、ネットワークの拡大・深化という意味でも有意義な機会でした。

■ 参加者アンケートまとめ

- 普段関わりのない実践者やアカデミアとのつながりができて面白かった。また、高校生や中学生も多く参加していたことが記憶に残った。
- 意見交換できて良かった。
- 様々な団体と交流できた
- 自分達の活動を振り返る機会になった。交流できた。
- 色々な年齢の方々と関わって、貴重な意見もいただけ、楽しかったです。
- 思いの他たくさんの方々に参加して頂き、多様な交流が生まれた。
- あまり関わったことのない研究内容や、年齢の全く違う方の活動をたくさん聞けて大変貴重な機会となりました。

⑤ワークショップ・対話・内省（5件）

- いろんな方のお話を聞いて、自分自身も考えたり話したりして、いろんな面から捉えたり考えたりするきっかけをいただきました。
- 今回初めて実践集会に参加しました。繋がりを広げることができただけでなく、内省するきっかけになったことが自分にとって大きな糧となりました。現在就職活動をする中で、人と比較して半ば競ったり、すぐに答えがわからないものを避けたりする自分がいました。しかし、もっと自分の当事者性をみつめて自分の心からやりたいことをやりたいし、分からなさに向き合うことにも立ち向かってみたいと思うようになりました。今は分からないことがあるとムズムズしてしまうけれど、分からなさを前向きに受け入れて楽しめるようになったらな...と妄想します。企画・運営に尽力いただいた皆様、そしてお会いできた皆様、貴重な時間をありがとうございました。
- ポスターセッションなどでは～企画ワークショップでは世代をわけた考えや世代をまぜた交流を通した企画作りを行うことで気づくことも多く学びも多かった。
- 考えた内容について様々な観点からのアドバイスを受けることができて良かったです。
- 様々な経験を得られて、とてもいい機会になりました！！

⑥構成・運営・進行への評価（9件）

- 高田さんの挨拶で会の趣旨がまとめられ、松岡さんの基調講演でこれまでの SD の流れと RCE の経緯がまとめられ、とても体系的な理解の得られる構成になっていたと思います。
- 前提の共有や、どのレベル感や立場の方でも参加しやすい話し方なども含め、すべてが2日間の終わりに向かってつながっていくようなプログラムでした。
- 高田さんのあいさつにあった「雑多」「ごちゃまぜ」「不完全を楽しむ」というメッセージによって、その後の基調講演、企画ワークショップ、総合シンポジウムを通して、心理的な安全性が確保され、多様な視点で楽しめる集会となったと思います。松岡さんの基調講演では ESD の本質、RCE 兵庫・神戸の歩んできた背景とその時々ホットな葛

■ 参加者アンケートまとめ

藤、そして「当事者性」について学ばせていただきました。ポスターセッション、懇親会に参加できなかったのはとても残念ですが、2日目の企画ワークショップでは1日目の熱量を感じることができる場面、多様な意見に出会い、練られた構成や後藤さん、大垣さんの進行がさらにそれらを引き出す雰囲気をつくっていました。グループファシリを担当した私としては、参加者の考えや想いを引き出しきれずに悔しい思いが残りましたが、最後の「壮大な雑談」となる総合シンポジウムでは、斎藤さん、池田さん、白根さんのパーソナルな部分とESDの共鳴が感じられ、ごちゃまぜに助けられました。現場に戻り、改めて振り返ると、総合シンポジウムでも述べた「当事者性」「実践のグラデーション」について、まだもやもやが残っています。「教育」と「実践」、「暮らし」「仕事」「個人の変容と社会の変容」へは、腹落ちにはまだまだ遠く、考え、挑戦し続けていきます。

- ESD企画づくりワークショップでは、ファシリテーションの方の進行がスムーズで、グループ内の話題をきれいにまとめていた事が印象的でした。
- ポスターリレートークの進め方が斬新で良かった。企画作りワークショップがとても面白かったです。WILLのみなさん、運営の皆さんありがとうございました。
- 進行においては、臨機応変に対応されていて参加者に対する配慮が細部まで行き届いており充実した2日間となりました。
- 1日目のみの参加でしたが、WILLの皆さんはじめ事務局の皆さんのおかげで、スムーズに運営されたと思います。遠方から参加された方も満足度が高い研究会だったのではないのでしょうか。中でも、高校生、大学生の皆さんのポスターセッションは、訴えたいこともわかりやすく、大変勉強になりました。今後こうした機会があれば、参加させていただきます。本当にお疲れ様でした。
- みなさんの現場の人たちの生の声を聞けてとても参考になり勉強になりました。生の地域の問題が聞けて貴重な時間だったと思います。また、WILLのスタッフの方々が優秀すぎてとてもやりやすかったです。本当に学びあり成長ありの楽しい会でした。
- ホームページ上の発表時間の表記がわかりにくかったです。全員が各3分とのことだったので、(人数)×(3分)かと思って準備していました。

⑦今後への期待・テーマ提案（1件）

- またどこかで、食と健康をテーマに話し合える会があれば僕は嬉しいです。

5. ESD推進ネットひょうご神戸（RCE兵庫・神戸）のメンバーですか

参加者の約85%がメンバー以外であり、新たな層への広がりが見られました。

回答	人数	割合
はい	9	14.8%
いいえ	52	85.2%

■ 参加者アンケートまとめ

6. 今後、ESD 推進ネットひょうご神戸として取り組みたいことを教えてください。

①ユース参画・次世代育成（2件）

- ユースが、よりワクワクできるプログラムを打ち出したい。
- ESD の生涯学習プログラム？あまり知らない方向けのプログラムとか、ユースだけでなく縦軸の時間を意識した ESD などを考えてみたいと今回の参加を経て感じました。

②ネットワークを活かした協働・対話（3件）

- ひょうご神戸の中で協働してひょうご神戸らしさが出て尚且つ今後に繋がる強みのある活動を取り組みたいです。誰もが、主役です。皆さんで対話し、議論して行きたいです。ハードルは高くないように身近な活動を模索します。そして事務局にも協力します。
- 個人的に、ネットワークを活用した教育実践の展開ができていないのでそこに取り組みたいです。
- 参加団体同士が交流する機会(どんな活動をしているか、現状の課題、など)があっても良いのではと思いました。今回のようなポスターセッションだと大変なので、オンラインか小グループで「お仕事拝見」的な。

③ESD の普及・学びの場づくり（2件）

- 出張 ESD 実践研究
- 推進ネットとして、まだまだ日が浅く理解不十分ですが、ESD の生涯学習プログラム？あまり知らない方向けのプログラムとか、ユースだけでなく縦軸の時間を意識した ESD などと考えてみたいと今回の参加を経て感じました。

④多文化共生・フェアトレード・居場所づくり（1件）

- 個人的には校内の国際、多文化共生担当として、フェアトレードカフェや(福祉的側面の)居場所カフェ等のイベントを充実させていきます。ボランティアで関わっている地域の外国つながり生徒の支援も細く長くおこなっていきたいです。
今回参加させていただき、今はまだまだですが、いつか自分の活動も言語化してポスター発表などでできればと思いました。当事者性についても学びたいです。

⑤防災分野での取り組み（1件）

- 防災啓発

■ 参加者の声

学び合い、エンパワメントする空気の中で ～ESD 研究集会での「出会い」と「気づき」～

岩橋 嘉大（兵庫県立青雲高等学校）

私は今回、池田拓也氏の紹介によりポスターセッションで発表を行った。題目は「教員のエージェンシーが創発する研究コミュニティの可能性—高等学校『社会系教科』研究会の分析を手がかりとして—」である。2021 年から主宰してきた研究会の運営過程で同氏と出会い、多くの支援を受けてきた経緯があり、今回初めての本格的なポスター発表に挑戦した。

本研究集会で特に印象に残ったのは、①参加者同士のエンパワメントする雰囲気、②基調講演で提示された ESD 実践の理念、③継続性をもった「出会い」の価値の三点である。

第一に、参加者の主体性に満ちた空気感である。私はこれまで約 5 年にわたり、教員の授業づくりを支える研究コミュニティの構築に取り組んできたが、その核となるのは、教員自身の仮説的提案とそれを基盤とした協働的な学習である。今回の集会では発表時の聴衆の反応や学生団体の積極的な質問姿勢から、互いの実践や意欲を尊重し合う文化が共有されていることを実感した。普段参加している社会科教育系学会の批判的議論中心の場とは異なり、包摂性と参画意識の高さが際立っていた。

第二に、松岡広路氏による講演「ESD のロマン」で示された草の根から社会変革を志向する構想に強い共感を覚えた。私自身が博士課程で取り組んできた「未来洞察」という研究テーマは未来を複数の可能性として捉え、オルタナティブな未来像を構想する枠組みであるが、講演で提示された多層的・多元的な視点や希望志向のプロセスはこの研究と深く響き合うものであった。長期的視野に立つ実践の蓄積が、社会変革を支えるという点において大変示唆的であった。

第三に、「出会い」の持続的価値である。本集会は参加者同士が実践を持ち寄り、相互に学び合う関係性を形成しているため、一度の交流にとどまらず、継続的な協働へと発展する可能性を内包している。実際に私自身、キャリア教育の実践を報告していた小田中美穂氏との出会いは、本校での新たな実践検討へとつながった。また、共同発表者である東田先生が本発表を契機に大学院進学への意欲を示したことも、研究コミュニティの持つ「出会い」の波及効果を象徴する出来事であった。

以上より、本研究集会の本質は、相互承認と協働を基盤としたボトムアップ型の研究文化にあるといえる。参加者一人ひとりの主体性が引き出され、それが新たな実践や学びを連鎖的に生み出していく。このような場の意義を改めて実感するとともに、今後の自身の研究および実践のあり方を再考する契機となった。

■ 参加者の声

全国から集う熱意に学ぶ、これからの ESD 実践の可能性

尾崎 優子（神戸常盤大学）

これまで地方大会レベルで育まれてきた本研究集会だが、今年は環境省をはじめとする国の機関の参画、そして全国各地からの参加者が集う全国規模の大会として開催された。ポスターセッションである「リレートーク」には 50 件近くの発表が揃い、例年以上の熱気と規模の大きさが伝わり、開始早々から胸が高鳴るのを感じた。

特に印象深かったのは、基調講演を皮切りに、環境省や国連大学による施策の共有と、全国各地の多様な実践事例、シンポジウムでの議論がシームレスに繋がっていた点である。基調講演によって ESD の現在の地平とこれからの羅針盤を得ることからスタートし、国際的かつマクロな視点や、異なる風土を持つ他地域の泥臭くも先進的な取り組みに触れたことで、身近な地域の課題解決に目を向けがちだった自らの実践をより広い視野で捉え直すきっかけとなった。

その中でも、ESD 企画づくりワークショップは、RCE 兵庫—神戸がこれまで大切にしてきた「異質なものの交差」をねらって企画されたプログラムであり、「RCE 兵庫—神戸らしさ」が突出していたプログラムであった。世代的・地理的な壁を越えて「持続可能な社会の創り手を育てる」という共通の目的のもとに多様なセクターが集う様子は、まさにこれからの ESD が目指すべきネットワークの姿そのものであると感じた。ファシリテーターを務めた一人として、当初は「企画づくり」に至るのか疑心暗鬼であったが、アウトプットそのものよりも立場の異なる多様な参加者の交流にこそ意義があることを「ビシバシと」感じる事ができた。全国規模の大会という大きな舞台でありながらも、参加者から語られる言葉はどれも現場のリアルな課題感に根ざしており、形式的な議論に終始しない本集会の良さがしっかりと引き継がれていることに深く感銘を受けた。また、ユースが生身で感じている ESD への思いに触れ、「地域固有の文脈をいかに次世代に繋ぐか」というテーマとして私自身の活動にも強く響くものがあった。

今回の参加を通じて、全国にこれほど多くの心強い同志がいるのだと確信でき、大きな勇気をいただいた。ここで得られた最新の知見や、全国の実践者たちの熱量を自らの地域に持ち帰り、日々の実践に還元していきたい。2027 年、RCE 兵庫—神戸は 20 周年を迎える。より強固なプラットフォームへと進化を遂げた本研究集会の今後の発展を心より楽しみにしている。

■ 参加者の声

ESD の活動が「総合的」であるために

末廣 晃（神戸大学文学部 4 年・ESD プラットフォーム WILL）

第 8 回 ESD 実践研究集会は、1 日目に ESD に関する基調講演と 50 のポスター発表、2 日目にワークショップと、それを踏まえた上での総合シンポジウムという構成で行われました。私は RCE ひょうご-神戸のユース組織である ESD プラットフォーム WILL のメンバーとして、すべての日程に参加しました。

総合シンポジウムは、自戒も込めて言えば、好き勝手なおしゃべりに終わってしまったように感じます。確かに、「尊重のもとの対話」であるとか、「ユースは「探している人」」であるとか、ESD と呼ばれている諸活動を行う際に大切なコミュニケーションの作法に関しては重要なキーワードが出ました。しかし、ESD が何を中心的な価値とするのかということについて、シンポジウムの登壇者やフロアの参加者の自由な解釈に委ねられすぎていたと思います。ESD がさまざまなテーマ・さまざまな領域の課題の「総合的な解決」を目指すプロセスである限りは、シンポジウムは、「総合」の作業とは何たるかを示す役割を担うべきだったのではないのでしょうか。

ここで私のテーマを明らかにすれば、私は能登半島地震の被災地での WILL の活動に参加し、被災地に折り重なる過疎地の問題に衝撃を受けて以来、WILL のボランティアとして現地に通い続けています。同時に、地理学研究者としても被災地に関わることを決め、卒業論文では能登の仮設住宅に住む人たちに聞き取り調査を始めました。私にとって能登半島地震の被災地に現れている過疎地の災害と復興の問題に取り組む重要性は自明のことですが、いざ言葉にして人に伝えようとする中々苦労しています。

「領域専門家ではない」ことを標榜するからといって、それぞれの領域の価値観を理解しなくていいということにはなりません。むしろ、深い理解が必要です。さまざまな場所でさまざまなテーマ・領域に体でぶつかって取り組んでこられた方たちの「これだけは譲れない」という点を明らかにし、どんな社会を作っていきたいか、言葉を交わしていくことの先にしか「総合」はないように思います。教育研究者は率先してその役割を担っていくべきだと思います。

ESD は「地域」に深く入り込み、そこで現れている課題に取り組む活動なののでしょうか。それとも逆に、「地域」とは異なる場所で新たなコミュニティを立ち上げようとする活動なののでしょうか。私にはどちらも重要であるように思われます。両方の場所でなされる会話と身体活動を糸口に、ESD を語る言葉を豊かにしていくことを大切にしたいものです。

■ 参加者の声

「ごちゃまぜ」の中に見いだす ESD の価値と、人と人が出会う意味 ～RCE 兵庫－神戸への期待～

龍原 梢（国連大学サステイナビリティ高等研究所 プログラムアソシエイト）

この度、国連大学サステイナビリティ高等研究所と RCE 兵庫－神戸との共催により、3 月 21 日（土）に第 8 回 ESD 実践研究集会のサイドイベントとして、第 8 回日本 RCE ユース会議を開催いたしました。人工知能（AI）の発展により、人と人とのつながりや交流、議論を経なくても、AI が答えを導き出してくれる時代になりつつあります。そのような時代だからこそ、あえて人と人との交わりを重視し、多様な価値観や考え方が「ごちゃまぜ」に混ざり合う中に ESD の価値を見だし、その「交差」から生まれる場づくりを大切にしているのが RCE 兵庫－神戸だと感じました。

傍から見ると、そんな学びのプロセス自体が混沌としているように見えることもあります。当事者としてオーナーシップを持って関わることで生まれる喜びや達成感があり、時には葛藤や挫折、悲しみを経験することもあるでしょう。課題に真摯に問いに向き合い、その答えを探し続けるプロセスには苦労があります。しかし、同時に、そこには大きな学びと喜びがあります。この度、日本 RCE ユース会議の開催にあたり、RCE 兵庫－神戸の皆様とご一緒する機会を通して、RCE 兵庫－神戸には、そのような人間らしい学びが息づいていると感じました。

RCE 兵庫－神戸は、元神戸大学の松岡広路教授のリーダーシップのもと、2007 年に設立されました。国連大学が提唱する「持続可能な開発のための教育に関する地域拠点（RCE）」の理念を地域で実践する拠点として、大学、行政、市民団体、企業、学校など多様な主体を結びつけながら、持続可能な社会の実現に向けた学びと実践の場を築いてきました。設立以来、地域課題を共に考え、社会を変革する担い手の育成に取り組み続け、ユースエンパワメントの分野においても先進的な役割を果たしてきています。

また、RCE 兵庫－神戸の大きな魅力は、異なる世代や立場、専門分野を持つ人々が対話を重ねながら共に学び合う文化にあると思います。行政、教育機関、市民団体、企業、そして若者たちが、それぞれの経験や価値観を持ち寄りながら地域の未来について考える姿は、まさに ESD が目指す学びの実践そのものではないでしょうか。

私自身も年齢を重ねる中で実感しますが、若い世代だからこそ生み出せる視点や、未来志向のフレッシュな感性があります。そのような若者たちの思いや挑戦を大切にしながら、時にカオスでありながらも前へ進み続ける RCE 兵庫－神戸の皆様のご活動に心から敬意を表します。

今後も多様な人々が出会い、対話し、学び合う中から、新たな社会変革の担い手が育まれることを期待するとともに、RCE 兵庫－神戸の今後ますますのご発展を祈念申し上げます。

■ 参加者の声

ESD への期待と予想

中村 信太郎（神戸市役所）

ESD は教育に留まらない広範な可能性があるが、難しさにより簡単には実現しないと予想した。（2013 年 ボランティア活動をする中で ESD に出会った際の第一印象）

・・・。

やはり難しさがある。無理なのか？ そもそも自分の誤認なのか？・・・。

・・・・・・・。難しさはここに限らない・・・。

【何らかの『助けになりうること、もの、考え方』があれば、広範な可能性の実現に向かうのではないか】

（2026 年 実践研究集会を経て、現在までに以下のようなことを考えています。）

X_s の R と Y_s の R が類似しているとき、X_s の S と Y_s の S は同じ

※ X_s、Y_s = 課題たち R = 難しい理由（等） S = solution（一つに限定されない）

※ 『何か 誰か 自分』が原因 あるいは 除外や排除 怒りや憎しみ（等）を除く。

優先順位・方法の見つめなおし（の優先順位）

※ 『色々とわかってはいるが長年難しいままでなかなか上手くいかない』場合（等）に。

※ 『何か 誰か 自分』が原因 あるいは 除外や排除 怒りや憎しみ（等）を除く。

オートマチックトランスミッション

※ 『ギア（のみ）による駆動』はギアの形状や配置、回転数（速度）が合わないとかみ合わない。

※ （人の動きと見た場合）『何か誰か自分』が原因 あるいは除外や排除 怒りや憎しみ（等）を除く。

アクティビティモード

※ 『生命活動としての状態（変化する）』があり、その影響がある（仮説）

※ 生命体がその影響を受けている場合、恐らく人間もその影響を受けている（仮説）

『ずれ』

※ “拠点”と“ずれ点（仮説）” では ずれ点のほうが優れている（仮説）

※ 『0 か 1 0 0 か』と 『1. 1 』では後者のほうが優れている（仮説）

グレーゾーンは存在する

野崎 隆一（神戸まちづくり研究所）

これまでの実践研究集会の議論を振り返ってみると 2020 年～2022 年のコロナによる関性喪失期を超えて「ごちゃ混ぜ」「カオス」「NEGATIVE CAPABILITY」「雑多性」などのキーワードが、徐々に存在感を持ち始めてきていることを感じます。トランプが、二期目の大統領になり、日本では最近の選挙で中道連合が大敗するなど、戦後世界で当たり前と思われてきたリベラル的価値観が簡単に覆る事態が続いており、その背景には、左右、世代、階層といった多軸での分断があるようです。

小さい頃から意見の対立に出会った時、いつもどちらの言い分もわかるという感覚があり、幼い頃は、自分が未熟で確たる価値観を身につけていないからだと思いこんでいた。通っていた教育学部附属小学校では、当時クラス討論がよく行われていました。大好きだった模擬討論では、いつもどちらにもつかず、足して二で割る妥協案を出して得意がっていた。その後、政治家だった祖父の影響もあり民主主義、それにまつわる思想・哲学に関心を持ち始めると、自分の立ち位置を明確にすること、中間でフラフラしているわけにはいかない、との想いにかられる事になった。1970 年前後の激動期は、毎晩学生や活動家たちと激論し、「自己否定」という言葉とともにまさにそのような葛藤の渦中であつたように思う。

しかし、25 年後に遭遇した阪神・淡路大震災での役割は、被災マンションの再建、地域社会の再編成といった課題の中で自然と中間的調整者としてのものであつた。そこでは、立場を補強して明確にするより、中間的な妥協点をいかにして構築するかが重要だった。それは、自分の天性が活かされる場でもあつた。その後、東日本、熊本、能登と次々と起こる災害被災地に出向いて、支援者も交えた話合いを重ねて来たが、すべてがグレーゾーンの中で、そこから如何にして脱出できるかという思いで行われているということに気づいた。グレーゾーンこそ常態なのに、なぜグレーゾーンに耐えられないのか？この間の私たちの議論は、そのような実態の中で生まれているのだと思いました。グレーでええやんか。私は、グレーゾーンが大好きです。

■ 参加者の声

何のためにボランティア活動をするのか

藤原 ゆうな（神戸大学国際人間科学部 4 年・ESD プラットフォーム WILL）

第 8 回 ESD 実践研究集会の「企画づくりワークショップ」では、僭越ながらユースチームのグループファシリテーターの 1 人として参加させていただいた。

初対面の方々とワークショップのファシリテーションということで、うまくできるのかという不安がかなりあったが、始まってみればグループメンバーは所属も関心も全く異なる人たちで、一体どんなものが生まれるのだろうとワクワクを感じながらワークショップが始まった。

ワークショップを通してできた企画はグループメンバーそれぞれの興味関心が色濃く出、多様なテーマが複数重なったものになった。様々な意見や情報交換もできとても有意義な時間だった。

一点、「ボランティアをすることは素晴らしいことだ」ということを前提にして話し合いが進んでいた印象を受け、いま一度「何のためにボランティア活動をするのか」を考え直してみたい。

「ボランティア」という言葉自体に良いもの・素晴らしいものというニュアンスがついてしまい、その言葉を使うことによって、その活動を進めることに自分や相手を納得させてしまう危うい一面を感じた。

善意に基づいたボランティア活動が、価値観の押し付けになってしまうことやその活動先の状況にそぐわないなど却って好ましくない影響を与えてしまう可能性も考慮しながら慎重に活動を組み立てなければならないのだと思う。

一参加者にとってもそうだが、特に活動を企画する側に立った時、その活動によって取り組もうとしている課題を明確にし、その活動が社会に与える影響や効果についてしっかり見極める責任があると思った。「批判的思考が重要だ」と大学入学以降何度も聞いたが、改めて心に刻みたい。

では「何のためにボランティア活動をするのか」。ボランティア活動は、報酬と活動の意味を与えたらくれる人がいないので、「何のためなのか」を考え続けるものなのかもしれない。

第 8 回 ESD 実践研究集会 基調講演レジュメ

2026 年 3 月 20 日

ESD のロマン

～当事者性の変容を生む実践を そして 草の根の社会運動を生み出そう

松岡広路 (RCE 兵庫-神戸・神戸大学※)

1. 「持続可能な開発」理念の意味づけのゆらぎ

- ・国連環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）（1984～1987）
「将来の世代の欲求を満たす能力が損なわれることなく、現在の世代の欲求を満足させるような開発」（『Our Common Future』1987）
経済成長の復活・質の変化、基本的ニーズの充足、地球的な環境問題
- ・成人学習に関するハンプルク宣言（1997）における位置づけのゆらぎ
「エコロジカルな SD」「環境の持続可能性」「sustainable and equitable development」

2. ゆらぎの延長線上にあった DESD「国連 ESD の 10 年」（2005～2014）

Education for Sustainable Development をめぐる解釈のゆらぎ

- ・「For が重要」とあえて言わざるをえない状況（国連大学元総長ハンス・ファンヒンケル、第 3 回 ESD 国際会議，2009）
- ・「持続可能な開発」というわかりにくい言葉への理解の必要性
環境教育（EE）と ESD の違いや関係性への問い
「on」「of」も同時に必要との意見も

3. SDGs（2015～2030）の登場

カオス（混沌）と表現された「持続可能な開発」に関する問題をテーマ別・解決目標別にカテゴリー化

- ・ステークホルダー（権能を持つ人々）による変容 ＝権能者中心主義・権力主導主義
 - ・科学技術の発展・法システムの変化による問題の解決 ＝ツール主義
- 拙速な変革と主体としての人間の疎外の危険性
バランスの悪い偏った変化・変容 〈こちらをいったん立てて、あちらは後回し〉
〈いまを生きる、脆弱な、マイナーな人々〉の疎外・フォロワー化
AI の登場による新たな人間疎外

→逆説的だが、複数の異なる問題やテーマを総合的・調和的に解決する新しい実践・仕組みへの期待が高まる

※ 2026 年 3 月時点。

■ 資料集

活動の連動・連関の進展 & 摩擦・矛盾の止揚（超克）→反復的かつ連鎖的な動きによるパワーアップへの期待

創発・普及・教育（学び）の方法論の質的変容が生まれるかも

総合的かつ弁証法的な Transform の方法論発見への期待 =ESD？

参考：日本社会教育学会編『SDGs と社会教育・生涯学習』東洋館出版社，2023

4. RCE 兵庫-神戸（ESD 推進ネットひょうご神戸）の研究実践テーマの変遷

2007 年 8 月 RCE 兵庫-神戸 国連大学に認証

2009 年 3 月 ESD シンポ in 神戸 開催 対談：モハマド・ユヌス vs 阿部史郎
テーマ「開け！ESD」 賀川豊彦献身 100 年事業とのコラボ

2012 年 4 月 本会の通称「ESD 推進ネットひょうご神戸」に

2014 年 11 月 ESD グローバル会議（あいち）・総括会議（岡山）

2015 年 12 月 ESD カフェ テーマ「ESD を促進するライフスタイルとは？」

2016 年 9 月 第 1 回 ESD 実践研究集会

テーマ：「ESD とはなにか？」

分科会テーマ

- ① E(education:教育)からのアプローチ
- ② S(sustainability:持続可能性)からのアプローチ
- ③ D(development:開発・発達)からのアプローチ

2017 年 9 月 第 2 回 ESD 実践研究集会

テーマ：地域・社会のつながりはどんな ESD を生むのか？

分科会テーマ

- ① 「い」から （衣・医…）
- ② 「しょく」から （食・職…）
- ③ 「じゅう」から （住・銃・獣…）

2018 年 9 月 第 3 回 ESD 実践研究集会

テーマ「大研究 SDGs！」～SDGs は、だれが、どこで、どうやって進めるの？ ESD と SDGs の関係を問う

分科会テーマ

- ① SDG 1～6 の理解から
- ② SDG7～12 の理解から
- ③ SDG13～17 の理解から

2019 年 9 月 第 4 回 ESD 実践研究集会

テーマ「続・大研究 SDGs！」～あらゆる人が SDGs 運動の主体となるには？

分科会テーマ

- ① SDGs と人材育成～必要なのは教育？マネジメント？行政？
- ② SDGs を進める出会いの方法～ユースと他世代の交流をどう生み出す？～
- ③ 市民社会と SDGs～市民の「皮」をはぐと…～

■ 資料集

- 2020 年 9 月 第 5 回 ESD 実践研究集会（オンライン）
テーマ「with コロナ社会の ESD 活動」
- 2021 年 9 月 第 6 回 ESD 実践研究集会（オンライン）
テーマ「ネットワーキングの 4 次元化－新しいつながり方と SDGs－」
- 2022 年 11 月 日本福祉教育・ボランティア学習学会第 28 回研究大会
テーマ「響きあうふくしと学びと SDGs～今、改めて、つながりを問う」
- 2024 年 12 月 第 7 回 ESD 実践研究集会
テーマ「再開する ESD、再会する実践者たち ～〇〇〇のススメ～」
分科会テーマ
① 5 年後の未来を描く
② 30 年後の未来を描く
③ 100 年後の未来を描く

5. E にこだわる ESD 論

E=Education（教育・学び） Empowerment（エンパワメント） Encounter（出会い）
…新しい「E」の探究

学校・学校外の枠組みを超えた、世代間の分断を超えた、人間の創造的・共同的行為の復権・再興・新生

ESD の創発（emerge）へのロマン

=SD に関する多種多様な問題・テーマについての

Inclusive（包摂的）、Critical（批判的）、Reflective（反省的）、Communal（相互親和的）、Dialectical（弁証法的）、Dialogical（対話的）、Holistic（全体的）、Systemic（相互連動的・包括的）、Cross-boundary（越境的）、Transformative（変容的）、Active（行動的・活性的）、Future-oriented（未来志向的）な人（個・集団・コミュニティ）の学びが有機的なかたまりとなって生まれる

6. キーワード「当事者性」

「わがこと意識・自分事意識（Ownership）」の必要性という問題意識からの展開

多種多様な問題・テーマ群についての意識・行動・態度・知識の変化と、問題・テーマ群をめぐる現実の関係性の変化・変容を、一体的に捉えるために、何か適切な言葉はないか？

「当事者性（Tojisha-sei）」

ある問題・テーマ・パラドックスとの関係性（距離）

身体的つながりの程度、意識化の度合い、人間関係とのつながりの程度、イベントや具体的な活動への参加状況、関係する知識や情報の保有の程度、希望・未来志向性の保有の程度、などを要素

「当事者性の変容」 複数の当事者性の総合的かつ調和的な変質・変化

学び（価値・スキル・態度・行動・知識の変化）＋

現実の社会関係・社会規範・倫理・慣習の変容・変質

参考：後藤聡美『当事者性の邂逅から共生へ』春風社，2025 年 2 月

7. 当事者性の変容過程の多様なパターン（要研究）

当事者性の邂逅 ある時空間で、偶発的に吐露された当事者性の要素が、その場の構成員によって相互認知され、ドラスティックな当事者性の変化が生まれる現象
当事者性の交差 異なる当事者性が部分的に接触し、複数の当事者性が同時に変容したり、新たな当事者性が発現したりする現象
（こうしたパターンは、具体的な実践から発見すべきもの これからの実践研究に期待）

8. 「当事者性」の変容を生む実践の在り処は？

- A. 狭義の教育モデル：当事者性の特定の要素（または要素群）への計画的な刺激や介入による意図的な変化を主とする当事者性変容モデル
近代教育モデル（学校教育・職業教育・目的合理的社会教育）、大衆啓発・扇動モデル
- B. 自由と偶然性を基調とした広義の教育モデル：同じく、計画的な刺激や介入を前提とするが、脱管理的な多元的变化を好意的に受容・想定する当事者性変容モデル
脱近代教育、社会教育、ノンフォーマル教育、体験学習
- C. 脱教育モデル：当事者性の邂逅・交差の可能性を意識しつつも、企画段階から自由と主体性を尊重し、どの当事者性の、どの要素が刺激しあうのかを偶然に任せ、自然増殖的に当事者性が変化・発展することを期待する当事者性変容モデル
ボランティア活動 「新しい社会運動」 イベント学習 ふくし活動 趣味・余暇活動
ESD に期待される、人類にとって未知なる持続可能な開発の具現化した社会・文化・生き方を追究するには、A・B・C が「ごちゃまぜ」と思えるほどに多層多元的に組み合わせり互いに影響しあうような「ごちゃまぜ学習社会」の形成が求められるのではないか。
今、特に、われわれが実践的かつ研究的に探究すべきなのは、どのような当事者性の変容が持続可能な開発、発展または社会づくりに資するのか、そして、どのような「刺激」「介入」および「企画」がすでに立ち現れていて、さらにどのような取組・実践が企画されるべきか、である。そうした意味で、A・B・Cを「ごちゃまぜ」に検討しあう時空間として「ESD 実践研究」が発展することに期待を寄せたい。

〈具体的な問い〉

当事者性の邂逅・交差が生まれる可能性を高める場づくりの条件は？ 具体的な実践の枠組みは？ 時空間／関与者・参加者／ツール／仕掛け（刺激／介入）／テーマ・問題
当事者性の邂逅・交差が生まれる可能性を高める環境や場が、さらに連鎖・連動して既成の社会や文化を突き動かすべく発展するには、どのような「企画」が求められるのか？

9. 実践仮説 ネットワーキングと ESD の融合のためのプラットフォームづくり

阪神淡路大震災以後のボランティア・市民のネットワーキングによる社会運動と ESD を、いかにつなげていけるのか？ 点が線となり面となり立体となり…
※ネットワーキング 脆弱性・時限性・相補性・自発性を特徴とするコラボ・コープによるつながり増殖の様態またはそれを特徴とする社会運動
参考：金子郁容『ネットワーキングへの招待』中公新書、1986
高田昭彦「ネットワーク形成と草の根運動」『組織科学』20 巻 3 号、1986

■ 資料集

栗原彬他『講座差別の社会学』弘文堂, 1996

事例1：ネットワーキングを活性化する場としてのプラットフォームづくり事業

NPO・ボランティアのネットワーキングから生まれる ESD

具体的仕掛け：ESD スタディツアープログラム協働事業、ESD カフェ、車座
トーク、ESD 実践研究集会、神戸大学 ESD コース、団体コラ
ボ事業、ESD プラットフォーム WILL

事例2：「ネットワーキングの4次元化」を促進する異次元間のつながり企画

スピリチュアルな活動・宗教活動・ラディカルエコロジー運動とのネットワー
キングから生まれる ESD

具体的な仕掛け：?? 被災地、スラム…いのちの在り方が問われるフィールド

10. ESD とは草の根の社会運動である

ネットワーキングもプラットフォームづくりも、実は、「自立共生」的なコミュニティが
前提とされる。つまり、健常者・近代的自立度の高い人のモデル。インクルーシブ(包摂的)
な学びとどのように整合しえるか？

ESD プラットフォーム WILL：

脆弱性をもつユースを中心に、インクルーシブ(包摂的)でありながら、内外の
互いの当事者性の連鎖によって持続可能な社会づくりの集合的な力が生まれる
ような場づくりを、自ら実践・研究する実験的プロジェクト

時間をじっくりかけて、場が熟成されるのを待つほかないのか…

→実は、近代合理主義へのアンチテーゼ・ジンテーゼが熟成されることになるのでは？

ESD の再解釈

1. 持続可能な開発という未知の理想を探究しようとする動きを、どんなことがあつて
も、根を絶やさず、柔軟に、しぶとく残し続けるための息の長い実践

2. 近現代という時代と同じくらいの時間をかけて、徐々にオルタナティブな社会文化
が創発することに、希望を抱けるような実践

= 「草の根」的な社会運動・文化運動のキーワードとしての ESD

すなわち、not only ESD=SDGs のツール but also SDGs=ESD 運動のツール

具体的に、どのような仕掛けや企画によって、当事者性が豊かに変容し、互いに重なり連
鎖し、やがて、社会や文化を突き動かすことになるのであろうか。

本実践研究集会で、その萌芽または可能性をともに感じ取りましょう！

参考：松岡広路「SDGs 運動に呼応する学習・組織論～当事者性学習論へのパラダイム・
シフトをめざして」日本社会教育学会編『SDGs と社会教育・生涯学習』東洋館
出版社, 2023, pp62-74

松岡広路「スピリチュアルな学びとふくし教育」『日本福祉教育・ボランティア学
習学会紀要』vol.45, 2025, pp74-88

ESD・RCE リレートーク（ポスターセッション）発表者一覧

ブロック A			
	氏名	所属	タイトル
A-1	飯島 園子	CS 神戸	地域共生拠点・あすパークが目指していること
A-2	井出山 沙織	公益財団法人大吉財団	企業と学生がつくる、神戸の未来へつなぐまちづくり：BEKOBЕ 大学における実践型 ESD の取り組み
	足田 奏人	甲南大学	
	柏木 碧	神戸市外国語大学	
	河野 稜大	甲南大学	
	Tran Thi Huyen	流通科学大学	
	仲橋 千恵子	甲南大学	
A-3	稲垣 礼	神戸海星女子学院高等学校 2 年	南海トラフ地震に備える：自然災害後の青少年の精神疾患からの回復
A-4	岩橋 嘉大	兵庫県立青雲高等学校（教諭）	教員のエージェンシーが創発する研究コミュニティの可能性：高等学校「社会系教科」研究会の分析を手がかりとして
	東田 卓也	兵庫県立篠山鳳鳴高校（教諭）	
A-5	岩本 和也	兵庫県立須磨友が丘高等学校（教諭）	地域と協働する探究学習の実践：学校設定科目「須磨から未来へ」における生徒主体の地域プロジェクト
A-6	白根 愛子	神戸大学人間発達環境学研究科修士 1 年	WILL のごちゃまぜ ESD その 1
A-7	末廣 晃	神戸大学文学部 3 年	WILL のごちゃまぜ ESD その 2
A-8	藤原 ゆうな	神戸大学国際人間科学部 3 年	WILL のごちゃまぜ ESD その 3
A-9	大久保 直太朗	横代中学校 3 年	にわとりキャンプ 2025：にわとりから学ぶ、食べ物と命
	大和久 琉央	西日本工業大学 1 年	
	奥 悠耶	福岡工業大学 3 年	
A-10	奥村 周	あしや部	地元芦屋の魅力発信！
	山口 心歌		
	吉見 千花菜		
A-11	尾崎 優子	神戸常盤大学	外国にルーツをもつ子どものヘルスプロモーション：看護系大学主催「多文化子育てサロン」による Cross-border Partnership の展望
	横山 利枝		

■ 資料集

A-12	越智 郁香	神戸海星女子高校 2 年	あすパ・ユース震災語り部隊の活動紹介
	山村 哲徳	国際高校 2 年	
	山本 ゆな	神戸常磐女子高校 2 年	
A-13	春日 清乃	RCE 北九州（北九州 ESD 協議会）	北九州 ESD 協議会の実践報告
A-14	川上 寛人	岡山理科大学大学院理工学研究科修士課程 1 年	次世代ユネスコ国内委員会
	谷垣 徹	次世代ユネスコ国内委員会	
A-15	木崎 達也	岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク	私たちが学生ボランティアを続ける理由
	田中 聖愛		
	山下 優佳		
A-16	黒木 宏太	日本コムシンク株式会社	社会貢献アプリ actcoin について
A-17	小田中 美穂	教育アドバイザー	未来をデザインするキャリア教育授業
A-18	後藤 聡美	RCE 兵庫-神戸／神戸大学	マルチステークホルダーの共創を促進する ESD 推進ネットワークの仕組み
A-19	小牟田 尚美	一般社団法人 海の郷	山から海にプレゼントを贈ろう
	末広 佳子		
	藤田 桃子		
	牧理 恵子		
A-20	佐野 頌太	灘高等学校 1 年	「服の交換会」への参画を通して
A-21	柴川 弘子	岡山大学	役割随伴的参加はなぜ変容を阻み、かつ生むのか： ESD ネットワークにおける制度的参加構造の両義的機能：10 年間の協働型アクションリサーチよりー
A-22	柴田 幸子	CS 神戸／生きがい活動ステーション	身近なアート・文化で地域貢献
	兒玉 千明		
	新藤 里恵		
A-23	田井中 翔稀	甲南高校 1 年	つくる地域社会
	松尾 永利		
A-24	高尾 千秋	camplife ひらかた市民活動支援センター	リスキープレイとプレーパーク

■ 資料集

ブロック B			
	氏名	所属	タイトル
B-1	高田 真弥	甲南高校 2 年	芦屋グローバル広場
	白川 清文		
	富上 壮太		
	吉田 諭史		
B-2	高田 知紀	兵庫県立大学／ 兵庫県立人と自然の博物館	妖怪のエコロジー
B-3	高谷 美優	神戸海星女子学院高等学校 2 年	名塩和紙と日本酒で西宮南北を結ぶインバウンド誘致の提案
	杉光 美咲		
	利根川 実		
B-4	谷口 隆英	関西学院大学／ZBOSAI 合同会社	探究を入り口にした学校防災伴走支援プログラム・外国人防災リーダー育成プログラム
B-5	玉井 知世子	NPO 法人日本シニアデジタルサポート協会	対話を重視した場の実践は、参加者にどのような変化をもたらすのか
B-6	塚本 美紀	西南女学院大学	THE CIRCLE：プロギング in 北九州
	峯 夢実	西南女学院大学 2 年	
B-7	得田 佳那	神戸大学国際人間科学部 2 年	ESD に触れ合う空間づくり
	上田 幸輝	神戸大学国際人間科学部 3 年	
	岡崎 実依子	神戸大学国際人間科学部 2 年	
B-8	内藤 理彩	神戸海星女子学院高等学校 2 年	災害発生時の避難所運営を担う高校生の育成
	加古 昌那		
	上辻 りな		
	森田 真央		
B-9	長坂 資弥	中部大学 4 年	耕さない農業
B-10	西谷 寛	海と空の約束プロジェクト	環境カウンセラー、防災士としての活動の紹介
B-11	西田 真衣子	兵庫教育大学大学院 1 年生（姫路市立高岡小学校）	地球温暖化と、わたしたちにできること —小学校の英語授業「can」で考えてみよう—
	岩見 理華	兵庫教育大学	
B-12	野崎 晴貴	特定非営利活動法人岡山 NPO センター	NPO 法人岡山 NPO センターの ESD・SDGs に関する取組とその成果
B-13	野崎 隆一	特定非営利活動法人神	能登半島地震 住民主体のまちづくり支援

■ 資料集

	北村 胡桃	戸まちづくり研究所	
B-14	橋本 瑞穂	広島県立庄原格致高等学校（教諭）	「教えることで学ぶ」小学生 STEAM 教室 — 小学生支援活動にみる ESD 実践の広がり —
B-15	蛭田 由枝	RCE 岡山（岡山 ESD 推進協議会）／ 岡山市役所 SDGs・ESD 推進課	RCE 岡山 20 年のあゆみ
	川上 莉佳		
	梶原 申士		
B-16	深尾 帆花	兵庫県立伊丹高校 2 年	チ。ー地表面の変化から地震の発生源を探せー
B-17	古澤 礼太	RCE 中部／中部大学	流域圏（water-region）における SDGs 推進情報の可視化
	安部 大樹	RCE 中部／三重大学	
	中島 稜太	中部 ESD 拠点	
B-18	松野 亜希	兵庫教育大学大学院 1 年	へちまの栽培活動からひらく ESD — 子どもたちの気候変動への一歩
	岩見 理華	兵庫教育大学	
B-19	三坂 綾美	北九州市立大学 3 年	未来志向を育む～児童期からの ESD 実践とその可能性～
	前田 渚	北九州市立大学	
B-20	三苫 利光	クラーク記念国際高等学校	不登校生徒に有効な体験活動
B-21	三宅 優佳	兵庫県立人と自然の博物館	博物館ができる過程を共有する～甕ミュージアム開館準備の実践～
	石川 弘樹	薩摩川内市甕ミュージアム	
	山下 大輔		
B-22	宮本 睦太	灘中学校 3 年	部活革命 in KOBE
B-23	森口 大世	ibipio	企業向け生物多様性研修 ～林業ネイチャーポジティブ研修の実践～
B-24	山村 けい子	兵庫大学短期大学部 保育科	地域子育て支援 – 保育科学生と地域団体との協働による実践 –
B-25	吉永 徠愛	西南女学院大学生 2 年	Project Neuru：いろいろな国の視点から考えるスマートシティ

地域共生拠点・あすパークが目指していること

飯島 園子（CS 神戸）


 認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸
COMMUNITY SUPPORT CENTER KOBE

地域共生拠点

あすパーク

人々がつながる「場」、学びと実践がつながる「場」
そして地域課題が解決する「場」、それが「地域共生拠点・あすパーク」です




ココです
JR六甲道駅から
東南に徒歩8分

■運営：認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸（CS神戸）
 ■設立の経緯：阪神・淡路大震災をきっかけに、これまでに地域交流・課題解決につながるグループを1,000以上創出。震災25年を機に、民設民営の施設としてあすパークを開設し6年目

これまでの実績※

※2025年12月現在



来場者
のべ **41,000人**



子どもボランティア
のべ **570人**



利用団体
146団体

活動概要

多世代交流・居場所



- ・みんなの居場所：4団体
- ・震災の経験をつなぐ：1団体
- ・バリアフリーの交流の場：2団体
- ・文化・アート：6団体
- ・学び・つながり：4団体

ほか 多数

課題解決のグループの創出



- グループ創出のための講座：3件
- 創出されたグループ
 - ・孤食をなくし交流を：あすパーク食堂3団体
 - ・小学生の放課後の居場所：1団体
 - ・ケアラーの為の交流の場：1団体
 - ・余剰食材を子ども食堂等に配達：1団体

私たちの目指す姿

地域の課題をクロスセクターで解決



- 課題
高齢化、孤独、引きこもり増・複雑化
- 求められていること
地域住民の社会参画の機会づくり
- 私たちの目指す姿
私たちNPOや、行政・企業・学校等の各セクターが強みを活かし、つながりづくり・地域の活動者を増やすことで地域課題の解決につなげていきます

企業と学生がつくる、神戸の未来へつなぐまちづくり

足田奏人（甲南大学）・河野稜大（同）・仲橋千恵子（同）、柏木碧（神戸市外国語大学）・
チャンティフエン（流通科学大学）・井出山沙織（大吉財団）

BEKOBECOLLEGE2025

企業と学生がつくる、神戸の未来へつなぐまちづくり - BEKOBECOLLEGE大学における実践型ESDの取組み -

甲南大学 足田奏人・神戸市外国語大学 柏木碧・甲南大学 河野稜大・流通科学大学 チャンティフエン・甲南大学 仲橋千恵子・大吉財団 井出山沙織

背景



地域社会では若者の地域参画と
企業連携の重要性が高まっている。
一方で、学生が地域企業や
社会活動と関わる機会は十分ではない。

目的

本グループの研究では、学生・企業・地域をつなぐ
実践型プログラム BEKOBECOLLEGE大学を対象に
地域連携型ESDの可能性を検討することを目的とする。

多様な価値観の理解
企業交流会の実施

主体的な行動
企業連携プロジェクト

社会課題との接点
神戸こども宅食PJ

ESDの要素を複合的に学べる実践的なモデル

BEKOBECOLLEGE

企業交流会の実施



BEKOBECOLLEGE大学に参加する学生へのアンケート
において、80.6%が「地元企業と交流する機会を求めている」という結果を得た。企業交
流会を開催した。
本交流会では、企業担当者より事業内容や地
域との関わり、仕事の魅力について紹介した
り、その後、学生との意見交換や名刺交換
方式による交流を実施した。
本取組により、学生にとっては地域企業への
理解を深める機会となり、企業にとっても学
生との新たな接点創出の場となった。



多様な価値観の理解
地元企業とのつながりの創出

会場：KOBECOCREATIONCENTER

企業連携プロジェクト

地元企業と連携し地域貢献を促した商品企画やプロモーションを学生が
主体となって実施。本取組は全4回のグループワークおよび発表形式で
行われ、10名以上の学生が参加した。
株式会社ワールド・ワン（本社：兵庫県神戸市）と連携し、「まちを盛り上げ
るドーナツ」をテーマとした商品企画やプロモーションに取り組み、ターゲット設定、
商品企画、販路開拓の立案まで一連のプロセスを実施した。さらに企業課
員との意見交換やフィードバックを受けながら企画をブラッシュアップす
ることでも実際のビジネスの現場を学んだ経験を得た。
本取組により、学生にとっては企業と協働しながら課題解決に取り組む
実践的な学びの機会となり、企業にとっても学生の成長を促した新たな
接点創出の場となった。



主体的な行動
企業連携で取り組む実践的な学び

会場：KOBECOCREATIONCENTER

神戸こども宅食プロジェクト

神戸こども宅食は、生活に不安を抱える子育て世帯に対し、食品や日用品
を無料で提供し、食生活の安定を支援する活動。企業や個人から寄付された物資を活用し、地
域・行政・市民が連携して実施している。
本取組ではBEKOBECOLLEGE大学の学生をきっかけに学生がボランティア
として活動に参加し、食品の梱包作業やメッセージカードの作成を行った。
活動を通じて、食料支援や生活困窮者に対する支援の仕組みや地域における生活課題につ
いて理解を深めるとともに地域とのつながりを実感する機会となった。
また継続的に参加する学生もみられ、継続の参加にとどまらず、地域課題
への関心や主体的な関与の意識が高まる場が創出された。
本取組により、学生にとっては社会課題に直接関わる実践的な学びの機
会となり、地域における支援の担い手としての意識の醸成につながった。



社会課題との接点
地域貢献の担い手への意識醸成

会場：デザインクリエイティブセンターKIITO

結果

本取組を通じて、学生においては地域企業や地域社会への理解の向上が見られ、商品企画や企業との協働、社会貢献活動への参加を通じて主体的
に課題に関わる姿勢が育まれた。
また、BEKOBECOLLEGE大学への参加をきっかけに神戸こども宅食などへ継続的に関わる学生も見られ、地域課題への関心の高まりと行動変容が確認された。
一方で企業、学生との協働を通じて新たな視点やアイデア創出につながる可能性が示された。
以上より、本取組は学生・企業・地域の相互作用を通じて、実践型ESDとして有効に機能していることが示された。

考察

本取組の結果から、企業・学生・地域が連携することで、学生の主体的な学びと地域課題への関心が相互に高まることが示唆された。特に、企業
連携プロジェクトや社会貢献活動といった実践の機会を組み合わせることにより、知識の習得にとどまらない学びが促進されたと考えられる。
また、BEKOBECOLLEGE大学を契機として地域活動へ継続的に関与する学生が見られたことから、単発的な取組に比べて、継続的な関わりを生む仕組みと
して有効である可能性が示された。一方で、参加学生の経験や関与度には差が見られることも想定され、今後はより多くの学生が主体的に関わる
仕組みづくりや、学びの定着を図る工夫が求められる。

結論

本取組により、BEKOBECOLLEGE大学は企業・学生・地域をつなぐ実践型ESDの場として、学生の主体性の向上や地域課題への関心の醸成に寄与するこ
とが示された。また、企業との協働による商品企画や社会貢献活動への参画を組み合わせることで、知識の習得にとどまらない実践的な学びが促進
され、学びと実践を往還する教育効果が得られる可能性が示唆された。
今後は、取組の継続と拡充を通じて、より多くの学生の参画を促すとともに、企業・地域との連携をさらに深化させることで、持続可能な地域づく
りに資する人材育成への発展が期待される。

南海トラフ地震に備える ～自然災害後の青少年の精神疾患からの回復～

稲垣 礼（神戸海星女子学院高等学校 2 年）

南海トラフ地震に備える～自然災害後の青少年の精神疾患からの回復～

神戸海星女子学院高等学校 稲垣 礼

【研究背景】 背景①世界の災害時における精神疾患の発生状況 世界や日本で発生した災害後の精神疾患患者の状況について調べた。以下がその状況を表にまとめたものである。どの自然災害においてもPTSDやうつ病などの精神疾患が多いことがわかる。 ハイチ地震(2010) 台湾地震(1999) 新潟中越地震(2004) 精神的困難が起こったか 参照：「2010年ハイチ地震の生存者のメンタルヘルス」「1999年台湾地震生存者の長期的心理的影響：財産被害を受けた高リスクサンプルの調査」「災害時の精神症状と対応に関する一般的事項」	【先行研究】 ・金吉晴(2017)は「災害は人命や家屋の喪失、地域のインフラや産業への甚大な被害をもたらし、生活再建や地域復興に長い時間が必要になります。その過程の中で、被災者はさまざまな心理的影響を受けることになります。被害の大きさと支援の少なさが影響して、心的外傷後ストレス障害（PTSD）や、うつ病などの精神疾患を抱えてしまう方もいます」と述べている。 ・山本あい子(2019)は「高齢者は被災後、慢性疾患の悪化や心的外傷後ストレス障害（PTSD）やうつ病の合併など、身体的・精神的脆弱性を有しています」と述べている。 ・イリノイ大学社会福祉学部(2021)は「ハリケーン、山火事、津波、テロ攻撃などの突然の災害は、生存者に心的外傷後ストレス障害（PTSD）、うつ病、不安などの悪影響をもたらす。子どもや青少年は、こうした出来事に対処する経験や知識が少ないため、こうした災害後の精神衛生上の問題に最も脆弱な立場にある。逆に、仲間からの社会的支援、学校でのつながり、支援的な子育て、問題解決能力、自己制御能力、自己効力感の知覚、および良好な母子関係などの保護要因は、大規模で突然発生する災害の心理的影響を緩和することができる。」と述べている。
【目的】 災害後に見られる精神疾患の中でも特に、災害との因果関係があり、個人と社会に著しい損害をもたらす外傷後ストレス障害（Posttraumatic stress disorder: PTSD）の問題に焦点を当て、自然災害によるPTSDやうつなどの6-18歳の青少年精神疾患患者に対する、患者の家族や友人、教員、地域住民などや学校による回復へ向けてのより良い支援を明らかにする。	
【方法】 1.文献調査 自然災害後の精神疾患患者の回復を促すサポート体制に関する文献を調査する。 2.「2025年度 神戸市 こころのサポーター養成研修」への参加	
【結果】 1.文献調査 ・アイルラング大学看護学部は「地震後のPTGを促進し、PTSDを軽減するために、医療専門家は青少年が前向きな態度を形成し、自尊心を高めるのを助ける社会的支援の・徳吉陽河(2025)が以下のように述べている。 改善に重点を置くべきだ。」と述べている。 「研究によると、PTGは主に次の5つの領域で現れることが確認されています： 1.他者との関係性の深化 人間関係の価値を再認識 親密さやつながりの増加 共感力と思いやりの向上 2.新たな可能性の発見 新しい興味や道筋の発見 人生における新たな選択肢の認識 キャリアや生き方の変更 3.個人的強さの認識 自己効力感の向上 逆境への対処能力への信頼 脆弱性と強さの共存の受容 4.精神的・実存的な変化 人生の意味や目的の再評価 宗教的・スピリチュアルな深まり 実存的な問いへの取り組み 5.人生への感謝 日常の小さなことへの感謝 命の価値の再認識 現在の瞬間をより大切にする ・北川 清一郎(2025)は「トラウマインフォームドケア（TIC）とは、支援に携わる人たちがトラウマについての知識や対応を身に付け、支援の対象となる人たちに「トラウマがあるかもしれない」という視点を持ってかわかる支援の枠組みのことです。トラウマインフォームドケアが目指すのは、トラウマに関する理解を基盤に、援助を受ける人だけでなく援助者の心身の安全も重視して、支援関係をいよものにし、トラウマの再体験やトラウマによる無力感から抜け出し、自己有力感やコントロール感を回復させることです。トラウマスペシフィックケア（Trauma Specific Care）はトラウマが重篤で、トラウマ症状に特化した介入が必要と判断された場合につなげられるケアです。PTSD症状の軽減に効果的認められた心理療法などを通じた支援が行われます。」と述べている。 ・兵庫県(2025)によると「園芸療法とは、農業や園芸が人の精神や身体へ与える効用に注目して、高齢・障がいなどの理由で支援を必要とする人々に対して、健康の増進や生活の質の向上などを目的として行う療法です。園芸療法の社会的な効果:植物を育てることを通じて、社会性を高め、周囲の人々との共感や、コミュニケーションを促進します。」と示されている。 2.2025年度 神戸市 こころのサポーター養成研修 関西福祉大学の藤原光志先生による「心のサポーターとは（活動など）、こころの病気の知識や回復、身近な人をサポートする方法、心のサポーターの4つのステップ」についての講演が行われた。また、講師の方の講演の中であった、聴き方のコツを1つ使ってお互いにちょっとした最近の失敗談を話して聴きあうという「聴く」ワークを行った。そして、「あなたの身近な人、ふだん接する人にどのように関わるか？」という質問に対して、心のサポーターの4つのステップに基づいて考える、「個人ワーク」と「ペアワーク」を行った。それぞれのワークを終えた後、ワークをしてみてどう感じたかという意見を参加者全員の前で発表した。	
【考察】 青少年(6-18歳)の自然災害後のPTSD状態から回復を目指すには、自然災害により経験される前向きな心理的変化である心的外傷後成長(PTG)を目指すことが効果的である。PTGには5つの領域があり、「1.他者との関係性の深化」に注目した回復において、「園芸療法」を学校に取り入れることが効果的であると考える。支援の対象となる人たちに「トラウマがあるかもしれない」という視点を持ってかわかり、その中で適切な知識を身につけた人は以下の4つの段階に分けて支援を行う。 1.心の不調に気づく」「2.声をかける」「3.話をきく」「4.サポート手段を伝える動める」 「1.心の不調に気づく」において、今回の対象者において考えると、災害前の支援者の普段を知っている必要があり、災害後に違う点を気づいてあげることが重要である。「4.サポート手段を伝える、動める」では全ての人が知っておく必要があり、広く社会にトラウマへの理解が行き渡ることが大切である。これらのことは学校で、先生はもちろん友達間でも気軽に伝える支援である。また、PTSDに効果的な療法である「園芸療法」は農業や園芸が人の精神や身体へ与える効用に注目して、高齢・障がいなどの理由で支援を必要とする人々に対して、健康の増進や生活の質の向上などを目的として行う療法である。社会的な効果に注目し、園芸を通して責任感を養い、植物を育てる喜びを高め、精神的なストレスも軽減する。これらのことから青少年(6-18歳)の自然災害の外傷後ストレス障害（PTSD）状態から回復を目指すには、園芸療法を学校に取り入れ、上記の4つの段階に分けて支援を行う方法を学ぶ場を作ることが効果的であると考える。	
【参考文献】 加藤寛(2020)「加藤寛先生に「災害時の精神的ケアについて」を訊く」日本精神神経学会https://www.jspn.or.jp/modules/forpublic/index.php?content_id=50(2026-01-23) 金 吉晴(2005)「災害後の中長期的心理社会的影響に関する研究」WHO https://www.wkco.who.int/docs/librariesprovider24/wkc-projects-documents/2018-jul-longterm-psychosocial-impact-ja.pdf?sfvrsn=97b3e197_8(2026-01-23) 山本 あい子(2019)「災害後の人々の健康維持・回復に向けたケア戦略の開発」WHO https://www.who.int/ja/resources/projects/item/development-of-specific-care-strategies-to-maintain-and-recover-survivors-health-after-disasters(2026-02-12) School of Social Work, University of Illinois, USA(2021)「Coping and Post-Traumatic Stress in Children and Adolescents after an Acute Onset Disaster: A Systematic Review」 https://www.mdpi.com/1660-4601/18/9/4865(2026-02-12)Faculty of Nursing, Universitas Airlangga, Indonesia(2020)「Support and PTSD in adolescents following earthquakes」 https://evidenceaid.org/resource/support-and-ptsd-in-adolescents-following-earthquakes(2026-02-13) 徳吉陽河(2025)「トラウマからの成長を目指すカウンセリング入門 心的外傷後成長（PTG）：概念・メカニズム・実践法 認定資格取得の参考に」ポジティブ心理カウンセラー協会 https://positive-counselor.org/news/(2026-02-13)Martina S. Galvan(2021)「A systematic research review: How to best treat post-traumatic stress disorder in children post-natural disaster」 https://www.tandfonline.com/doi/pdf/(2026-02-18) 北川 清一郎(2025)「トラウマインフォームドケア」（株）心理オフィスKhttps://s-office-k.com/technique/tic(2026-02-18) 兵庫県(2025)「園芸療法について」https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks24/wd26_000000015.html(2026-02-18)	

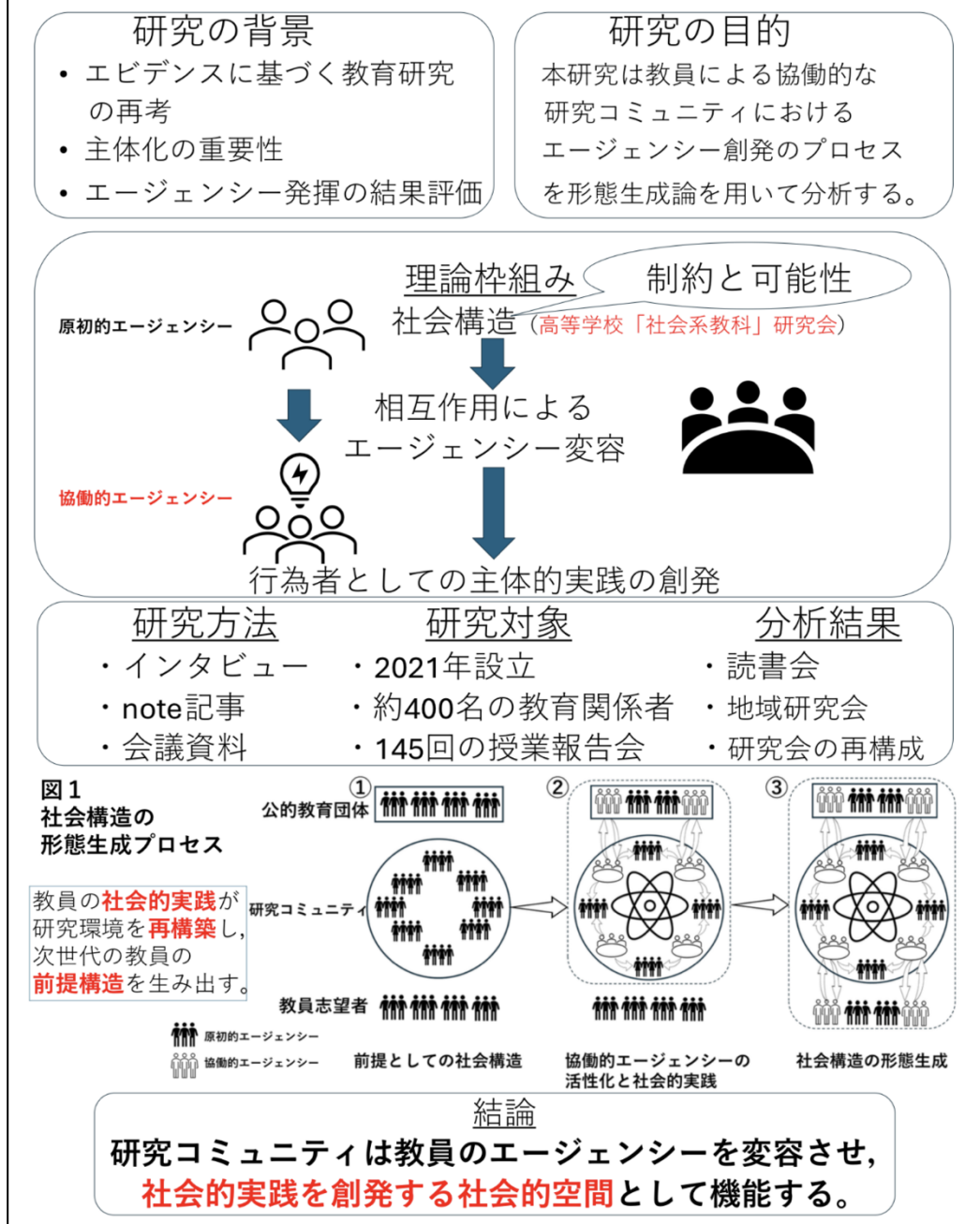
教員のエージェンシーが創発する研究コミュニティの可能性 —高等学校「社会系教科」研究会の分析を手がかりとして—

岩橋嘉大（兵庫県立青雲高等学校）

東田卓也（兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）

教員のエージェンシーが創発する研究コミュニティの可能性 —高等学校「社会系教科」研究会の分析を手がかりとして—

岩橋 嘉大（兵庫県立青雲高等学校）
東田 卓也（兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）



1. アーチャーの社会形態生成論の概要

本研究は、マーガレット・アーチャー (Margaret S. Archer) の社会形態生成論を視点として、教員による主体的・協働的研究コミュニティにおけるエージェンシーと社会構造の相互作用の分析を目的とする。具体的には2021年に発足した兵庫県「歴史総合」研究会の活動経緯や発展的改組の過程を概観し、会員の主体的提案に関するインタビューをもとに教員のエージェンシーの変容と公的研究団体の構造的再編や若手教員志望者への影響の質的解明を図る。

英国の社会学者であるアーチャーは、ロイ・バスカー (Roy Bhaskar) が示した「社会科学の転態モデル (TMSA)」に時間の視点を加えた¹⁾。これにより、人間の行為と社会構造が時間の中でどのように変化し、再生産されていくのかを説明した (図1)²⁾。

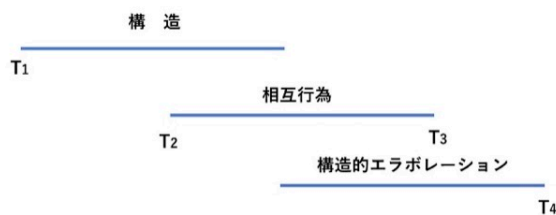


図1：形態生成の経過

アーチャーが提示した社会形態生成論の研究の意義としては、先在する社会構造が人間エージェンシーの能動的な働きかけによって維持されたり、作り替えられる創発的プロセスとしての分析を提示した点にある。すなわち、社会集団の構造的変革が個人のアイデアや主体的営為によっていつ進行し、それと相俟って人間エージェンシーがどのように変容することになるのか、そして諸結果としての社会構造の帰結をどのように説明できるのかを明らかにしたといえる。アーチャーの分析視点は、官製研修と比較することで、教員の研究コミュニティがもつ影響や特質を明確に捉えるうえで有効である。

2. 研究コミュニティの創発プロセスへの分析

(1) 公的教育団体への影響

高等学校「社会系教科」研究会は、教員の授

業研究を促進することを目的として創設された。その後、会員規模の拡大に伴い、兵庫県内の公的教育団体である兵庫県高等学校社会（地理歴史・公民）部会に対して、授業研究環境の再構築を促す影響を及ぼした。具体的には、新しい授業創りワークショップの実施、社会部会の役員の若返りや部会事業の参加者増加による活性化、研究紀要の授業実践コーナーの新設などの影響を指摘できる。

(2) 教員志望者への影響

研究会は若手教員志望者にもつながりや教育への希望としての影響を与えていた。リアルな教育現場に接する機会が限られる教員志望の学生にとって現職教員が授業づくりに苦悩する姿は研究会への参加動機を高めることになった。研究コミュニティにおける「出会い」は、教員志望者の教育への憧れや参画意識へと結実した。

(3) 研究コミュニティの意義

社会構造の再編に関わる視点から研究会の実態を分析すると、140回以上の実践報告の蓄積とともに教員による対面ワークショップなどの主体的提案が教員の問題意識を先鋭化させた。また、新しい社会的実践を促進していたことも示され、こうしたエージェンシーの活性化はマクロな視点から公的教育団体や教員志望者に影響力を持つようになった。教員のエージェンシーの変容プロセスは受動的特性をもつ原初的エージェンシーから能動的特性をもつ協働的エージェンシーへと活性化したと分析できる。したがって、研究コミュニティは教員のエージェンシーを変容させ、社会的実践を創発する社会的空間として機能すると説明できるのである。

参考文献

- 1) ロイ・バスカー、式部信（訳）『自然主義の可能性—現代社会科学批判—』、法政大学出版局、pp.38-50、2006。
- 2) マーガレット・S・アーチャー、佐藤春吉（訳）『实在論的社会理論—形態生成論アプローチ』、青木書店、p.94-109、2007。

WILLのごちゃまぜ ESD①

白根 愛子 (ESD プラットフォーム WILL/神戸大学人間発達環境学研究科修士1年)

ESDプラットフォームWILL

RCE Hyogo-Kobe Youth WILLのごちゃまぜESD ①

発表者：白根 愛子 (ESDプラットフォームWILL/神戸大学)

WILLのねらい

- 多様な人や団体とともに、「持続可能な開発のための教育 (ESD)」を推進していく組織
- あらゆる人が関わりながら「持続可能な開発 (SD)」を実現できる社会を創っていくための多層多層的な〈出会い〉や〈つながり〉のあり方・方法をメンバー自ら動きながら考え、社会に提案していく



学生・若手社会人を中心とする
RCEひょうご神戸のユース組織

2025年3月現在
メンバー：100名
ユーザー：37名

ESDプラットフォームWILL

ESD推進ネットひょうご神戸 RCE Hyogo-Kobe



ESDプラットフォームWILL 2026年度事業計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	WILL総会・WILLのつどい 田植え・茶摘み		能登ばんそうP		夏のワークキャンプ 能登ばんそうP		WILLのつどい つどいの広場整備		冬のESDプログラム 冬の農作業体験		春創成合宿 3.11大船渡赤崎訪問	
					★インクルーシブ ★グローバル		活動の誘いあい・送り出し、ツール開発 ありんこトリップ・きりぎりすカフェ					
通年事業	WILL定例ミーティング 各プロジェクトの進捗状況の確認や、プロジェクト推進に関わる審議事項を行う ・月に1回行う				WILL研究会 ・ESD/SDや、進行中のプロジェクトに関するテーマについてメンバー間で学び合う				季刊WILL ・活動報告や参加者のコメント、今後の予定などを掲載するWILLの機関紙 ・年に2回発行する			
									WILL22ラジオ ・メンバーをゲストに迎え、気軽に聞けるトークを発信 ・活動中以外のメンバーの知られざる一面を開ける ・月に1回行う			

■気にかかっていること・気にかきたいことを、対話と交流の中でゆるやかに共有する

■アクションを起こす構えづくり

■フィールドでの活動を通して、実践者と出会い、社会課題に触れる

■ワークショップ・ワークキャンプの技法を学び、実践する

■SDGsを問い直し、社会イノベーションの方法を考える

■ESDを実質化する新事業・プログラムの考案、社会への発信

WILLのごちゃまぜESD②

末廣 晃 (ESD プラットフォーム WILL/神戸大学文学部 3 年)

WILLの ごちゃまぜESD②

発表者：末廣 晃 (ESDプラットフォームWILL/神戸大学3年)

ワークキャンプ

ルーム



邑久光明園

実践のねらい

1週間の「夏のワークキャンプ」
多様な参加者とともに何かを成し遂げる経験
他者との共生や集団の力を感じる
ハンセン病の隔離施設があった島でワーク
→ハンセン病の歴史に触れ、伝えていく

具体的な活動

夏のワークキャンプ：夏休み1週間の合宿型ボランティアプログラム。
つどいの広場・門柱プロジェクト：邑久光明園と美山（京都府南丹市）のワークキャンプ実践をつなぐ。

災害復興支援

ルーム



大船渡 & 能登

実践のねらい

ボランティア活動を通じた、被災地の**十全な復興**と活性化
↑ ↓
国内外の災害に関する情報にアンテナを張る。
関連団体の活動への参加

具体的な活動

赤崎復興市：復興マーケットの設営・出店。
3.11慰霊のつどい：赤崎復興隊とともに準備。

能登半島でのボランティア活動：

仮設住宅でのサロン活動、海岸清掃など。

農村レジリエンス

ルーム



丹波篠山 & 加西

実践のねらい

「農」に触れ、現代の**ライフスタイル**を見つめ直す
農村に現れている課題にアプローチする

具体的な活動

ミチのムコウ主催イベントの参加 & サポート：
田植え・稲刈り等の体験活動をサポート。
住山地区との関わり：
・古民家を改修した「AZE HOUSE」でのプログラム実施。・集落のイベント（ワクワク農村）の準備手伝い & 参加。
加西市王子町でのボランティア：
営農組合の草刈り・米運びなどをお手伝い。

WILLのごちゃまぜ ESD③

藤原 ゆうな (ESD プラットフォーム WILL/神戸大学国際人間科学部 3 年)

地域の居場所づくりへの参加（よる・あーち、わくわくJOY+、お茶の間ぶちだがしやさん等）やWILL内の企画を通して、単に安心安全で心地よいだけでなくESDが生まれるような集団をつくる方法を模索するとともに、WILLの『プラットフォーム』としての在り方を考える。

☆ツールBOX作成会

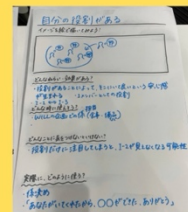
様々なフィールドで得た、居場所づくりのための『ツール』を共有し重ね合わせることで居場所づくりの手法を探求する。

☆誘い合い会

多様な活動に誘い合うことでメンバーの積極的な活動を促進し様々なテーマ・課題に触れることや、各活動の活性化を目指す。

居場所づくりルームの実践仮説

安心安全な「居場所」集団がESD推進母体に変化する → プロジェクト推進集団が「居場所」の機能を持ち始める。



居場所づくりルーム WILLのごちゃまぜESD③ & グローカルツアールーム

発表者：藤原 ゆうな (ESDプラットフォームWILL/神戸大学3年)



インディスタディツアー

インド・ムンバイのスラムに暮らす子ども達の自立支援活動。インドの文化・人々、差別・貧困問題に触れることができる。



☆ありんこトリップ

メンバーの興味・関心を出発点にした小規模トリッププログラムを行う。(インド・ムンバイ、山口県祝島、大阪市西成地区など)

☆きりぎりすカフェ

ありんこトリップへのお誘いや、トリップ後のふりかえりや各々の経験の共有を通してメンバーの興味・関心の交差を生み出す場。

多様な社会課題を抱える地域に足を運び、そこで生活する人びと・くらし・コミュニティ・固有の課題や価値観に触れることのできるグローバル(地球規模の/地域的な)ツアーを企画・実施する。



にわとりキャンプ 2025 ～にわとりから学ぶ、食べ物と命～

奥 悠耶・大和久 琉央・大久保 直太郎（特定非営利活動法人 KID's work）

特定非営利活動法人 KID's work

にわとりキャンプ2025

～にわとりから学ぶ、食べ物と命～



団体紹介 特定非営利活動法人 KID's work

小学生を対象としてさまざまな体験活動の企画や運営とリーダー育成(中学生以上)をおこなっています。

■2025年実施した主な活動

あるきやん：北九州市内を2泊3日50キロ、キャンプをしながら歩き、まちの魅力を身体で感じる事業
防災キャンプ：シェルター、ロープワーク、防災クッキングなど災害時役立つワザを学ぶ夏休み3泊4日
にわとりキャンプ：にわとりのことを知り、学び、関心を高め、最後にさばいて食べる取り組みを通して食べ物と命のつながりを感じる



背景（企画担当者の想い）

近年の日本の食料廃棄量は年間約500万トン前後。これは国民一人あたり、毎日おにぎり1個分を捨てている量である。「食べ物は残さず食べる」よう育てられた私（企画担当者）は、こうした現状を実感する機会が、これまでほとんどなかった。

しかし、大学生になり飲食店でアルバイトを始めた際、当たり前のように食べ物を残す人達を目の当たりにし、衝撃を受けた。食べ物を残すことに抵抗がない人達は、食べ物と命の関わりを意識しておらず、子どもたちにもそのような教育はされていないのではないかと考えた。そこで、子どもたちに実際に命を食べ物にする過程を体験してもらうことで食べ物と命について学んでもらう活動を企画した。



活動内容（全5回）

■第1回 にわとりを見る/描く 日時：11/22 場所：玄海青年の家
若松よりどころの西嶋さんのところでにわとりを見せよう。ひよこや若鶏、親鳥。それぞれの違いを観察したり、ひよこを触らせてもらったり。エサやりやいくつかの質問のあと、にわとりの絵を描く。

■第2回 にわとりを学ぶ 日時：12/6 場所：玄海青年の家
にわとりに関することを授業形式で学ぶ。テーマは「にわとりの歴史」「食べ物としてのにわとり」「生き物としてのにわとり」。大学生スタッフが中心となり講義内容を担当する。昼食は野外炊飯。ご飯を炊きからあげを食べる。

■第3回 専門家から学ぶ 日時：12/20 場所：玄海青年の家
北九州市中央卸売市場の第一フーズさんに行く。食肉としてのにわとりについてのお話やにわとりのさばき方について実演と解説をしてもらう。

■第4回 丸鶏をさばく 日時：1/10-11 場所：みかんの家
前回お肉屋さんで教えてもらった丸鶏のさばき方の復習し、子どもたちが実践する。また「にわとりとデザイン」というテーマでにわとりについて学び、にわとりをテーマに土器（はにわ）作りを行う。

■第5回 にわとりをさばいて食べる 日時：2/28-3/1 場所：玄海青年の家
にわとりをさばく。第1回目の西嶋さんのところから4羽のおんどりをもらう。子どもたちは、にわとりの命をうばい、さばいて食べる全ての過程を目の当たりにし、参加した。翌日、活動のふりかえりを行う。

方法・工夫

こわい を起点にプログラムを組み立てる

にわとりをさばくことに対する「こわい」という気持ちがあることを前提に、子どもたちのにわとりへの興味、関心を高めつつ「さばいてもいいかも」という気持ちになるよう、心理的な段階を踏むプログラムの構成を考え実行した。

➡「おいしいは大切！」

さばくことで「鶏肉を食べられなくなった」という気持ちにならないよう、プログラムの内容に工夫をした。特に毎回の食事を「鶏肉をつかったおいしい料理」を「自炊」することで、にわとりの「食べ物」と「命」の側面を近づけるよう試みた。

子どもたちの学びを広げるために…（にわとりの授業の工夫）

- ・身近な話からはじめ、理解がしやすいようにした。
- ・活動で経験したことを思い出しながらかけるよう工夫した。
- ・学んだことを実感するため、最後にまとめクイズをした。

➡「スタッフが先生！」

授業内容は、各担当者に責任をもって作ってもらうと同時にメンバー全員でミーティングを行い、内容を精査した。



成果

にわとりについて知っていることを書いてもらい、1回目と5回目の記述内容の比較をおこなった



（小学5年生 女子）
■にわとりについて➡イメージの変化
色について 白(1回目)➡いろいろある(5回目)

■食べ物と命のつながり
「おいしい」と「かわいそう」が隣り合う(5回目)
(さばくを見て)「思ったよりこわくはなかった。けど、顔を見ると、かわいそうに思うから顔は見たくない。肉はおいしかった。」(感想文より)

（小学5年生 男子）
■にわとりについて➡より具体性が増す
漠然としたイメージ(1回目)➡具体的(5回目)

■食べ物と命のつながり
「命」の記述(5回目)
「人間がいろいろなぎせいの元 生きているんだなとおもった」(感想文より 原文ママ)



課題と今後の展望

- ・参加者の人数が定員に届かなかった
- ・プログラムの性質上、内容や実施回数において参加側に対するハードルが高かったように考える。
- ・プログラムの内容について、大切だと思うことを行うのか？参加者のニーズを捉えたものを行うのか？市民活動団体として、考えさせられる点である。

団体情報

特定非営利活動法人
KID's work



北九州市小倉南区横代南町1-6-15
代表理事 大久保大助
Mail: daisuke.kidswork@gmail.com
TEL: 093-982-8153



1. はじめに（活動の背景と動機）

日本の食料の廃棄量は年間約500万トン以上あり、私たちは毎日一人あたりおにぎり1個分を捨てている。企画者は、飲食店でアルバイトをする中で大量の料理が日常的に捨てられる現状に衝撃を受けた。消費者である私たちが食べ物物の背景にある「生き物の命」を意識しにくく、現在の教育現場でも命のつながりを実感する機会が少ない現状を問題視して、子どもたちが生きた命と向き合い、自分たちの手でそれを「食べ物」へと変えていくプロセスを体験する事業を企画した。

2. 活動内容

小学生を対象とした全5回の連続プログラムを実施した。第1回は養鶏をしている地域の方を訪ねて、ひよこから親鳥までの成長を観察し、餌やりやスケッチを通して関心を深めた。第2回は学生スタッフが中心となって、歴史・食べ物・生き物などの視点から授業を行い、野外炊飯でから揚げを作って食べた。第3回は食肉卸売の専門家から丸鶏の解体を実際に見せてもらった。第4回は子どもたち自身の手で丸鶏を解体する練習を行った。最終回の第5回は、生きたにわとりの命が食べ物になるまでの全てのプロセスを子どもたち自身が向きあい実施した。

3. 実践における工夫と指導の視点

子どもたちはにわとりに対して「こわい」「かわいそう」という思いがあることを前提に、にわとりに対して興味・関心を持ち「さばいてもいいかも」と思えるように、段階的なプログラムの実施を行った。また、毎回の活動で鶏肉料理を作る過程を取り入れて、作ることと食べることを重ねることで、生き物としての「命」と自分たちの身体を支える「食べ物」が地続きであることを感覚的に捉えてもらうアプローチを行った。

4. にわとりからの学び

（1）にわとりから学ぶ子どもたちの変化

はじめは「白くて鳴く」といった個のイメージが、最後には具体的で生き生きとした見え方に変わった。実際に第5回での気づきでは、繋がりを意識した表現が振り返りに見られていた。

さらに最終回の感想文には子どもたちから

は「顔を見るとかわいそうだけど、肉はおいしかった」、保護者からは「人間がいろいろな犠牲の元、生きていると思った」という言葉が並んでいた。これは「生き物としてのにわとり」と「食べ物としてのにわとり」の繋がりを自覚してこれまでのプロセスから、普段スーパーでみるお肉からは見えない「食べ物と命の関係」という実感を掴み、自分ごととしてとらえることができていた。

（2）にわとりから学ぶスタッフの変化

学生スタッフは、授業をつくることで自ら責任を持って教材を作っていた。また、ミーティングの中でその授業を精査し合う経験を重ねた。このプロセスを通じて、単に知識を伝えるだけでなく、子どもたちの体験を呼び起こしながら心に響く場をつくり出す智恵や技法を学んだ。

また、命と向き合う現場で、子どもたちの揺れ動く心理に最後まで伴寄り添い続けたことで、スタッフ自身も命の重みや食について理解し、子どもたちを支える精神的な強さが育まれた。

5. おわりに（課題と今後の展望）

この事業は深い変容をもたらした一方で、参加人数が定員に届かなかったという課題があった。『教育として社会に本当に必要で大切なこと』を突き詰めるのか、『参加者の受け入れやすさ』に合わせていくのかという選択は、今後の持続的な社会教育や体験活動を企画していく上で、私たちが向き合っていくべき課題である。

※ポスターで紹介しきれなかったエピソード

Episode にわとりから学ぶ食べ物と命と「塞翁が馬」



「にわとりが逃げた！」
最終日のできごと
活動のメインとなる
にわとりが脱走する！
そのとき、私たちは
どのように行動し
何を学んだのか…
大人も子どもも共に
学ぶエピソードが
ここにある！



Episode 命を感じる瞬間



「にわとりを
さばいて食べる…」
一体、どれくらいの人が
この言葉を実感を持って聞
くことができるだろう…
少なくともこのエピソード
に出てくる2人の若者には、
この実感があるだろう。
命と食べ物…命を奪うこと
の葛藤が分かるエピソード。



地元芦屋の魅力発見！

あしや部 奥村周 山口心歌 吉見千花菜

1. 活動指針

- * 高校の垣根を越えて交流しよう
- * 「やりたい」を地域の大人と形にしよう
- * 自由で安心できるゆるい集まり

高校生が学校ではできない面白いことをやろう！

あしや部
芦屋市在住高校生
市民活動プロジェクト
since 2019

1. メンバー資格

- * 芦屋市在住の中高生
- * 学校外で何か活動をしたい人
- * 市内友達が欲しい人

→ゆるさ・内側からしか見れない視点

あしや部
芦屋市在住高校生
市民活動プロジェクト
since 2019

1. あしや部とは

高校生世代 三学年合わせて2700人程
市内の高校に通う高校生は1割に満たない

9割以上が市外の高校に通う

2. ボランティア活動



2025.7.19-20 東山公園ボランティア

2025.8.24 オセロ大会

2. イベント出店



2025.4.6 芦屋さくらまつりカフェース

2024.5.5 ゴーゴーフエスタ ストラックアウト出店

2. 地域事業所取材



"HONEY BUNNY"

"風文庫"

"come come"

(後略)

2. あしなび制作

あしや部での活動をまとめたフリーペーパー



2. その他活動



2025.7.20 高島市長との懇談

2025.7.20 精選小学校での園遊見学

3. 活動を通して

様々な思いを持って活動
している人との出会い

地域との繋がりを通して
自分自身の視野を広げてくれる

4 今後の展望

- ・取材で得た情報をあしなびで引き続き発信
- ・あしや部としての新しい企画
(活動の幅を広げる)

→継続的に地域に関わる

■ 資料集

1. あしや部とは

芦屋市という人口9万人き強の市が大阪と神戸の中間にあります。芦屋市に住んでいる高校生世代は三学年合わせて2700人程ですが、そのうち9割以上が芦屋市外の学校に通っています。そこで芦屋をもっと身近に感じられるように、高校の垣根を越えて交流できる場をつくろう!と「あしや部」が2019年に設立されました。やりたいことを地域の大人と共に形にしよう!をコンセプトにイベント主催やお祭りの出展、芦屋市のお店の取材など様々な活動をしています。2025年度は中学3年生から高校3年生まで22名で活動しました。

2. 活動内容

あしや部は芦屋市内のお祭りにお店を出させていただいています。射的やストラックアウトなどで小さなお子さんからお父さんお母さんまで幅広い世代の方々に楽しんでもいただいています。

あしや部ではボランティアも行っています。ただし単純労働となるものは避け、必ず地域の方々との交流が含まれているものに限定しています。そのように、あしや部が芦屋にサポートしてもらっただけでなく、あしや部から芦屋に恩返しすることができるという相互関係ができています。

次は地域事業取材についてです。芦屋についてより深く知るために、市内のお店を取材しています。カフェなどの飲食店から、本屋、塾、芦屋で行われている個人活動まで、幅広い分野を取材しています。普段よく通っているお店でも、取材を通して知らなかった一面を知ることができたり、長年住んでいても気づかなかった芦屋という街の魅力をお店の方から教えていただいたりします。

このようなあしや部の活動をまとめたフリーペーパー「あしなび」を年2回発行しています。学生が自ら文章を考えて自分の言葉で芦屋の魅力を伝えることを目的としています。制作したあしなびはしないの事業所や芦屋市の公立中学

校などに置かせていただいています。あしや部のホームページにも載っているので皆さんも是非ご覧になってください!

3. 活動を通して

私はあしや部に入るまであまり地元が好きではなかったのですが、でもあしや部にあ入ってどんどん芦屋を歩くのが楽しくなりました。以前は地元トークなども黙ってしまうタイプだったのですが、今は芦屋について自慢したいことがたくさんあります。お店に入ったらちょっとお話ができる知り合いが街にたくさんいるってすごく素敵だな、と思うんです。あしや部で私が得たものの中で間違いなくこれが1番の宝物です。

4. 今後の展望

今後もあしや部では、活動で得た情報や人とのつながりを「あしなび」で発信し、高校生の視点で見つけた芦屋の魅力を伝えていきたいと考えています。

あしや部は高校生の「やってみたい」を地域で形にできる団体でありたいと考えています。あしや魅力発見!などと言っていますが、地域創生を一番の目的としている団体ではなく、地域に興味を持つこと他の街にそして、私たち高校生があしやを好きであること、なれることがこの団体活動の最大の意義だと思っています。

あしや部は、学生がやってみたいことに挑戦できる場として、そしてその思いを地域とつなぐ存在として、これからも活動を続けていきます。

外国にルーツをもつ子どものヘルスプロモーション ～看護系大学主催「多文化子育てサロン」による Cross-border Partnership の展望

尾崎優子（神戸常盤大学）

横山利枝（神戸常盤大学）

1. はじめに

近年、日本社会の多文化化が進む中、外国にルーツをもつ子どもの健康問題は、医療、教育、生活環境が複雑に絡み合っており、単一の機関による対応では限界を迎えつつある。一方で、看護系大学の教育現場では、持続可能な社会づくりの担い手育成を目指す ESD と十分な接点を持てずにきた。この乖離を埋めるため、2024年度より「多文化子育てサロン」を実践している。保護者が孤立せず安心して相談できる場、大学・医療・教育・行政・民間団体がパートナーシップを創出する場、ヘルスプロモーションを軸とする ESD の場をつくる試みである。本報告では、サロンを介した重層的な連携とその可能性、課題を展望する。

2. 活動の実際

（1）サロンの開催と参加状況

2年間で4回、サロンを開催した。世界のあそび文化や防災イベント、学生主体の健康教育や身体計測、健康相談をおこなった。計31世帯が参加した（写真1：サロン遠景）。

（2）Cross-border Partnership の構築

本活動を通して、以下の5つの層での連携（Partnership）を実現している。

①国際拠点との協働運営

国際コミュニティセンター職員と企画・会議・運営の全プロセスを協働。地域の多文化共生のハブ機能に看護の視点を融合させている。

②民間・専門団体とのイベント連携

SDGs と関連した民間団体の協力を得たイベント開催を通して、大学単独では不可能な多角的プログラムを提供している。

③行政との相互交流

保健センター職員による会場視察や、教員による保健師へのインタビューを通じ、地域の公衆衛生課題と大学の知見を共有する双方向のパイプが形成されつつある。

④学科を越えた学生の参画

看護学生と保育・教育学生が協働し互いの専門性を活かしたボランティア活動が展開され ESD サービスラーニングの萌芽がみられる。

⑤当事者・ユース世代・社会人の参画

外国籍当事者による翻訳や通訳、「社会貢献したい」「将来、小学校教員や通訳で貢献したい」等の志を持つ高校生の参画など、支援の「受け手」から「担い手」への変化が起きている。

（3）参加ファミリーの声

「サロンで相談して受診を決めた」「子どもが楽しめる」「身体計測を久しぶりに受けて安心した」と、サロンが子どもと親にとって地域資源を主体的に活用できるヘルスプロモーションの場となっていることが示唆された。

3. 今後の課題：学習プログラムの構造化と学びの可視化、パートナーシップ拡充

サロンは単なるヘルスプロモーションの場を超え、「次世代の多文化共生を担う人材の育成拠点」としての側面を持ち始めている。多世代、多領域など、異なる立場にある人たちの学びの可視化が必要である。また、当事者の持つ重要な視点がサロン運営に持ち込まれることの有意義性が深まる点で期待される。あらゆるかたちでの連携・協働をより強固にしたい。

写真1：サロン遠景



参考文献

- 1) Fields, Lorraine; Dean, Bonnie A.; Perkiss, Stephanie; Moroney, Tracey: Education on the Sustainable Development Goals for nursing students: Is Freire the answer?, Nursing Inquiry, 29(4), pp.1-10, 2022.

あすパ・ユース震災語り部隊の活動紹介

あすパ・ユース震災語り部隊： 越智 郁香（神戸海星女子学院高等学校 2 年）
山村 哲徳 （兵庫県立国際高等学校 2 年）
山本 ゆな （神戸常盤女子高等学校 2 年）

あすパ・ユース震災語り部隊

2022 年 4 月発足

メンバーは、神戸近隣在住在学の高校生・大学生・専門学校生約 30 名
神戸市灘区の大和公園周辺で、阪神・淡路大震災についての体験談を聞き取り、その内容を踏まえて自分たちの言葉で発信、未体験者だからこそできる「語り部」活動を行っている。
月に1～2回のペースで活動。

聞き取り活動



震災体験やボランティア経験等を地域住民の方などに聞き取っている。体験者は「語ること」で、記憶がよみがえってくる方々も多い。

カフェ企画



会話をしたり、メンバー作成の「防災すごろく」を一緒に楽しみながら、震災のお話に限らず、世代間の交流を楽しんでいる。

まちあるき企画



震災で被害を受けた場所を歩きながら、これまで聞いた話を、自分たちの言葉で伝えている。近隣、遠方問わず多様な方々にお越し頂いている。

1. あすパ・ユース震災語り部隊について

あすパ・ユース震災語り部隊は、2022年に発足した団体である。阪神・淡路大震災を経験していない世代である中学生・高校生・大学生を中心とした約30名が所属し、震災の記憶を自分たちの言葉で語り継ぐ活動に取り組んでいる。所属するメンバーの多くは異なる学校に通っており、学校や学年を越えた交流は、社交儀礼やコミュニケーション能力等を向上させることに役立っている。活動拠点はJR六甲道駅近くにあるあすパークで、対象地域を神戸市灘区徳井地区としている。活動は月1〜2回程度実施しており、地域に密着して行うことで、震災当時の被害状況やそのときに抱いた考えや思いについて深く学び、その記憶の継承を行っている。

2. 活動紹介

(1) 聞き取り活動（インプット活動）

聞き取り活動では、阪神・淡路大震災当時に徳井地区に住んでいた方々への聞き取り調査を行っている。震災発生時の状況や被災後の生活の様子、当時感じたことなどを伺い、地域に残る震災の記憶を収集している。また、私たちは震災を経験していない世代であるため、震災経験者の方々が比較や評価を意識することなく、自身の体験や思いを率直に語ってくださることも活動の強みである。

(2) まちあるき企画（アウトプット活動）

まちあるき企画は、聞き取り活動で得た内容をもとに、徳井地区を実際に歩きながら震災について伝える活動である。この企画には、近隣遠方問わず多様な方にお越しいただいている。各地点における震災当時の被害状況や住民の体験といった“事実”を紹介するとともに、それらの話を聞いて語り部自身がどのように感じ、何を学んだのかについても自身の言葉で伝えている。また、学生が作製した地図や震災当時の写真パネルを活用し、来訪者が当時の状況を具体的にイメージできるよう工夫している。

(3) カフェ企画

カフェ企画では、地域住民の方々とお茶やお菓子を囲みながら、少人数で震災について語り合う場を設けている。震災の話題に限らず雑談

も交えながら交流することで、参加者が気軽に話せる雰囲気づくりを大切にしている。この活動では、形式的な聞き取り調査では得られにくい震災当時の記憶や思いを伺うことができることが特徴である。

3. その他の取り組み

あすパ・ユース震災語り部隊は、聞き取り活動やまちあるき企画に加え、防災イベントへの出展や他地域の学生との交流活動にも積極的に取り組んでいる。

防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）*1やひょうご安全の日のつどい*2などの防災イベントでは、ブースを出展し、活動内容や震災の記憶を継承する重要性について発信している。また、福島県立相馬総合高等学校および福島県立あさか開成高等学校の修学旅行や研修旅行の受け入れを行い、あすパークや徳井地区でのまちあるき企画を実施した。加えて、株式会社神戸マツダ灘店*3において語り部活動を行うなど、企業に出向いて震災の経験を伝える機会も設けている。

さらに、BOUSAIゼミな〜る*4への参加や、震災30年特別企画ユース世界大会*5の主催を通して、全国7都道府県の参加者だけでなく海外からの参加者とも交流を行った。これらの活動では、地域や文化の異なる学生同士が震災や防災について意見交換を行うことができ、新たな視点や知見を得る貴重な機会となった。

参照

*1:防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）

<https://bosai-kokutai.jp/2025/>

*2：ひょうご安全の日のつどい

<https://19950117hyogo.jp/gathering/>

*3：株式会社神戸マツダ灘店

<https://www.mazda-hgr.co.jp/shop/kobe/nada>

*4：BOUSAIゼミな〜る

<https://uwajima-npo-center.jp/blogs/bousai-seminor>

*5：震災30年特別企画ユース世界大会

<https://tsunagu117.jp/event/0862/>

RCE 北九州

春日清乃（RCE 北九州）

こんにちは！RCE北九州です。



RCE 北九州
(北九州ESD協議会)

RCE北九州（北九州ESD協議会）は、市民・行政・大学・企業などによるネットワーク組織です。福岡県北九州都市圏域を中心として活動しています。会員は団体会員が約100、個人会員が約40名です。



RCE

RCE北九州の特徴は 市民活動力

北九州のRCE認定は2006年。
誕生には北九州市の歴史が深く関係しています。

北九州の官営八幡製鐵所は、我が国の近代化の**先駆け**でしたが、その反動として深刻な**公害被害**に見舞われました。そのとき立ち上がったのが、**子どもの健康を心配した母親**たちでした。子どもの健康を心配した母親たちは「**青空が欲しい**」というスローガンを掲げ、**自発的**に大気汚染の状況を調査し、企業や行政に**改善を求める運動**を起こしました。婦人たちの活躍と思いによって、きれいな町を取り戻すことができたのです。**『市民の力で、世の中を変えることができた』**という功績とそのときの市民の思いは、現在の活動者にも受け継がれています。**市民活動、環境、女性**、は北九州の重要なキーワードとなり、RCE北九州ESDの原点になっています。




2025年の主な取り組み「チーム活動推進事業」




ESDの視点を持つ人材の育成およびESDの普及を促進を目的として、北九州地域を拠点とする活動に対し、約20の団体に**助成**をおこないました。

年度初めには、採択団体の**交流会**を開催し、団体の紹介やお互いの活動について理解を深めました。そして年度末、活動内容をポスターにまとめて環境ミュージアムに掲示、静岡大学監修のミュージアムジャックの実践発表と共同開催で**ESDフォーラム**を開催しました。前半に**トークセッション**、後半に**ポスターセッション**をおこないました。当日の対面参加は約70名。トークセッションはストリーミング配信しましたが約**100**のアクセスがありました。

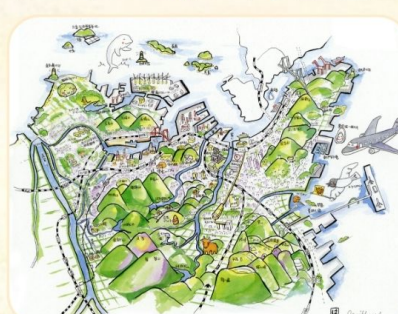


フォーラムの最後には、RCE北九州の日高代表から、**“市民活動が活発なわたしたちは、特定の建物にとどまらず、北九州というまち全体を「コミュニティ・ミュージアム」と捉え、海も、商店街も、学校も、子ども食堂も、人の営みそのものが展示であり、市民一人ひとりがキュレーターである”**と宣言があり、会場が一つになりました。









成果・課題

市民活動が盛んな北九州ですが、活動者同士が交流する機会は多くありません。強い思いがあり活動している方々ですが、**『バワフルなアウトプットは、内容の濃いインプットから』**が生まれてきます。**『ESD』をキーワードに助成**をおこなったため、様々なジャンルから幅広い年齢層の活動者が集ったことによって、日常の活動にはない刺激的なインプットを得ることができたと思います。

この活動を**継続的かつより対外的に実施していく**ことがRCE北九州の次のステップになります。

- そのほかにも、**ESD活動のサポート**を積極的におこなっています。
- ・ 会員による市民センターや学校などでのESD**出前講座**
- ・ ESD活動市民啓発事業としての**広報誌の発行**と配布
- ・ 海外・県外からの**視察**の受け入れ 等



次世代ユネスコ国内委員会

川上 寛人（岡山理科大学大学院理工学研究科修士課程 1 年）

谷垣 徹（次世代ユネスコ国内委員会）

次世代ユネスコ国内委員会の活動と展望

次世代ユネスコ国内委員会の概要

【背景】

2021年11月の第41回ユネスコ総会において、2022～2029年ユネスコ中期戦略が承認され、「ユース」が「優先グループ」の一つに位置付け

【経緯】

2021年10月 日本のユネスコ加盟70周年の機会に、「次世代ユネスコ国内委員会」を組織

2022年3月 次世代ユネスコ国内委員会から「ユネスコ活動の活性化に向けて（提言）」を発表

【目的】 2023年4月 日本ユネスコ国内委員会運営小委員会の下に、「次世代ユネスコ国内委員会」を正式に設置

1. 国内のユネスコ活動に関与するユース世代のネットワークを強化
2. 未来を担うユースからの声を我が国のユネスコ活動に反映
3. 国際会議等における日本のユースからの発信力を強化

【主な活動内容】

- ユネスコ活動を通じてSDGs等の地球規模課題の解決に向けた方策の検討
- ユネスコの各分野における若者向け事業への参画・貢献

委員構成（令和7年4月時点）

所属	年代	性別
高校生	0	10代 1 男性 10
大学生	4	20代 21 女性 13
大学院生	10	30代 1 合計 23名
社会人	9	



ユネスコ中期戦略2022-2029

文部科学省HP



当委員会の概要

ワーキンググループ（教育・科学・文化）の活動

次世代ユネスコ国内委員会では、ユネスコの理念に基づき3つの分野（教育・科学・文化）のワーキンググループに分かれ、多様な活動を展開しています。

教育 地域・社会の持続可能性について学び合いによる教育のあり方の模索
地域の課題に取り組む学生や大学ユネスコクラブ等の学生団体と連携して、**地域資源を切り口に地域・社会・世界の持続可能性について学び合う機会（ワークショップ等）を創出し**、ユースが主体となった教育のあり方を模索しています。



ユネスコ活動に関わるユースのネットワークイベントの開催



国際的なキャリアについて学び交流するイベントの開催

科学 世代や立場にとらわれない、地域資源を活かした地域社会の持続可能性の模索
糸魚川ユネスコ世界ジオパークと白山ユネスコエコパークを主な活動場所とし、**多様なステークホルダーを巻き込んだ地域社会の課題抽出と地域資源を活かした課題解決の方法を検討しています。**



ユネスコ世界(日本)ジオパーク・ユネスコエコパークの全国マップの作成



ユネスコ世界(日本)ジオパーク・ユネスコエコパークをテーマとした出前授業

文化 地域が有する独自の文化的価値を活かした社会創造の模索

各創造都市で活動を行うユースによるネットワーク構築を目指し、現在は、**全国のユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）におけるユース・ネットワーク構築について模索すべく、調査・調査・調査を行っています。**



ユネスコ創造都市に関わるユースの実態調査



創造都市と連携し、ユース活動活性化を目指すイベントを開催

その他の活動内容

ユネスコ関連の国際会議等への参加



6th Asia-Pacific Meeting on Education 2030
2024年/タイ・バンコク



14th UNESCO Youth Forum
2025年/ウズベキスタン・サマルカンド

活動レポート「Youthnote」での発信

ユネスコ関連活動の情報の集約・発信を担う「ユネスコ未来共創プラットフォーム」のwebサイトに、より多くのユースが**アクセス・活用し、ユネスコ活動の参画につなげるため**、ユース向けの情報を集約した「Youthnote」を開設。
Youthnoteでは、当委員会の最新の活動レポートや、ユースの視点からユネスコ活動について特集する取材記事を掲載。

こちらから！



2025年度 開催イベント

「ユネスコ活動に関わるユースのネットワーク構築」と裾野の拡大、分野横断的な交流の場の創出を目的として、主にユースを対象としたイベントを企画。

- 「国際機関の扉をノックしよう」
～ユネスコ活動で活躍している若者と話そう！～
2025年12月10日(水)19:00～20:00
◎オンライン
中学生・大学生生対象
- ユネスコ日本ユース・セミナー
～科学でつなぐひと・社会・未来～
2026年1月12日(祝・月)13:00～15:00
◎東京&オンライン
18歳～30歳の若者対象（高校生～3年生の参加も大歓迎）
- ユネスコ加盟75周年 ユネスコ日本ユース・フォーラム2025/26
～ユネスコの扉からつながる広がるわたしと「セカイ」～
2026年2月8日(日)10:30～17:00 ◎東京&オンライン

アーカイブ動画はこちら



展望

- ・ ユネスコ活動への参画層・取組意向層と協働し、ユネスコ活動に参画するユースの裾野拡大を目指していきます。
- ・ SDGs/サステイナビリティ関連の活動をしている団体との連携を図っていきます。
- ・ 委員会や日本のユースとしての意見を発信しながら、国外のユネスコ関係者ともネットワークを構築し、連携を図っていきます。

参考文献

- 1) UNESCO. Medium-Term Strategy for 2022-2029 (41 C/4). 2022, p.16, p.36. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000378083>, (最終閲覧日 2025-08-29)。
- 2) 文部科学省。参考資料1 次世代ユネスコ国内委員会について。 https://www.mext.go.jp/content/20250624-mxt_kokt002-000043296-1.pdf, (最終閲覧日 2025-09-24)。

学生ボランティアを続ける理由 ～岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク～

木崎達也（岡山大学）

山下優佳（岡山大学）

田中聖愛（岡山大学）

岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク 学生ボランティアを続ける理由

私たちについて

主にユネスコスクール加盟校出身で
岡山県内の大学に進学した学生を中心とするボランティアグループ
【アドバイザー】
柴川 弘子, 岡山大学大学院 教育学研究科 ESD 協働推進センター
【活動内容】
岡山県内のユネスコスクール加盟校、キャンディート校の高校生が
交流する事前学習会、実践交流会の企画、運営のサポート
※岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワークとは
2014年に岡山県で開催されたESDに関するユネスコ世界会議・高校生フォーラム
を経て、生徒たちの交流と学びを継続・発展させていくことを願い、先生方が2015年
に発足させた組織。毎年11月頃、世界会議の成果を次に伝え、お互いから学び合い、
学校や地域を超えた仲間を作り、ESDを推進するための「実践交流会」を開催。

私たちの活動について

学生ボランティア
ボランティア
卒業生を中心に誘い合い
大学・学部様々！

それぞれの商店(学生ボランティア)
には専門性があり役割があり
それぞれ多様な考えを持っている

事前学習会
毎年8月開催
高校生&学生中心に進行
ESD&ASPnetの基礎や
共通のテーマについて
学びを深めるもの

高校生 学生ボランティア
● 学習 ● サポート
● 交流 ● 企画・発表

2025年度 事前学習会について
詳しくはこちら▼

実践交流会
毎年11月開催
高校生&学生中心に進行
ESDの実践を共有し、交流

高校生 学生ボランティア
● 学習 ● サポート
● 交流 ● 企画・発表

2025年度 実践交流会について
詳しくはこちら▼

高校生と一緒にワクワクした！

リアルな声と葛藤

私たちは下記のように葛藤しながら、前述の『事前学習会』と『実践交流会』という2つの活動を企画・運営しています

- オンラインミーティングで、表情とか見れなくて話しにくい内容の
深掘りが難しいんだよね

社会課題（SDGsなど）に「正解」がないから話し合いのゴールも分らないし、会議がダラダラと長引く。それに、「これってただの「綺麗事」じゃない？」とか「現実の生活場面で通じない理想論になっていない？」って言い合って結局話まとまらないんだよねー。
- 高校生の素直な意見を聞きたいのに、会場に学校の先生の「監視の目」があつて、気にする子からは特に顔を何う「いい子」な意見しか出ないから、お決まりの定型文でディスカッションが進むときと悩む。それって本音？って聞きたくなるよね

無意識のうちに大学生が「教える」という上から目線のニュアンスを出してしまつて、せっかくの学校外の学びの場のフラットな関係が崩れそうになることもあるよね。
- 司会をしているとき、（会場内をまわりながら）高校生の面白い視点や考えがあれば全体に共有することもある。だけど、そうすることで他の高校生の独自のアイデアを潰したり、影響させすぎたりしないか心配しているんだよね……。

発言・発問やスライド提示の内容や仕方によって、良い方向にも良くない方向へもいってしまつて強く感じる。「なぜこの活動をするのか」という理由や意味、背景などをしっかり理解・把握していないと、ズレた指示をして高校生を混乱させ（戸惑わせ）たり、期待する効果が得られなくなつたりしちゃ……。だからこそ、メンバー間で事前に協議して、共通認識を持っておくことが大切だね。

言いたいことはたくさんあるけど、価値観の違いや専門分野の違いから、ボランティアメンバー全員の理解度に違いがあるんだよね。だから、思いついた意見を次々言うのは躊躇しちゃうっていうか。でも、だからこそ理解してもらえた時やアイデアが広がった時が嬉しくて
- 高校生との関わり方における葛藤**

 - ・先生の「監視の目」を気にした「いい子」な意見から、いかに本音を引き出すか
 - ・大学生が「教える」という上から目線にならず、フラットな関係をどう保つか

ファシリテーションの悩みと工夫

 - ・高校生の独自のアイデアを潰さずに、どう全体に共有するか
 - ・ズレた指示で高校生を混乱させないため、メンバー間の事前の共通認識をどう持つか

チーム内での議論のリアル

 - ・社会課題に「正解」がない中で、まとまらない議論への向き合い方
 - ・価値観や専門分野の違いによる理解度の差をどう乗り越えるか

私たちの活動の実態 ～商店街に例えて～

1. 独自の考えや専門～ユニークな個性の衝突と楽しさ～

それぞれの専門性や独自の考えを持ったユニークなメンバーが集まっているため、互いの利益や意見がぶつかり、話をまとめるのに時間がかかって大変なときもある。しかし、その「クダクダ」とした停滞や「ジグザグ」とした紆余曲折の議論の過程すらも「楽しい」と感じられる、非常にポジティブな環境がある。

2. 共通の目的～合意点の発見～

意見が衝突する中でも商店街全体を一つにまとめるためには、「商店街の活性化」という共通のテーマ（合意点）を見出す必要がある。そして、その活動の最大の目的は、学生ボランティアだけでなく、商店街に来てくれるお客さん（地域住民や街にいらる高校生など）も笑顔になることである。

3. 具体的なアクションと活動継続の鍵～目指す未来～

お客さんに足を運んでもらい、満足してもらうためには「いい商店街」にするための工夫が不可欠である。「事前学習会」や「実践交流会」を開催し高校生もブースを出すなどのアクションを起こす。しかし、この活動が成り立つのは、目的達成のためだけでなく、学生ボランティア自身のメリットややりがいが見出されているからである。自分たちが楽しめ、メリットを感じて活動を「継続」できるからこそ、結果として「シャッターの空いた、活性化した商店街」という未来を実現できる。

Contacts

Email : okayama.ushsn.studentstaff@gmail.com

HP : <https://edu.okayama-u.ac.jp/esd/>

Instagram : https://www.instagram.com/okayama_ushsn_studentstaff/

連絡先(Email, 各種SNS)などを掲載したものを投稿しています
また、デジタル版のポスター(日本語)を掲載しています
Please scan it! ▶



社会貢献アプリ actcoin について

黒木 宏太（日本コムシンク株式会社）

社会貢献アプリ



日本コムシンク株式会社
黒木宏太

actcoinは、ソーシャルアクションを、独自のコインで可視化・価値化するアプリ・Webサービスです。
ボランティア/勉強会などへの「参加」や、ソーシャルグッドな「習慣」でコインが貯まります。
コインが貯まると「社会も自分もちょっと嬉しい」キャンペーンに申し込みます。

個人

- ①活動の記録が
ついて嬉しい！
- ②プレゼントが
もらえて嬉しい！
- ③団体の寄付にもなる！

actcoinの仕組み



イベントに参加

actcoinが貯まる

貯まったコインは
寄付やプレゼントに活用

寄付や商品の
認知拡大

団体

- ①イベント広報ができて
嬉しい！
- ②参加者に還元
できて嬉しい！
- ③団体の寄付にもなる！



2026/7/21
KIFUBARI OSAKA



2025イベントレポ



福祉美容室『hana akari』
10%OFF キャンペーン

企業・自治体での導入

actcoinの仕組みを活用して、企業の社会貢献活動や、自治体による施策の実施状況を「特設サイト」で可視化しています。



企業や自治体の特徴を
デザインに反映



イベントの募集状況が
一目でわかります。



actcoinのデータから
活動実績を自動で反映。

actcoinは「ボランティア」「社会貢献」というキーワードからは参加しづらかった人々がソーシャルアクションに触れるきっかけを作っています。

最初は、「プレゼントがもらえるから」という入り方でも、
徐々に面白さに気付き、
ソーシャルアクションの輪が広がっていくことを願っています。



登録はこちら

未来をデザインするキャリア教育授業

小田中 美穂（教育アドバイザー）

未来をデザインするキャリア教育授業

～自己理解と他者理解に基づくキャリア形成の実践～

兵庫県三田市／教育アドバイザー 小田中 美穂



活動のきっかけ

2017年より三田市内を中心に、「子どもの個性に合わせた子育て」をテーマとした保護者向け講演会を行ってきた。活動が続ける中で、「子ども自身にも自己理解や他者理解を学ぶ機会を届けてほしい」という声が多く寄せられた。私自身も子育ての中で子どもの個性との向き合い方に悩み、その過程でカラータイプ（行動色彩心理学）に出会った。この学びをきっかけに、子ども一人ひとりの個性を尊重し「自分らしさ」を育む教育の必要性を感じ、地域講師として学校現場でのキャリア教育に関わるようになった。

背景

社会や働き方の変化により、子どもたちは将来像を描きにくくなっている。

〈子ども達を取り巻く課題〉

- ・理想となる大人のモデルを見つけにくい
- ・人間関係や意思決定に悩む
- ・自己肯定感の形成が難しい

そのため、自己理解・他者理解を基盤としたキャリア教育が重要であり、学校・家庭・地域が連携した学びの機会が求められている。



三田市立けやき台小学校6年生の授業の様子

【カラータイプを活用したキャリア教育授業】

■授業のねらい

- ・知識・学力（IQ）に加え、感情を理解する力（EQ）を育む
- ・「自己理解」「他者理解」をキャリア形成の土台とする

■授業の特徴

- ・色を用いた性格分析により、自分の特性を客観的に理解
- ・友達との違いを前向きに受け止め、「十人十色」を体験的に学ぶ
- ・安心できる場で表現や対話に挑戦する活動を重視

■期待される学び

- ・価値観の違いを言葉で伝えるコミュニケーション力の育成
- ・自分の強み・弱みを理解し、多様な他者や社会と共に生きる力を養う
- ・将来の夢や目標を描くための一歩につなげる

三田市立けやき台小学校6年生授業計画

日時	2022/12/19(月) 10:45～11:30	場所	三田市立けやき台小学校教室
総合的な学習の時間			
テーマ	自分の将来について		
本授業のねらい	・将来の夢や「こんなおとなになりたい」という姿を考え、小学校での学びをふり振り返りながら、中学校以降の生き方へとつなげる。 ・カラータイプ診断やワークを通して、自分の強み・弱みを理解し、自分らしさを尊重する姿勢を育む。		
授業の流れ	学習のねらい	学習内容	備考
導入 (10分)	働くについて考える	・職業クイズを通して、社会にある多様な職業を知る ・「働くこと」の意味を考える	
展開 (25分)	自己理解・他者理解	・カラータイプのカードワークや診断を行い、自分の特徴や強み・弱みを知る ・グループで意見を共有し、仲間との違いや共通点から多様な価値観を理解する	・グループワーク ・ワークシート記入
まとめ (10分)	これからの自分をイメージする	・将来の目標やなりたて自分を、色や言葉で表現する ・授業のポイントをおさらい ・先生より	・感想シェア ・アンケート記入

【確認してみよう】
自分のタイプ・自分の色はどのあたりかな？
周りの人はどんな色かな？関係性もみてみよう！



説明：右側をスピードで読む！
発見：右側をゆっくりと読み進めよう！

【授業の内容】

- ・カラータイプカードを使い、質問に答えながら自分の考え方や価値観、他者との違いを知り、自分の言葉で表現する
- ・48問の質問に○・△・×で回答し、「決断・堅実・創造・協調」の4タイプ個性の傾向を確認
- ・各タイプの特徴や、より良いコミュニケーション方法を学ぶ
- ・「どんな自分になりたいか」をテーマに、中学生になった自分を想像しながらカードを選び、考えをアウトプットする

※スライドはイラストを用い、理解しやすいように工夫



授業の成果

- ・自己理解 自らの特性や強み・課題に気づき、肯定的に受け止める姿が見られた
- ・他者理解 友人の考え方や価値観の違いを認め、受容的に関わろうとする態度が育まれた
- ・学級の変化 活動を通して相互理解が進み、学級内に安心感や一体感が高まった
- ・将来意識 先を見据え、自らの将来像を主体的に思い描こうとする姿勢が表れた
- ・教師の気づき 自身の自己理解・児童理解が深まり、学級経営や研修への活用可能性が示された

【これからの取り組みについて】

教職員向け研修や高校生の「総合的な探究の時間」、特別非常勤講師としての「教育入門1」、さらに専門学校での授業などで授業依頼を三田市内外の学校からいただいていた。

この取り組みを通して、先生方の業務負担や人間関係によるストレスを少しでも軽減し、安心して教育に向き合える環境を支えたいと考えている。そして何より、子どもたちが自分らしさを発揮し、将来に向けて夢や目標を描ける力を育むことを目指し、地域や学校に根ざした持続可能で温かい教育活動を展開していきたい。



マルチステークホルダーの共創を促進する ESD 推進ネットワークの仕組み

後藤 聡美 (RCE 兵庫-神戸／神戸大学)

マルチステークホルダーの共創を促進する ESD推進ネットワークの仕組み

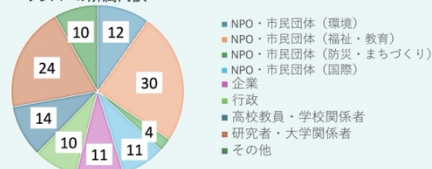
後藤聡美 (ESD推進ネットひょうご神戸 (RCE兵庫-神戸)・神戸大学)

ESD推進ネットひょうご神戸 (RCE兵庫-神戸) とは

教育機関、地方公共団体、市民団体、企業等のESD実践者が集い、兵庫県・神戸市等において、ESDを推進することを目的に2007年に設立。2026年3月現在、メンバー数は126名。事務局は神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター。

- 代 表：高田知紀 (兵庫県立大学)
副代表：齋藤優子 (日本生活協同組合連合会)
吉良佳晃 (吉良農園)
- 監 事：池田拓也 (灘中高等学校)
- 事務局長：後藤聡美 (神戸大学)
- 運営協力組織：ESDプラットフォームWILL

*メンバーの所属内訳



ESD実践研究集会



●これまでの大会テーマ

- ✓ ESDへの期待と希望
- ✓ 多様なフィールドから立ち現れるESD～新しいくらしを創造する～
- ✓ 大研究SDGs！
- ✓ 続・大研究SDGs！
- ✓ WITH コロナ社会の ESD 活動
- ✓ ネットワーキングの4次元化～新しいつながり方とSDGs～

ESDに関わる実践者・研究者・ユースが集い、議論と交流を深める場。2016年から実施。ESD実践研究集会をきっかけに、新たなコラボレーション企画やプロジェクトが生まれてきた。

ESDスタディツアープログラム

ESDに関心のある市民・ユースがESD推進ネットひょうご神戸の協力団体の活動にボランティアとして参加するためのポータルサイトを開発した。ユース組織「ESDプラットフォームWILL」がコーディネーターを務める。



ユースへの支援

「ESDプラットフォームWILL」の支援。推進ネットメンバーの専門的な知見や現場での関わり方をユースメンバーが実践的に学んでいる。実践者とユースとの関わりは双方の実践に影響を与えている。



■ 2025年度の主な成果

- ✓ 14th Global RCE Conferenceにおいて口頭発表2件・ポスター発表1件を実施。
→3件ともRCE Award 2025を受賞
- ✓ 推進ネットメンバーとESDプラットフォームWILLが協働したプロジェクトを展開。
 - 吉良農園とESDプラットフォームWILLの連携による農業体験プログラムの実施
 - コーポこうべとESDプラットフォームWILLの協働による市民向けのESD関連イベントの実施

今後の課題

1. ESDスタディツアープログラムの刷新
ワーキンググループの組織化を予定。利用者が自身の学びを可視化できる仕組みづくりに取り組む。
2. メンバーシップの拡充
兵庫・神戸を中心に活動するNPO／市民団体、研究者の参画を促進し、実践研究の展開を図る。
3. 20周年に向けた企画づくり
ネットワーク設立20周年(2027年)に向けて新たなプロジェクトを始動する。

山から海にプレゼントを贈ろう

小牟田 尚美・末広 佳子・藤田 桃子・牧理 恵子（一般社団法人 海の郷）

一般社団法人
海の郷
<http://www.uminosato.net>

山から海にプレゼントを贈り 元気な海を取り戻そう！

一般社団法人 海の郷（うみのさと）は、海・川・山を一つの生態系として保全し、山の恵みを海へ届け、人々とともに環境を守る意識を高め、海の豊かさを未来へ繋げる活動をしている団体です。 場所：福岡県北九州市門司区伊川



竹のお弁当箱づくり・竹林探検

**竹山を整備し
落ち葉などは腐葉土にします。**

**山からのミネラルの重要性を
ワークショップを通じて
広めています。**





毎月第1日曜日
ビーチクリーン



TOTO 水環境基金 採択されました



令和8年3月1日
広島大学名誉教授
流域圏環境再生センター所長
山本民次先生に
ご講義いただきました。



新門司人工海浜で
2023年春「すやっきい」
という牡蠣殻でできた
泥団子を1.3トン手作りし、
設置実験すると・・・



美しかった初日の出



観察会をしています。



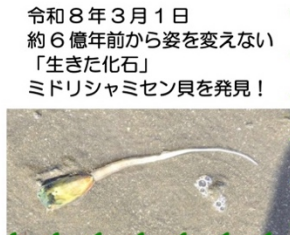
ぬかるみがなくなり
歩けるようになりました



コアマモの
藻場があちこちに！



おびただしい数の
ウミユナと
ゴカイの棲管



令和8年3月1日
約6億年前から姿を変えない
「生きた化石」
ミドリシャミネセン貝を発見！

「服の交換会」への参画を通して

佐野 頌太（灘高等学校 1 年）

「服の交換会」への参画を通して

灘高等学校1年 佐野 頌太

1. 「服の交換会」とは

株式会社ワンピース(アパレル企業)の取り組み

<コンセプト>

服を捨てない。作りすぎない。シェアして楽しむ

<参加者ができること>

自分の服を持ち寄り、会場に陳列された服と交換する

交換料: 550円(税込)



画像引用元: <https://onepeace-net.com/koukan.html>



2. 「エコスコア」の表示

<エコスコアとは>

服の生産から廃棄までに
環境に与える影響の度合い
(数字が大きいほど環境負荷が大きい)

<算出方法>

フランスで開発されたツール
「Ecobalyse」を用いる

<算出に必要な情報>

- 重量
- 繊維の種類と生産地
- 製造国
- ボタンやチャックの有無
- 価格

など

(実際に掲示をしたポスター)



<活用時の課題>

- 算出されるスコアはフランスでの販売・使用・廃棄が前提
- 製造場所の情報について、
服のタグからは最終縫製地しかわからないこともある
(→ Ecobalyseは製造に関する情報を持つアパレル企業向け)
- 必要な情報を得るためのタグが付いていない服が
交換会に並ぶこともある

3. 環境負荷削減効果に関する困り事

① 服の交換会への参加によって消費行動は変わるのか？
エコスコアの表示

→ そもそも環境と人間の双方にとって理想的な消費の条件とは？

② 服のリユース(交換)数に占める服の生産抑制割合が不明
(似た例: 参照資料中の「中古品販売額のうち新品販売額に影響を与えた割合a」)

参照: 平成22年度 使用済製品等のリユース促進事業研究会 報告書 p.69

↑ 仮定されることが多い(参照資料では10%)



4. 次回開催に向けて

3/28 ゲーム×服の交換会@明石T3テラス

今回のコンセプト: 偶然がにつながる宝探し

- 服ウルフを実施予定
(ワードウルフのワードを服に置き換えたもの)
- エコスコアに関するアンケートも用意
(交換する服を選ぶ基準になったか等)

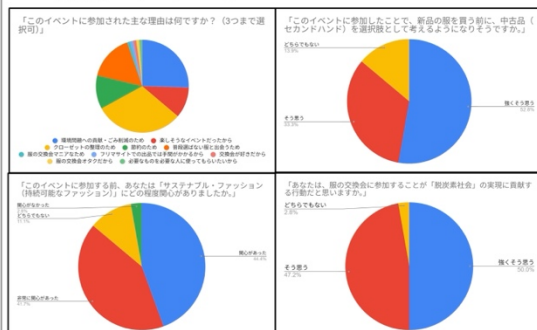
5. 参考データ

<これまでの服の交換会による環境貢献> (参照元: <https://onepeace-net.com/koukan.html>)

廃棄削減量: 27,384kg
CO2削減効果: 59,423kg
スマホ充電換算: 24,760分

※CO2削減量: 1着を廃棄(焼却)する際に発生するCO2を約0.5kgと想定し、持ち帰り枚数(118,846枚)より算出。
※スマホ充電換算: 1日1回のフル充電に使う年間CO2排出量を約2.4kgとして算出。
(1日あたりの充電電力が約0.014kWh、環境省公表の電気事業者別平均CO2削減率0.435kg-CO2/kWh × 365日にて試算)

<参加者アンケート> n=36



役割随伴的参加はなぜ変容を阻み、かつ生むのか ～ESD ネットワークにおける制度的参加構造の両義的機能： 10年間の協働型アクションリサーチより～

柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進センター）

役割随伴的参加は なぜ変容を阻み、かつ生むのか

—ESDネットワークにおける制度的参加構造の両義的機能：
10年間の協働型アクションリサーチより—

発表者
柴川 弘子

所属
岡山大学大学院教育学研究科
ESD協働推進センター



役割随伴的参加という制度的参加構造は、変容を阻害する要因であると同時に、任意参加の文脈では生まれない種類の境界横断を強制的に発動させる生成要因でもある——すなわち両義的に機能する。この両義性を規定する構造的條件の解明が、本研究の中心的問いである。

1. 立脚点——制度内変容という逆説

ESDが本来志向するSterling第3水準—前提・価値観・パラダイムそのものの問い直し—は、公教育への実装という制度的圧力により第1水準（adaptive）への収束として頭打ちし、再生産構造を温存したまま『持続可能性』を上乗せする危険を孕む（Sterling, 2001; Bourdieu & Passeron, 1977; Giroux, 1983; Apple, 1979）。しかし変容は制度の内側からでなければ起さない（Carr & Kemmis, 1986）。

本研究はこの逆説を正面から引き受け、公教育を基盤としながらその枠を超える多元的学習プラットフォームが制度の内側から発動を創り出す構造的條件を解明することを命題とする——単に学校教育の改善でも変革の処方箋でもなく。

※事例：岡山県ユネスコスクール高校ネットワークOUHSNは高校・教員・大学生ボランティア・OB/OGが異なる役割と役割を持ち多面的学習プラットフォームで、「共創」を理念とする任意参加型のネットワーク（2015年発足）。

2. 研究の問いと目的

■問い：役割随伴的参加を構造的に内包する多元的学習プラットフォームは、再生産の装置として機能するのか。あるいは制度の内側から変容的・越境的学びを生む条件を創り出しているのか。その構造的條件は何か。

■目的：

1. OUHSNの10年間の事例として、変容の学びの生成条件と阻害構造を特定する
2. 各参加者の実践の前提が同一視される境界条件を明らかにする
3. 多元的ESDネットワークの構造的條件を解明し、拡張可能性を探索する

3. 研究方法とポジショナリティ

前述の立脚点から、参加者全員が実践の前提を批判的に問い直す協働型アクションリサーチとして実施する。分析は実践アーキテクチャ論（Kemmis & Mutton, 2012）を主軸に、境界横断論（Akkerman & Bakker, 2011）を補助的に用いた理論駆動型の質的分析とする。

■分析焦点：「困難にどうなる事例」、「省察・変容に至る事例」の境界条件の特定。

■分析対象（2015～2024）：協議会資料・幹事資料・実践報告書・高木教諭による一次資料（H25.5.26; 2020; 2023）・フィールドノート・参加者記録。

※発表者はOUHSN運営に継続的に関与してきた立場上、諮問教員・OB/OGとの構造的対称性（「断りにくい」関係）を内包する。また中川（2016）が指摘する懸念——実践への浸透が批判的省察を阻害する過程——は研究者にも適用される。この構造的対応として、自らの仮説（柴川, 2019）を含む前提を問い直すメタ省察の場を活動サイクルに意図的に組み込んだ。

4. 理論的枠組み

本研究における「変容」とは、個人の肉体的変化ではなく、実践の前提・語られること・なされること・関係のあり方が問い直され再編成されることを指す（Kemmis & Mutton, 2012）。

とこの定義のもとに以下の三層を構成する。

第1層：「変容」の定義

T-learning Level B（Lotz-Sisitka et al., 2015）

第2層：「変容」の構造的條件【主軸】

実践アーキテクチャ論（Kemmis & Mutton, 2012）

語られること／なされること／関係のあり方

→三次元すべての再編成＝変容の条件

第3層：「変容」の場【補助】

境界横断論（Akkerman & Bakker, 2011）

同定→調整→省察→「変容」

※活動理論的「矛盾の解決」志向は採らない

▲共通の理論的空白：

「役割を持って境界にきた人が、その役割の前提を問い直すとき、何が起きるか」——この変容を正面から検討した先行研究は発見の限り見当たらない。

6. 三条件と探索的仮説

【三観察】

①輪番制による不均衡が問い直しの契機となる事例 → 複合条件不在による脱退（2021年）（T-learning Level B; Davis & Sumara, 2006）

②「なぜその設計か」という問いが生じた場面のみ、翌年度に構造的変更を記録（Kemmis & Mutton, 2012; Carr & Kemmis, 1986）

③役割移行を経た参加者に境界横断の反復的経験を確認（Akkerman & Bakker, 2011）▲ OB/OG帰還の動機は現時点で未確認

構造的條件（暫定知見）	探索的仮説と検証方向
①前例離脱を促す構造的設計 事務局輪番制・前例なき課題設定により、既存枠組みでは対処できない状況への直面を構造的に生み出す（Lotz-Sisitka et al., 2015）。①が不在の年度では前例踏襲が翌年度も継続した。	実践アーキテクチャの不均衡が変容の起点となる → 参加者ごとの不均衡経験と三次元変化の質的追跡
②実践アーキテクチャを支える体制の同時存在 過大な不安定は変容でなく崩壊をもたらす（Davis & Sumara, 2006）。OpenChat導入（2022～）・相談・分担体制が該当。①②複合不在・コロナ禍・理念未引継・管理職意向が重なり2021年に脱退。	当事者性深化には①②の同時存在が必要条件となる → 参加教員・OB/OGへの「役割移行の契機」に関する語りの質的調査
③実践の前提そのものへの問いの意図的設計 2022年以降、体制整備を経て初めて設計可能となった。「本当のECOとは」（2022）／「なぜいまここで防災なのか」（2023）／「本当にサステイナブルな食とは」（2024-25）はいずれもSterling第3水準の問いを活動の入口に組み込む構造的選択。③不在の年度では翌年度の構造的変更が記録されなかった。	振り返り設計の次元が変容の分岐点となる → 問いの設計の有無と三次元変化の体系的対応分析

7. 本研究の境界と残された問い

分析は関与度の高い参加者の記録に偏っており、役割随伴的参加のまま変容に至らなかった参加者の経験を十分に捉えられていない。三条件が構造的に整っていた年度においても、変容の起点となったのは特定の個人史を持つ担当者であった。構造条件と個人・文脈要因の交差様式の解明は、本研究が照射しきれなかった問いとして残る。本研究が立ち現れさせた問い—役割随伴的参加という構造的二重機能—は、任意参加を前提とする変容的学習論では問いとして立ち現れにくい。両者の対話を通じて、それぞれが単独では見えにくかった条件の輪郭が浮かぶ可能性がある。

1. 研究の背景と目的

ESD が本来志向する変容的学習—Sterling (2001) の第3水準、すなわちパラダイムそのものの問い直し—は、公教育への制度的実装の圧力により第1水準（適応的学習）への収束として現れやすく、変革は制度の内側からでなければ起きないという逆説を孕む（Carr & Kemmis, 1986）。本研究は、岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク（OUHSN、2015年発足）を事例とする。OUHSNは、高校生・教員・大学生ボランティア・OB/OGが異なる役割と文脈を持ち寄る多元的なESD学習プラットフォームであり、参加の強制性は連続的に分布している。10年間の活動記録・資料の分析を通じて、役割随伴の参加という制度的参加構造が変容的な学びを阻害すると同時に生成する、両義的機能の構造的条件の解明を目的とする。「役割を持って境界に來た人が、その役割の前提を問い直すとき、何が起きるか」—この変数を正面から検討した先行研究は管見の限り見当たらず、ここに本研究の固有の問いが位置する。

2. 研究方法

（1）研究アプローチとポジショナリティ

参与者全員が実践の前提を批判的に問い直す「協働型アクションリサーチ」として実施した。発表者はOUHSN運営への継続的な関与から生じる構造的非対称性を内包しており、自らの仮説（柴川, 2019）を含む、前提を問い直すメタ省察の場を、活動サイクルに意図的に組み込んできた。

（2）理論枠組みと分析方法

「変容」とは、個人の内面変化ではなく、実践の前提・語られること・なされること・関係のあり方が問い直され、再編成されることと定義した（Kemmis & Mutton, 2012）。実践アーキテクチャ論（同）を主軸に、境界横断論（Akkerman & Bakker, 2011）を補助的に用い、「実践の調整にとどまる年度・文脈」と「実践の前提が省察・再編成された年度・文脈」の境界条件の特定を分析焦点とした。

3. 暫定知見：変容生成の三条件

10年間の分析から、実践の再編成が観察された年度に共通する三つの構造的条件が暫定的に

確認された。第一条件は「前例離脱を促す構造的設計」：事務局の輪番制・前例のない課題設定が、既存の枠組みでは対処できない状況への直面を構造的に生み出した（Lotz-Sisitka et al., 2015）。第二条件は「実践アーキテクチャを支える体制の同時存在」：不安定さのみでは変容ではなく崩壊をもたらすため、相談・分担体制の整備が第一条件と複合して機能した。なお、2021年の脱退事例はこれらの条件が重なって不在となったケースである。第三条件は「実践の前提そのものへの問いの意図的な設計」：Sterling 第3水準の問いを活動の入口に組み込む構造的選択が記録された年度のみ、翌年度に構造的な変更が確認された。三条件は独立した充分条件ではなく、複合的に機能するという点が本分析の暫定的な結論である。

4. 本研究の限界と今後の課題

分析は関与度の高い参加者の記録に偏っており、実践の再編成が生じなかった年度・文脈における関係性や実践のあり方を十分に捉えられていない。構造条件と個人・文脈要因の交差様式の解明、および任意参加を前提とする変容的学習論との対話が今後の問いとなる。本研究が立ち現れさせた「役割随伴の参加という構造の二重機能」という問いは、ESDネットワーク論と変容的学習論の双方を更新する可能性を持つものとして、継続的な検証を重ねていく。

参考文献

- 1) Akkerman, S. F., & Bakker, A.: Boundary crossing and boundary objects, *Review of Educational Research*, 81(2), pp. 132-169, 2011.
- 2) Carr, W., & Kemmis, S.: *Becoming critical: Education knowledge and action research*, Falmer Press, 1986.
- 3) Kemmis, S., & Mutton, R.: Education for sustainability (EfS): Practice architectures and sustainability, *Environmental Education Research*, 18(2), pp. 187-203, 2012.
- 4) Lotz-Sisitka, H., Wals, A. E. J., Kronlid, D., & McGarry, D.: Transformative, transgressive social learning, *Current Opinion in Environmental Sustainability*, 16, pp. 73-81, 2015.
- 5) Sterling, S.: *Sustainable education: Revisioning learning and change*, Schumacher Briefings, 2001.

身近なアート・文化で地域貢献

柴田 幸子・児玉 千明・新藤 里恵（CS 神戸／生きがい活動ステーション）

生きがい活動ステーション（生き活）とは…

「生きがい活動ステーション」は、神戸市立瀬区文化センター内に開設され、公益財団法人神戸市民文化振興財団と認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸が協働で運営しています。

サービス概要

① 情報提供・相談
講座やイベントなど、アート・文化・地域活動に関する情報を紹介しています。「何から始めたらいいかわからない」「自分に合うものを知りたい」といった個人の相談にも、コーディネーターが常駐し応じます。また、活動を始めたいグループや立ち上げ間もない団体には広報やPR、情報発信の相談やサポートを行っています。

② 学び・体験・仲間づくり
関心あるテーマで活動を体験しながら学べる機会をつくっています。「生き活1day講座」「大人の部活プロジェクト」「トライやるサポート」を通し、自分のペースで興味を広げつつ、仲間とともにグループで活動するためのサポートも得られます。

③ ネットワークづくり
アートをきっかけに、人や活動がゆるやかにつながる場をつくっています。「こどもも大人もアートな夏まつり」や「ランチタイムロビーパフォーマンス」を通し、多世代での交流や新しい取り組みの機会が得られます。

運営団体について

公益財団法人 神戸市民文化振興財団
公益財団法人神戸市民文化振興財団は、昭和57年に設立され、「神戸市民の文化活動の振興」と「創造的なまちづくりの推進」を目的に活動しています。神戸市立文化ホールなどの文化施設を管理運営し、講座事業や文化振興事業を通じて、市民が文化に触れ、参加できる環境づくりを進めています。

認定NPO法人 コミュニティ・サポートセンター神戸（CS 神戸）
阪神・淡路大震災をきっかけに1996年に設立。「自立と共生」を理念に、NPOや地域のために活動するグループの立ち上げ支援やまちづくりの取り組みを通じて、「だれにも居場所と役割のある地域社会」の実現を目指しています。

生きがい活動ステーション（生き活）
〒657-0038
神戸市瀬区深田町4丁目1番39号 メイン六甲ビル4階（瀬区文化センター内）
TEL. 078-857-3022 FAX. 078-857-3023
E-mail ikigai@cskobe 開館時間 9:30～17:00
休館日 木・日・祝日、お盆、年末年始

●アクセス
・JR六甲駅 駅南直結
・阪急六甲駅から南へ 徒歩8分
・阪神新在家駅から北へ 徒歩6分
・市バス：2・16・18・26・32・36
100・102・103・106各系統
「JR六甲」下車

facebook instagram

**身近な
アート・文化
地域活動に
出会って、つながって、
はじめよう！**

生きがい活動ステーション
生き活

**好きなことは
いつかあなたの
「生きがい」に**

小さな興味も、ふと芽生えた好奇心も、
続けるうちに日々を支える力になります。

生きがい活動ステーション（生き活）は、
出会う・つながる・はじめるを気軽に試せる場所。

いつからはじめても大丈夫！
やりたいこと、やってみたいことを通して
仲間と出会い、新しい社会とつながる時間が、
ここから広がっていきます。

大人の部活プロジェクト
「大人の部活プロジェクト」
（毎週木曜日開催）

生き活1day講座（11月10日開催）
「生き活1day講座」
（毎月第1土曜日開催）

ランチタイムロビーパフォーマンス
「ランチタイムロビーパフォーマンス」
（毎日ランチタイム開催）

こどもも大人もアートな夏まつり
「こどもも大人もアートな夏まつり」
（毎年7月開催）

みなさんの活動事例の一部をご紹介します！

① 学び・体験・仲間づくり **大人の部活プロジェクト**
同じテーマに関心のある人が月1回集い、最長1年活動するプログラムです。交流を楽しみながら、地域の役に立つグループの結成を目指します。

② 学び・体験・仲間づくり **トライやるサポート（トラサポ）**
皆さんの「やってみたい」を生きがい活動ステーションが共催し講座づくりをサポートするプログラムです。おためし講座や仲間募集の機会にも活用できます。

③ ネットワークづくり **ランチタイムロビーパフォーマンス**
瀬区文化センターロビーで、身近な音楽やアートに触れられる時間です。昼休みのひとときに立ち寄り、目と耳で気軽に楽しむことができます。

④ ネットワークづくり **こどもも大人もアートな夏まつり**
さまざまな世代が関わりながらつく。身近なアートのおまつりです。ブース出展や音楽・パフォーマンスなどを通して、一つのテーマに集い、楽しさを分かち合います。

リスクプレイとプレーパーク

高尾千秋（Camplife・ひらかた市民活動支援センター）



リスクプレイとプレーパーク

はじめに

2017年、地元で試験的にプレーパークを始めることになり、「子ども」「遊び」のキーワードから参画することになりました。2019年4月より「プレーパークこうりがおか」が、枚方市の事業として本格的開催が始まり、改めてプレーパークについて学び始めました。

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーとして、プレーパークはそれぞれの地域で独自に開催されています。日本冒険遊び場協会の定義では、「すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共に作り続けていく、屋外の遊び場」とされています。「遊ぶことで自ら育つ」とは何か？青少年キャンプ（組織キャンプ・野外教育）では、「みんなで、仲良く、楽しく、遊ぶ」ことで社会性を養っていくことが最大の目的でしたが、プレーパークの遊びでは、子どもの何が育成されるのかは、私自身の中で曖昧なままです。

プレーパークこうりがおか

京阪電鉄枚方市駅から南へ2.5km、南部生涯学習センターに隣接する奥谷公園に続く場所あり、前にはスーパーマーケット等の商業施設もある、ごく普通の町並みの中にある。



1. リスクプレイ宣言

昨年12月にIPA日本支部定例研究集会に参加した際、オンライントークイベント「リスクを許容できる社会のあり方～オーストラリアのリスクプレイ声明から学ぶ～」が開催されました。オーストラリアの声明は、2025年6月24日に「The risky play position statement for young Australian children- children thriving with risky play」のタイトルでplay AUSTRALIAにより発表されたものです。

①すべての子どもの健康と幸福にとって、危険な遊びが重要、②人生の最初の8年間は、リスクリテラシー、リスクマネジメント能力、そして健全なリスクへの意欲の発達など、子どもの発達全般にとって極めて重要な時期、③この時期の子どもたちは変化や挑戦を積極的に受け入れ、この時期に培われたスキルは、後に自立していく上での意思決定の基盤となるなど、いかに大人も子どもも含めて、リスクリテラシーを持つのが大切かということを広く社会へ発信しています。「オーストラリアでは子どもの生活からリスクプレイがしばしば欠落し、その活動への支援や奨励が行われていない」ことへ危機感によるものです。同じことは日本でも、オーストラリアより顕著であると考えられます。



2. リスクプレイ

リスクプレイとは「不確実性と身体損傷のリスクを伴うスリリングでエキサイティング形態の身体的遊び（Sandseter 2010）」と定義され、①「高所での遊びPlay with great heights」、②「高速での遊びPlay with high speed」、③「危険な道具での遊びPlay with dangerous tools」、④「危険な場所での遊びPlay near dangerous elements」、⑤「隠れる遊びPlay where children go exploring alone」、⑥「取っ組み合い遊びRough-and-tumble play」、⑦「衝撃を伴う遊びplay with impact」、⑧「代理体験遊びvicarious play」の8項目の分類に分類されています。（8 Categories of risky play in the Early Years, Sandseter, 2021）

リスクプレイの8つのカテゴリー



3. リスクプレイの効果

リスクプレイ宣言では、「自分自身や他者、身近な環境について、社会的・認知的・言語的・身体的・情緒的な様々な発達領域にわたって学ぶ機会となる」とされています。

リスクプレイは、①身体的メリット（バランス感覚や運動調整能力の向上。高所遊び等で、自分の体の限界を知り、ケガを防ぐ動きを身につける。）、②社会的メリット（ルールを自分たちで決め、リスクを共有する中で、他者との調整力やリーダーシップが育まれる。）、③認知的メリット（周囲の状況を判断し、「どうすれば安全に挑戦できるか」という論理的思考や空間認識能力が鍛えられる。）、④心理的メリット（恐怖を克服し、失敗しても再挑戦することで、自己効力感やストレス耐性が高まる。）、といった多くの効果が報告されています。

4. プレーパークこうりがおかでは

先のリスクプレイの分類に従うと、プレーパークこうりがおかでは、①高所遊びは、「竹のデッキへ登る」と「竹のジャングルジムで遊ぶ」。②高速遊は、「ターザンロープ」と「タイヤロープ」。③危険な道具遊びは、「弓矢投てき」と「スラックライン」と「ハンモックブランコ」。④⑤は、急な斜面や滑りやすい道、切り株も多く残り、園地内全体が危険な場所であり、隠れて遊ぶことができます。⑦衝撃遊びは、「竹のトランポイン」があり、⑧の代理体験は、年長者の「ターザンロープ」と「タイヤロープ」などの激しい遊びやジャングルジム遊びを見て、年少者はスリルを味わうことになります。



5. 今後の向け

リスクプレイの観点から子どもの外遊びの中でもプレーパークが最も有効な遊び場であることがわかりました。

しかし、子どもの発達発達段階は様々であり、安全にリスクプレイを進めていくには、子どもの一人一人の状態や行動を理解した上、個々に向けた声かけや見守り・支援が求められます。これは、運営スタッフのみでできることではなく、保護者への啓発とともに、大人が一体となった取り組むことが必要になります。リスクプレイについて、まずはスタッフ間での理解を深め、次に保護者への啓発方法を検討することから始まります。

また、実践の中で起こる成功事例や失敗事例の分析を続けデータを蓄積していきたいと考えています。



プレーパークこうりがおか HP
<https://sites.google.com/view/hirakataplaypark>

プレーパークこうりがおかボランティア参加者情報サイト
<https://sites.google.com/view/playparkhirakatavinfo>



高尾千秋（Camplife・ひらかた市民活動支援センター）

1. リスキープレイとプレーパーク

プレーパークは、日本冒険遊び場協会の定義では、「すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共に作り続けていく、屋外の遊び場」とされています。「遊ぶことで自ら育つ」とは何か？ヒントとなるキーワードが「リスキープレイ」でした。

2. リスキープレイ

(1) リスキープレイ宣言

昨年12月にIPA日本支部定例研究集会に参加した際、「リスクを許容できる社会のあり方～オーストラリアのリスキープレイ声明から学ぶ～」を聴講する機会がありました。オーストラリアの声明は、「すべての子どもの健康と幸福にとって、危険な遊び（リスキープレイ）が重要」などとして2025年6月にplay AUSTRALIAにより発表されたものです。¹⁾

オーストラリアでは、子どもの生活からこうした遊びが欠落していることに危機感を持ち、健康や幸福のために「リスクリテラシー」を育む重要性を社会に発信しています。これは日本においても、より顕著な課題と言えるでしょう。

宣言では、8才までの時期がリスクマネジメント（危険回避能力）など子どもの発達にとって重要であると述べられています。3才から8才までが運動能力の基礎ができる神経系が発達する時期で巧緻性（器用さ）、リズム感、バランス感覚等、身体をうまく動かす上での基本的な要素が成長する時期とされています。

(2) リスキープレイとその効果

リスキープレイとは「不確実性と身体損傷のリスクを伴うスリリングでエキサイティング形態の身体的遊び（Sandseter 2010）」と定義され、

①「高所での遊び」、②「高速での遊び」、③「危険な道具での遊び」、④「危険な場所での遊び」、⑤「隠れる遊び」、⑥「取っ組み合い遊び」、⑦「衝撃を伴う遊び」、⑧「代理体験遊び」の8項目のカテゴリーに分類されています。²⁾

これらに挑戦することで、①身体的メリット（バランス感覚や運動調整能力の向上、自分の体の限界を知り、ケガを防ぐ動きを身につける）②社会的メリット（ルールを自分たちで決め、リスクを共有する中で、他者との調整力やリーダーシップが育まれる）③認知的メリット（周囲の状況を判断し、「どうすれば安全に挑戦できるか」という論理的思考や空間認識能力が鍛えられる）④心理的メリット（恐怖を克服し、失敗しても再挑戦することで、自己効力感やストレス耐性が高まる）といった多くの効果が報告されています。

(2) プレーパークこうりがおか

リスキープレイの観点から子どもの外遊びの中でもプレーパークが最も有効な遊び場であることがわかりました。

しかし、子どもの発達発達段階は様々であり、安全にリスキープレイを進めていくには、子どもの個々の状態や行動を理解した上で、声かけや見守り・支援が求められます。

実践の中で起こる成功事例や失敗事例の分析を続けプレーパークでのリスキープレイの効果測定などの研究を進めていきたいと考えています。



図：プレーパークこうりがおか

参考文献

- 1) 「The risky play position statement for young Australian children- children thriving with risky play」
- 2) 8 Categories of risky play in the Early Years, Sandseter, 2021



芦屋グローバル広場

～step up with us～

富上壮太（甲南高校） 白川清文（甲南高校）

高田真弥（甲南高校） 吉田諭史（甲南高校）



甲南高等学校 芦屋グローバル広場

～step up with us～



「芦屋グローバル広場」（通称:芦グロ）は外国にルーツを持つ児童の居場所作りと日本語を中心とした学習支援の場です。
高校生 大学生 教員 教員OBで構成されています。**共に成長を目指す**団体です。

活動背景

「2024年度 芦屋市外国人市民意識調査 アンケート調査結果概要」より

外国にルーツをもつ児童が増える



芦屋市の約2%が外国人

日本語に不安を抱える人が多い

在留資格	不安を感じる	不安を感じない
外国人	35.0%	65.0%
日本人	10.0%	90.0%

約35%が不安を感じる

外国にルーツをもつ児童に学習支援を行う

毎週金曜日に実施
高校生2名と大人1名が講師として支援

遊ぶ例



トランプ



ジェンガ

芦グロでは児童と高校生が遊ぶことで家や学校とは違った**第三の居場所作り**も目指しています。
児童がリラックスして参加することが出来ます。

活動の流れ



16:00～16:30
遊ぶ



16:30～17:00
勉強



17:00～17:20
休憩



17:20～18:00
勉強

活動歴

夏休み期間に計6回実施

9月から**毎週金曜日**に実施
(3月13日時点で27計回実施 計59名の児童が参加)
10月31日ハロウィンパーティー
12月26日クリスマスパーティー
1月9日正月イベント実施

活動での学び

- ・ 色々な背景を持つ児童がいる
- ・ 漢字の読み書きに不安を持つ児童が多い
→書き順の修正や読み方を中心的に勉強する
- ・ **第三の居場所を作る**ことで勉強に意欲的になる
- ・ 分かった実感が多いほどやる気が増す
→**たくさん褒めて**達成感を感じられるようにする
- ・ 一から計画することの難しさ
- ・ 集中力を続けさせることの難しさ
- ・ 日本語を第2言語として学ぶことの難しさ

課題:活動の周知と参加人数の最適化

周知度を上げたい一方で講師のキャパシティに限界がある。
対象を絞った情報発信、講師の育成など
「持続可能な活動体制」の構築を目指す。



名塩和紙と日本酒で西宮南北を結ぶインバウンド誘致の提案

杉光美咲（神戸海星女子学院）

高谷美優（神戸海星女子学院）

利根川実（神戸海星女子学院）

名塩和紙と日本酒で西宮南北を結ぶインバウンド誘致の提案

神戸海星女子学院高等学校2年 杉光 美咲 高谷 美優 利根川 実

要旨

西宮市には北部が南部と比べて観光客が少ないことを始めとする北部問題がある。その背景として南部と比べて北部にある観光資源があまり注目されていない事が挙げられる。そこで私達は、海外から人気の高い日本の伝統工芸品である西宮北部の名塩和紙に注目し、現地調査、インタビュー調査を行った。私達は名塩和紙を活かしてインバウンドを呼び込む方法を新しく提案する。

研究の背景

1.インバウンドの現状
岩本(2024)「インバウンド観光客が地方にも目を向けて、実際に現地まで来てもらうのが大きな課題である。地域にも独特の魅力があるが、外国からの多くの観光客は有名な観光地を中心に巡る場合が多い。」

2.兵庫県のインバウンド
観光庁によると2024年度は日本に3687万人のインバウンドが訪れている。
また、兵庫県によると2024年度は194万人のインバウンドが訪れている。

表1.阪神西宮および西宮市内 インバウンド対応人数
西宮市観光協会作成

	20	25	30	35	40
1	4	5	6	7	8
2	5	10	10	10	10
3	6	35	14	25	25
4	7	16	14	25	25
5	8	6	25	10	10
6	9	20	14	10	10
7	10	13	16	42	42
8	11	9	8	8	8
9	12	8	8	8	8
10	1	18	10	10	10
11	2	12	10	10	10
12	3	7	11	11	11
合計	157	174	174	174	174

(※) 4-10月 103 87 153

3.西宮のインバウンド
一年間に阪神西宮および西宮市内に訪れる外国人の人数が150人前後である。

ANNNewsCH 2024/02/04によると一年間に大阪観光客に訪れる外国人の人数は月に2万5000人前後である。

4.インバウンドのニーズ

交通手段

インバウンドの利用した交通手段として近郊バスを利用した割合が高い。

酒

訪日外国人の酒の購入率は23.5%と高く、訪日前に楽しみにしていたこととして32.2%が日本の酒を飲むことを楽しみにしていた。
日本の歴史・伝統文化体験
26.8%が日本の歴史・伝統文化体験を楽しみにしている。
阪神南部に訪れる観光客は西宮の歴史・文化に興味を持ち、伝統文化を体験するため訪れている。

5.西宮の地域資源

- ・阪神甲子園球場
- ・西宮神社
- ・瀬玉邸・西宮邸
- ・阪急西宮ガーデンズ
- ・名塩和紙

参照にしのみや観光協会作成西宮探訪マップ

図1 西宮市の地図

出典: Map-iti マップイット(「西宮市」)

6.西宮の北部問題

「西宮市の現状と課題」によると、西宮市北部地域は人口が減少し、商業施設の数も少ない。その結果、人の客足が少なく、地域のにぎわいや経済活動が十分に活性化していないという、いわゆる「北部問題」が存在する。
西宮南部と北部を結ぶ公共交通機関が不足しており、西宮市のバス路線は利用者の減少や燃料費高騰のため運行が難しくなっている路線もある。

表2.インバウンド客の購入品
出典: 観光庁「インバウンド消費動向調査」

品目	購入率 (%)	購入金額 (円)
食品	70.8	10,100
衣類	23.5	10,100
美容品	5.9	8,800
その他	46.4	10,100
その他	31.3	10,100
その他	28.1	10,100
その他	11.4	10,100
その他	41.7	10,100
その他	24.9	10,100
その他	5.9	8,800
その他	2.3	8,800

図3.インバウンド客の購入した交通手段

出典: 観光庁「インバウンド消費動向調査」

研究目的

名塩和紙を活用した西宮北部へのインバウンド誘致の提案を行う。

研究方法

①現地調査	名塩和紙学習館へ行き、和紙の歴史や外国人、大人数、外国語対応は可能なか調査 西宮酒蔵通りへ行き、白鹿記念酒造博物館でお酒の歴史や上記と同様に調査
②インタビュー調査	名塩和紙学習館 実習指導員 瀬口久美子さんへのインタビュー 白鹿記念酒造博物館 学芸員 宮九品さんへのインタビュー
③文献調査	観光庁HP 阪急バスHP、さくらやまなびバスHP 白鹿酒造HP

結果

①現地調査

名塩和紙学習館

白鹿記念酒造博物館

図5.和紙の説明

図6.和紙の説明の外国語表記

図7.外国語音声ガイド

②インタビュー調査

名塩和紙学習館

Q1.名塩和紙作りを体験しにきた外国人は一年間に何人ほど来ますか？

過去2年間で0人でした。もっと海外の方も来ていただきたいです。

Q2.同時に外国人が何人紙漉き体験をすることができるのですか？

海外の方だと体格や通訳の関係により1回につき20人程度です。

白鹿記念酒造博物館

Q1.白鹿記念酒造博物館に訪れたインバウンドはどれくらいの人数ですか？

去年1年間では664人です。

Q2.インバウンドが増えることに対してどう思いますか？

もっと増えてくれたらうれしいです。

③文献調査

観光庁HP

訪日外国人が出発前に役立つ旅行情報収集手段としてSNSや動画サイトが挙げられている。

阪急バスHP、さくらやまなびバスHP

	バス	料金	時間
西宮市役所前～下山口	さくらやまなびバス	700円	50分
下山口～名塩小学校前	阪急バス	400円	21分

白鹿酒造HP

白鹿クラシックス しぼりたて原酒 1,265円(税込)

白鹿クラシックス しぼりたて原酒 辛口 1,265円(税込)

考察

結果より西宮市北部の課題解決に対する取り組みのひとつとしてインバウンドの誘致が挙げられる。その方法として、名塩和紙の製作体験と日本酒を組み合わせた観光プランを提案する。この体験を通して海外の人々が名塩和紙に興味を持ち、西宮市北部を訪れるきっかけになることが期待される。

以下観光プランの詳細な内容である。

体験内容	料金	時間
海外より訪れる外国人に日本酒の歴史を、実際に見学し、館内では日本酒の歴史や二瓶に楽しめる。更に人々の心を惹きつける体験。体験が可能な。	入館料 大人500円 小人250円 白鹿クラシックス しぼりたて原酒 1,265円(税込) 白鹿クラシックス しぼりたて原酒 辛口 1,265円(税込)	1時間10分程度
バス	西宮市役所前～下山口～名塩小学校前	1時間10分程度
名塩和紙学習館	和紙の歴史や伝統の手漉き体験、実際に体験し、館内では日本酒の歴史や二瓶に楽しめる。更に人々の心を惹きつける体験。体験が可能な。	2時間程度
白鹿酒造	和紙の歴史や伝統の手漉き体験、実際に体験し、館内では日本酒の歴史や二瓶に楽しめる。更に人々の心を惹きつける体験。体験が可能な。	2時間程度

結論

2026年1月20日に西宮市役所に以上で提案を実行するために、しのみや観光協会の職員、西宮市役所職員の方々とワークショップを行った。そこで西宮市とタッグを組み、私達が作成する観光プランの動画を西宮市の公式Instagramに掲載することが決定した。



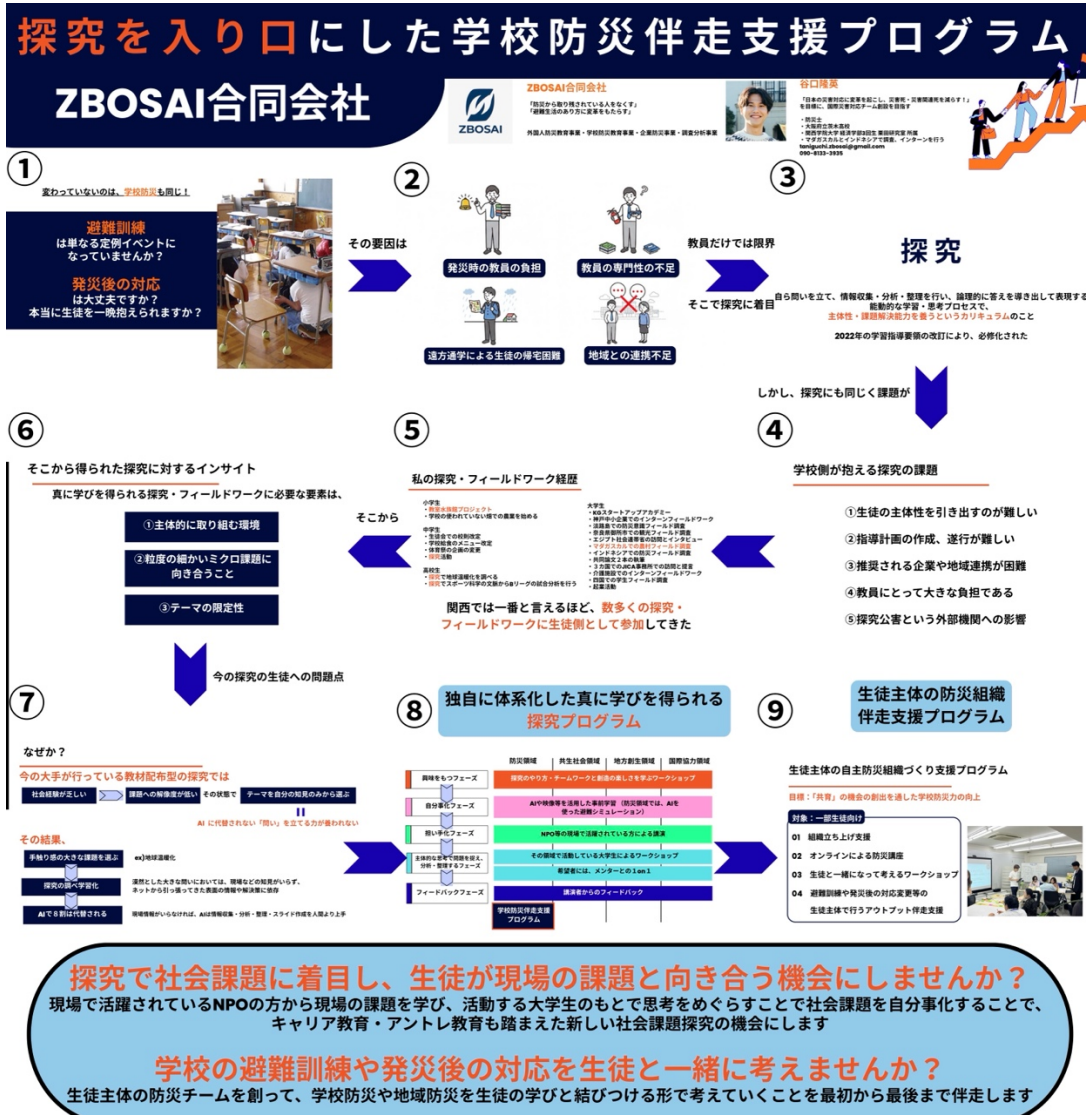
図9.ワークショップの様子

参考文献

1. 4月観光情報2023 9月15日(金)観光情報(「NTT」公式サイト) 12月観光情報(「NTT」公式サイト) 2023-12-15
2. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
3. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
4. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
5. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
6. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
7. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
8. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
9. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
10. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
11. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
12. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
13. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
14. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
15. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
16. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
17. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
18. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
19. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15
20. 観光庁「インバウンド消費動向調査」 2023-12-15

探究を入り口にした学校防災伴走支援プログラム・ 外国人防災リーダー育成プログラム

谷口 隆英（関西学院大学／ZBOSAI 合同会社）



外国人防災リーダー育成プログラム

外国人が抱える防災上の課題

日本では近年、在留外国人が増加しているが、防災分野においては多くの課題が存在する。第一に、言語の壁である。災害時の避難情報や警報は日本語で発信されることが多く、日本語に不慣れな外国人は情報を十分に理解できない場合がある。第二に、文化的・制度的な理解の不足がある。日本特有の避難所運営や地域防災の仕組みは外国人にとって馴染みが薄く、災害時にどのように行動すればよいかわからないことが多い。第三に、防災教育の機会が限られている点である。外国人向けの防災教育はボランティアや自治体の事業等に依存していることが多く、継続的に提供されにくい構造がある。さらに、外国人住民は地域コミュニティとの関係が弱い場合もあり、災害時に支援ネットワークから孤立する可能性も指摘されている。これらの課題により、外国人は災害時に必要な情報や支援にアクセスしにくく、防災から取り残されやすい状況に置かれている。

外国人防災リーダー育成プログラム

①オンラインによる防災講座 ～防災知識をインプットします～

内容：災害、発災後の対応について・備えについて・日本語について・110番・119番について・情報の受け取りについて など
国籍や出身地によって、災害そのものに対する知識量が違ってきたり、日本に関する情報が不足していたりします。その知識レベルを一定まであげるといった目的もあります。

②対面での応急対応と防災ワークショップ
内容：消火器・AEDの使い方の講習、避難所運営を考えるワークショップ、マイトimelineの作成

③防災キャンプ

内容：発災時を想定した形の防災キャンプを実施、備蓄食や非常用グッズ、避難所運営を体験

④所属する機関や企業に戻ったあとの防災研修

所属機関や企業の人へ、研修生自ら教えていく機会を作り、その設計や実施などを伴走します。それぞれの組織の中で自動と共働ができる仕組みを作ることを目指します。

理のお菓子工場で中国人労働者に防災講演を実施した時の様子



117(阪神淡路大震災の日)に、神戸元町のアジアカフェにて、外国人向け防災ワークショップを開催した時の様子

THE

CIRCLE： プロギング in 北九州

塚本 美紀（西南女学院大学）
峯 夢実（西南女学院大学 2 年）

＼西南女学院大学ゴールデンズクラブ／

THE CIRCLE

～プロギング in 北九州～

【団体紹介】西南女学院大学ゴールデンズクラブ

女性のエンパメントのために国連と協働して活動しているNGOである国際ゾンタの傘下にある北九州ゾンタクラブの支援を受けている学生組織で、「より良い世界を作ろうとしている未来のリーダーたち」であることを目標に、様々な活動を行っている。西南女学院大学、小倉綺織、北九州ESD協議会で構成する「プロギング in 北九州 実行委員会」のメンバーとして、プロギングを実施している。

チーム写真



背景

プロギングとは、ジョギングしながらゴミを拾うスウェーデン発祥の新しいフィットネスで、その価値は「社会貢献と言わないこと」。社会のためではなく、走って拾って笑い合って、活動者は自分が楽しむために行動し、いつの間にか街もきれいになって誰もが笑顔になりお互いを称えるスポーツ。環境モデル都市である北九州市でプロギングを開催することで、参加者だけでなく北九州市民の環境活動へのモチベーションの向上や、北九州市外の人にも活動を知ってもらうきっかけになるのではないかと考え、企画を行った。



活動内容

一般社団法人プロギングジャパンの協力のもと、ジョギングとごみ拾いを組み合わせた「プロギング」を実施した。北九州市内の4大学（九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学/九州国際大学/西日本工業大学/西南女学院大学）の学生が中心となり企画・広報・当日の運営を行った。のんびりコース（約2km）、ノーマルコース（約3km）、エキスパートコース（約4km）の3コースを設定し、全8コースで展開した。当日は、大学生、地元スポーツ団体、一般参加者が混成となったグループを編成し、世代や立場を超えた交流を図りながらプロギングを行った。また、観光文化学科の学生が学生ガイドとして、コースに組み込まれた小倉を象徴するスポットの説明を行うことで、小倉の魅力を発信する機会を創出した。また、イベント終了後に、特別協賛をいただいたギラヴァンツ北九州の試合を応援し、スポーツを通じて地域愛の醸成も図った。



方法・工夫

ジョギングとごみ拾いを組み合わせたプロギングを実施し、約2km・3km・4kmの3種類のコースを設定し全8コースで展開した。体力に応じて選択できるようにすることで参加のハードルを下げる工夫を行った。また、大学生・地元スポーツ団体・一般参加者による混成グループを編成することで、世代や立場を超えた交流の創出を図った。同日開催された北九州市の環境イベント「エコライフステージ」と連動させ、環境における意義をより一層深められるようにもした。さらに、観光文化学科の学生が学生ガイドとして小倉城など小倉を象徴するスポットの説明を行い、環境活動と地域の魅力発信を結び付けた。加えて、回収したペットボトルを再生糸として伝統織物「小倉織」の新製品へアップサイクルする仕組みを取り入れ、「拾って、つなげて、生まれ変わらせる」資源循環を体感できる取り組みとした。

成果

当日は、参加者約150人、回収したごみは約29キロにのぼった。回収したごみのうち、ペットボトルは再生糸となり、再生糸は北九州を代表する「小倉織」に生まれ変わる予定である。イベント後に実施した参加者アンケートでは「中学生から大人までたくさんの方々と交流を深めることができた」といった幅広い世代との交流を楽しめたという声や、「ポジティブな気持ちで楽しくごみ拾いという地域貢献ができた」、「明るく元気なスポーツ選手からパワーをもらった」といった地域貢献への意識向上やスポーツ（団体）への親しみを感じられたことがうかがえる意見が見られた。このことから本イベントは目的に沿った内容であったといえる。

団体情報

・西南女学院大学
【ゴールデンズクラブ】
<https://www.zonta-kitakyushu.jp/golden-z-club>

【観光文化学科】
・THE CIRCLE



・株式会社小倉綺織
<https://www.kokura-shimashima.com/>
・北九州ESD協議会
<https://www.k-esd.jp/>



課題と今後の展望

今回のイベントでは、運営にあたった4大学の学生が事前に集まり打ち合わせを行う時間が十分にとれなかったため、当日の流れを把握できていない部分があった。また、参加者からは「解散後に別グループと交流する時間がなかった」といった声もあがったため、事前準備や参加者の交流の面での改善策を見つける必要がある。今後は、本活動を通して得た成果と課題を踏まえ、関係団体との連携を強めるとともに、持続的な活動の構築を目指す。

ESD に触れ合う空間づくり

得田 佳那・上田 幸輝・岡崎 実依子（神戸大学国際人間科学部）

ESDに触れ合う空間づくり

① 私たちの前期の歩み

ESD演習2025（上田幸輝、岡崎実依子、得田佳那、鳥山紫帆）

【ESDってなんだろう？】

松岡先生の講義形式でESDについて確認
しかし...ESDが何かわかるような分からないようなまま終わる。

【各自の理解の共有化～WSを通して～】

今度は松岡先生抜きで生徒たちそれぞれが思い描くESDについて考え、認識を共有。
→同じESDでも**それぞれが考えるESDの在り方、問題意識が多様！**
身近な問題から地球規模の課題まで様々な課題について共有
→ESDを通して**社会運動に繋げていく必要性**を実感
ただ、僕たちは何も現場を見ていなかった...
→**実際にESD実践の現場に赴いて一層深めていこう**

② 問題意識

【問題意識1】

大学生はそれぞれ多様な問題意識を持っているが、それを発露したり、交差させたりする機会が不足している。
→問題意識や当事者性を持っても、**実際には実践にまで発展していない。**
→**それぞれの当事者性が現れ、交差していくきっかけとなる空間をつくりたい！！**

【問題意識2】

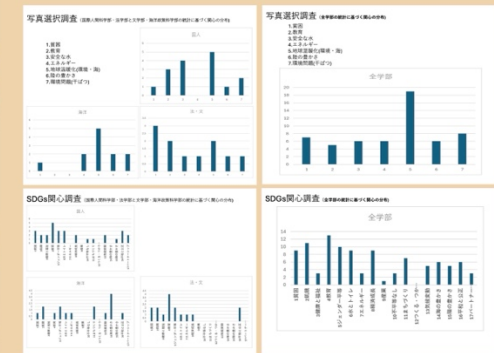
それぞれの問題意識を社会活動に発展させるうえで、
ESDは役に立つにも関わらず、多くの人はESDの概念自体を知らない。
→**ESDの入口になる空間をつくりたい！！**

④ 実験

Aブレ調査（アンケート調査）

目的：大学生のテーマへの関心の多様性を確認する

調査方法：神戸大学神戸第一キャンパスのラーニングコモンズにてアンケート設置
google formを用いた調査（回答がなかなか集まらず、友達に各学部・学科のグループLINEに
流してもらった）
回答者数：のべ5人



Bワークショップ実験

数字でぼん カードで決まる、ゆる社会トーク

目的：大学生が気軽に参加できるゲーム形式のワークショップを実施し、ESDの入り口となる空間
づくりを探索

実践方法：大学生が集まりやすい昼休みにゲーム形式のワークショップを実施
ゲームを体験し議論を深め、アンケートや聞き取りを行う

期間：2026年1月20日、21日（ワークショップ実施）、22日（振り返りワークショップ）
時間：12:30~13:00（大学昼休時） 対象：神戸大学生

（準備・会場設定）

事前に大学内のグループラインでの告知や掲示を行い、参加を呼びかけた。
会場は神戸大学神戸第一キャンパスのラーニングコモンズ
（共通教育授業などで様々な専攻の学生が集まりやすいため）
→下見でどのような環境か、周囲の環境なのか調査
当日は椅子の配置や音楽、お菓子などを工夫し居心地のいい空間を心がけた

（実施 20日、21日）

全体の大まかな流れ：自己紹介→ルール説明→ゲーム実施→感想や気づき・ゲームの改善点などの共有

・来た人たちがグループに自然な形で分けた

※学部や知識量の差を考慮

※1グループ最大4人、最大4グループ

・会場全体を運営するメインファシリテーターと、各グループのファシリテーターを配置

・事前に作成したルール説明資料を会場前方に投影しながら全体に説明

また各テーブルで不明点や指示をファシリテーターが追加で説明

・ゲームを実施

→多様な背景を持つ人々が発言しやすい空間づくりを意識し、発言機会の均等化を目指した

・各グループで気づきや学びを共有し、メインファシリテーターと対話形式で全体に共有

（実施 22日）

全体の大まかな流れ：

自己紹介→それぞれが体験した中で感じたことを共有→メインファシリテーターと対話・議論

・ワークショップを通して感想、より良い実践方法の検討やゲームの改善点を時間をかけて議論・共有

・どういう意図でこのワークショップを実施したのかについて明かし、その内容について議論

・交流・ゲームを通してESDを深めたい、すべての人のESDの入り口になってほしいという思いを共有

・ワークショップを通して生まれた気づきや学びを更に発展

今後実践して他の場面でも活躍できるようにアイデアを提供

⑤ 「数字でぼん～カードで決まる、ゆる社会トーク～」ルール説明

テーマ
SDGsに関する課題
【全3種類】
・地球温暖化問題
・貧困・ジェンダー

お題
テーマに引いたお題と解決策
例）地球温暖化問題の対策としての「脱炭素」

数字の捉え方
例）地球温暖化問題というテーマの場合
数字が小さい＝課題が深刻で「有効でない」
数字が大きい＝課題が深刻で「有効である」

ワークショップの様子

- ①「数字カード」を1人2枚引く。△他の人に数字を見せない
- ②自分の持っている数字に合う「お題カード」を選ぶ
- ③「お題カード」を見せ合いながら、数字カードが小さい順になるように「お題カード」と「数字カード」を並べる
- ④「お題カード」は裏返して、他の人に見えないようにする
- ⑤「お題カード」を並べたら数字カードを小さい順に公開！
- ⑥順番通りに並んでいたら成功！
- ⑦どうしてうまくいったのか、またはいかなかったのかみんなで考えよう

⑥ 検証

ワークショップ実験の分析～ふりかえりワークショップと事後アンケートより～

1. 良かったところ

・ゲームだから**気軽にできた**

・数字が分かるのは自分だけ→**必然的に能動的に自分の意見が求められる**（問題意識の発露）

・人によって**問題の捉え方が異なることを再認識した**（問題意識の交差）

・答えがない問題を話し合う楽しさを実感できた

・知らない知識や情報に触れることができた

2. 改善点・反省点

・自分の意見を押すために他者の意見を聴き流してしまう（交差の不十分さ）

・ほかの班ではどんな結果・意見交換がされたのかを共有したい（交差の限定性）

・自分で思いついた問題を書くことができるカードがほしい

（問題意識発露の機会欠如）

・問題の大きさが異なっていた

・案外必要になる一合意形成が困難になることを再認識した

・ジェンダー問題の数字の捉え方が曖昧だった

・内容の真面目さ（ややこしいアプローチ）

・より多様なテーマがほしい

・ジェンダーとESDのつながりが分かりにくかった

3. ESDの入り口となったのか？

このワークショップはESDの入り口になれる！

ゲームの気軽さ（ややこしいアプローチ）

内容の真面目さ（ややこしいアプローチ）

ESDにこれまで触れたことがなかった

人が取り組みやすい

⑦ 考察

ブレ調査とワークショップ実験を通して、**仮説は支持された！**

【今後どう生かすか】

・大学生以外にもこのカードゲームを体験してほしい

・多様な世代や分野の人を交えて実施したい

・ESDのフィールドワークやワークショップのアイスブレイクの一種として使う

→より多くのひとがESDに触れるきっかけとなってもら



災害発生時の避難所運営を担う高校生の育成

内藤 理彩・加古 昌那・上辻 りな・森田 真央（神戸海星女子学院高等学校 2 年）

災害発生時に避難所運営を支える高校生の育成 ～防災教育学習指導案の作成～

神戸海星女子学院高等学校

加古昌那 上辻りな 森田真央 内藤理彩

要旨

地震調査研究推進本部によると、南海トラフ地震の発生確率は60～90%程度以上と示されており、日ごろの備えが望まれている。また、本校の避難訓練の頻度の少なさや、備蓄品の不足を感じ、防災に関する探究活動を始めた。その後、ワークショップに参加し、災害が発生した際に高校生が避難所運営を支えるような防災教育学習指導案を作成・実践することに決定した。現地調査を通して避難所にある防災グッズの組み立て方を知っていることの重要さを感じたため、授業内容を実践的な防災グッズの組み立て方にした。その学習指導案を用いて授業を行い、アンケートから実際に避難所で高校生がどのように働きかけるべきかという説明が不足していたことが分かった。今後はそれらの改善点を踏まえ修正を重ねて新たな学習指導案を完成させる。

研究背景

①南海トラフ地震をはじめとした巨大地震の想定

「南海トラフ地震の発生確率は、高いと評価されている」

（発生確率の評価は、地震調査研究推進本部（R7.9）による）

⇒私たちは可能な限り防災に関する正しい知識を他者に意識づけることが迅速に求められると考える。

②避難所での人手不足と高齢化

「福祉避難所について、職員の被災等により、人手不足等の課題が見られた。」

（出典：内閣府 令和 6 年能登半島地震における避難所設営の状況）

③ALL HAT2025における学び(2025/9/20)

神戸市中央区役所地域協同課係長 櫻井さん

- ・行政だけではなく地域の人も避難所設営ができるようになってほしい
- ・特に体力のある高校生が積極的に参加してほしい
- ・防災教育で大切なことは「知る」「見る」「実践する」
- ・実際に防災グッズに触れてみる
- ⇒高校生に向けた、防災教育(防災グッズ)の実施

④先行事例

・鹿児島県立種子島中央高等学校(出典:Avaya vol.20)

災害発生における高校生の役割を発生前、発生時、発生後に分けて高校生の役割について、地域特有の取り組みを考えた。

・高知工業高校(出典:テレビ高知2025/12/9)

生徒主体の防災訓練を実施した。避難誘導の後、備え付けのポート組み立てやガス式発電機の起動などを行った。

⇒避難所の設営や運営に関する防災教育の実施事例は無い

研究方法

現地調査(セミナー参加、インタビュー調査、防災訓練参加)

研究目的

担い手が人手不足かつ高齢化している避難所において高校生が正確に防災グッズの使い方を知り、避難所運営の力になれるような授業を実施する。

研究結果

現地調査

①防コミ会長へのインタビュー (2026/1/25)

東須磨防災福祉コミュニティ会長 佐藤さん

・私たち高校生にできることは生活避難の部分である

⇒避難所設営の部分で力になれる

②芦屋市防災総合訓練 (2026/1/25)(芦屋市立岩園小学校)

岩園町自治会自主防災防犯会 原田さん

・緊急時、避難所には市の人は来れないかもしれないから、防災用具などは市民で組み立てるしかない

⇒防災グッズの組み立て方を知っていることが大切

③南海トラフ巨大地震へ地域の備えを進めるセミナー

(2026/2/11)(人と防災未来センター)

- ・南海トラフ巨大地震に備える災害ボランティア意見交換会
- ・地域の目線で作る防災と災害対応クロスロード
- ・災害看護の視点で考えるMy個別避難計画作成

⇒様々な年代・職業の方と交流し、意見を交換する中で避難所の人手不足・高齢化問題が大きいと学んだ。

④令和7年度 西区総合防災訓練(2026/2/15)(神戸市立長坂小学校)

避難所設営訓練として2種類の防災ベッドの組み立てを体験した。この2種類には組み立ての過程で難易度に差があり、組み立てにかかる時間や寝心地、お年寄りの方などに対する利便さなどの観点で比較することができた。また、運営状況をホワイトボードに掲示することによって口で伝達することなく、そのときのニーズを多くの人に伝えることができることも知り、避難している人たちの中で当番制を取り入れるなどして、地域の人々との協力が必要になることを学んだ。

考察

避難所運営に携わる職員の高齢化や、職員の被災等による人手不足の可能性を知ってもらうことで、高校生の避難所での行動力促進に繋がると考えた。また、ベッドの組み立てを説明書を見ながら行ったとしても想像以上の時間と力が必要であり、一度体験してみないと避難所での即戦力にはなれないと思った。そのため、授業内容に防災ベッドの組み立てを盛り込む必要があると考えた。

結論

1. 授業実践(2026/3/10)

時間：1時間(14時30分～15時30分)

場所：神戸海星女子学院高等学校 教室・踊り場

対象：神戸海星女子学院高等学校2年生 11名

内容：避難所の知識、避難所にある防災ベッドの組み立て方

目標：避難所運営・防災ベッドの組み立て方について知り、災害発生時に活用できるようにする



図1 授業風景(担当教員撮影)



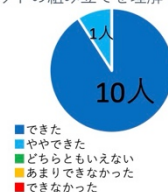
図2 組立風景(担当教員撮影)

授業後アンケートの実施(匿名回答)

実際に活用できると思うか



ベッドの組み立てを理解できたか



参加者の主な意見(自由記述)

- ・「災害時にどういった行動が必要かを学びたい」
- ・「ベッドの設営だけでなく、防災についてももっと知りたかった」
- ・「避難所での生活で困ることを具体的に教えてほしいかった」

2. 今後の展望

今回の授業では、参加者の主な意見でも述べられているようにベッドの組み立て方に焦点を当てすぎたため、組み立て方を理解した上で実際に高校生が避難所でどのように働きかけるべきかという説明が不足してしまった。これらの改善点を踏まえ、防災の本質の理解をさらに促進できるように修正を重ねて新たな学習指導案を完成させる。

参考文献

- 政府 地震調査研究推進本部(2026年)「南海トラフの地震活動の長期評価」を一部改訂しました 地震調査研究推進本部事務局
https://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/subduction_fault/summary_nankai/
 (閲覧日:2026年3月12日)
- 内閣府(2024)令和 6 年能登半島地震における 避難所運営の状況
https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/pdf/kensho_team3_shiryoo02.pdf
 (閲覧日:2025年12月11日)
- Avaya令和元(2019)vol.20 鹿児島県立種子島高校 災害発生時における高校生の役割
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/tanechuo/docs/2022110700098/file_contents/201.pdf
 (閲覧日:2025年9月11日)
- 高知テレビ(2025)生徒主体の防災訓練
<https://news.yahoo.co.jp/articles/0c3a9e3141b51b201b33bef3345dad3bbf60c65d>
 (閲覧日:2025年12月11日)

耕さない農業

長坂 資弥（中部大学 4 年）



耕さない農業

こんにちは 大学を卒業した長坂資弥（もとや）です。日本の今ある多くの問題を日本人に知ってほしいと思い、何かできることはないかと考えたとき、無農薬の農業をしようと考えました。その中で愛知県新城市で行っている松澤正満さんの耕さない農業をYouTubeで知り、感銘を受け、これを本気でやると決めました。



日本の問題とは

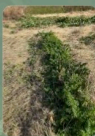
- ・日本文化の衰退
- ・食料自給率
- ・水道民営化
- ・食による病気の激増
- ・外国人問題
- ・扶養問題
- ・消費税問題
- ・太陽光問題
- ・教育問題など

僕は昨年5月から愛知県安城市で約3反つまり3000㎡ほどの農地を借りて、耕さない農業をしています。耕さない農業とは…

- ・耕さない…虫や微生物、菌と一緒に育てる
- ・水やらない…自然野菜の力を最大限に出す
- ・肥料しない…栄養バランスをそのまま
- ・農薬しない…元気な野菜が元気な体に

播いた野菜は…

小松菜 壬生菜 水菜 紫カブ 大根 金時人参 高菜 菜の花 ほうれん草
子かぶ 枝豆 わけぎ あさつき 太ネギ ごぼう いんげん えんどう豆






金時人参

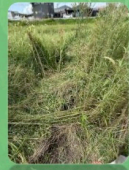
菜の花

高菜

枝豆

播き方

播く場所だけ雑草を刈る
そこに播くだけ



結果

1. 枝豆は途中で力尽きたが種は残してくれた
2. えんどう豆はほぼ枯れた
3. 根が腐るものがあった

考察

1. 枝豆は播く時期が4か月程遅くなり、枝豆に適していない気温と湿度であったため育ちにくかった。
2. えんどう豆は播く時期が半月早く、冬前に育ちすぎてしまったからであろう
3. 腐る場所の土を確認したところ、もみ殻と牛糞がまかれている場所であることが判明した。播かれていない場所がそんなに腐っていないことから過度な栄養により野菜が病気になったのであろう。

結論

基本的に草を刈り、播いただけで野菜はとってもおいしく育った。枝豆の時期が違うのに種を残したことに自然の生命力を感じた。正直、もみ殻と牛糞がまかれている場所の野菜は大きかったが味はえぐみがあり、根から腐りかけていた。一見よく育っていると思われるが実際は弱っているのかなと感じた。自然のバランスは壊した瞬間、修正しないとイケない初めから邪魔をしないのが、一番生命力がある。自然は自然が一番知っていると再確認できた。

海と空の約束 生物多様性戦略

西谷 寛（海と空の約束プロジェクト）

1. わかりやすい環境教育教材の開発・普及

環境問題の解決には、わかりやすく実践行動につながる環境教育が不可欠であるとの考えから、環境絵本『海と空の約束』を出版した。絵本は「国連生物多様性 10 年日本委員会」の推薦図書に選定されており、紙芝居（A1・A2・B4 サイズ）やデジタル紙芝居 DVD も制作し、全国で無料貸出を行っている。また、日本語をはじめ 15 か国語以上に翻訳され、JICA やオイスカ、学生団体等を通じて海外でも環境教育教材として活用されている。

2. 体験を通じた環境教育と地域実践

知識の付与だけでは環境は守れず、持続可能な社会は実現できない。そのため、心に響く絵本や紙芝居に加え、ネイチャーゲームや自然観察会、ビオトープ整備、地域環境保全活動などの体験学習を組み合わせながら、自分たちの暮らしと自然環境、生きものとのつながりを学ぶ機会を提供している。保育園、幼稚園、小学校から大学、高齢者大学まで幅広い世代を対象とし、3R 推進や食育、防災教育等とも連携したプログラムを展開している。

3. 多様な主体との協働による人材育成

持続可能な社会の実現には、特に大学生が主体的に行動できることが重要である。兵庫県立大学の環境サークルとの協働や、神戸大学を中心とする「ESD 推進ネットひょうご神戸」への参画を通じて、大学生とともに環境教育活動を推進している。また、自治体、企業、NPO、地域団体等との連携により、地域に根ざした環境教育と ESD の実践を進めている。

大学生にとっては、環境問題や地域課題について学ぶだけでなく、子どもたちへの環境教育や地域活動の企画・運営に主体的に関わることで、実践的な学びの機会となっている。多様な世代や組織との協働を通じて、コミュニケー

ション力や調整力、課題解決力を身につけるとともに、自らの行動によって地域や社会に働きかける経験を積むことができる。こうした活動は、次世代の環境保全や地域づくりを担う人材育成にもつながっている。

また、「ESD スタディツアープログラム」の事業の一つとして活動を展開しており、大学生や若者が地域の自然や環境保全活動の現場を訪れ、多様な主体との交流を通じて持続可能な社会づくりについて学ぶ機会を提供している。

4. 国内外への展開と環境意識の醸成

講演会や原画展等を通じてつながった自治体の保育園、小学校、図書館等への絵本寄贈を継続するとともに、屋久島や小笠原諸島、西表島など全国の島々にも寄贈活動を行っている。また、JAL や ANA 国際線等の機内児童図書として採用されるなど、多様な場で環境教育の機会を創出している。さらに、JICA や国際 NGO、企業等と連携し、アジアやアフリカの子どもたちへの教材提供を進めている。加えて、「海と空の約束賞」の創設や、子育て、まちづくり、農業・漁業、商店街等との連携を通じて、環境問題に関心の薄い層にも働きかけ、環境意識の醸成と行動変容を促進している。

【これまでの成果】

★国連生物多様性 10 年日本委員会の推薦図書
<http://www.goo.ne.jp/green/topics/biodiversity/books/>
★「生物多様性アクション 2014」（国連生物多様性 10 年委員会）審査員賞受賞
<http://5actions.jp/award/result.html>
★日本自然保護大賞 2015 入選★
http://award.nacsj.or.jp/result_2015_list.php
★「ひょうごの生物多様性保全プロジェクト」に認定（2015 年 8 月）
http://www.pref.hyogo.lg.jp/JPN/apr/topics/biodiversity/070_model_pro/sub.html

地球温暖化と、わたしたちにできること
～ 小学校の英語授業「can」で考えてみよう ～

西田真衣子（姫路市立高岡小学校／兵庫教育大学大学院）

岩見理華 (兵庫教育大学)

地球温暖化と、わたしたちにできること
— 小学校の英語授業「can」で考えてみよう —

西田 真衣子 姫路市立高岡小学校/兵庫教育大学大学院、岩見 理華 兵庫教育大学

目的

【ESDの視点】地球温暖化について調べることを通して、それが自分たちの生活ともつながっている地球的課題であることに気付かせるとともに、持続可能な社会の実現に向けて自分にできることを考える。

【GLILの視点】GLIL(内容言語統合型学習:教科内容と言語学習を統合する学習法)の考え方を取り入れ、教科書題材である地球温暖化の導入や発表の一部を英語で扱う。英語の内容を捉え意味づけるための道具として用いる学びを通して、語彙の定着と英語学習への意欲の向上を図る。

方法

姫路市内公立小学校5年生80名を対象に、外国語科の全5時間で以下の学習及び調査を行った。ルーブリック(右欄)を活用して学習の流れを把握し、①英語でのやり取り、②音読、③語彙、④姫路市で起きている地球温暖化についての発表に対して、あめてを設定し、単元後に自己評価を行えるようにした。また、単元前後に「地球温暖化についての考え(ESD)」「見方・考え方(理科的・探究的)」「人との関わり・表現(ESD・探究)」「英語について(GLIL)」に関するアンケート調査を実施し、児童の意識の変容を把握した。

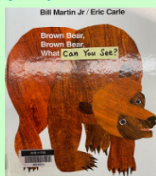
英語の語彙定着

英語に対する 学習意欲向上

地球温暖化に 対する関心

目標文法項目である
助動詞 can を用いた
絵本の読み聞かせ

「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」を「What Can You See?」に読み替えて読み聞かせ。



グループ毎に
教科書を
音読発表

「Yes, you can.」(*Here We Go!* 5 pp.102-103.光村図書)を英語で役割読みして発表。その後は、感想タイム。



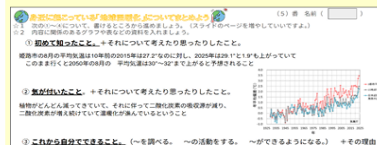
地球温暖化をテーマにしたCLIL授業

内容理解と自分にできることの発表を英語で行い、真正性のある学習に



地元姫路市への地球温暖化 の影響を調べ学習

インターネット、家の人や先生
へのインタビュー、本で調査。

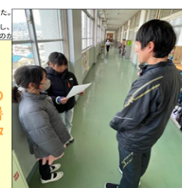


★ I can save electricity and water.

④ 困ったこと。 (～が難しかった。～が分からなかった。いろいろな情報があつてまとめたりするのが難しかった。ど、たくさんサイトを見たらどっちのほうか正しいのか)



第3時の授業後すぐに、担任の先生に、子どもの頃に比べて姫路市でも暑くなっているかをインタビューする子ども達。



成果

○英語の語彙の定着や英語学習への興味の高まりが見られ、英語を内容を理解し意味づけるための道具として用いる学びを展開することができた。

○児童は地球温暖化の原因や現状を知り、それが自分たちの生活とも関わる身近な問題であると捉えることができた。

○「電気をこまめに消す」「水を出しっぱなしにしない」「物を最後まで大切に使う」「植物を育てる」「エコバッグを使う」など、自分たちにできる行動を具体的に考えることができた。

今後の展望

○長期的な視点から、児童における英語語彙の定着、英語学習への興味、地球温暖化への関心の変化を継続的に明らかにしていく。

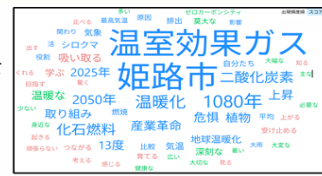
○教科横断的な学びを取り入れながら、英語を内容理解の道具として活用する真正性のある多様な授業実践の構築を目指す。

参考文献

笹島茂他編著(2019)「学びをつなぐ小学校外国語教育のCLIL実践」三修社

柏木賀津子他著(2020)「小・中学校で取り組むはじめてのCLIL授業づくり」大修館書店

金森強(2024)「CLILで習得する小学校英語指導の基礎」ミネルヴァ書房 環境省HP <https://www.env.go.jp/> (2026年3月11日最終閲覧)



「初めて知ったこと」のテキストマイニング



「自分にできること」のテキストマイニング

1. はじめに

近年、小学校外国語教育においては、単なる英語表現の習得だけでなく、実社会や地球的課題と結び付いた「真正性のある学び」の構築が求められている。また、ESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の視点から、児童が自分自身の生活と地球規模の課題とのつながりを認識し、主体的に行動を考える学習の重要性も高まっている。そこで本実践では、地球温暖化を題材として、ESD 及び CLIL (Content and Language Integrated Learning : 内容言語統合型学習) の視点を取り入れた外国語科の授業実践を行った。CLIL の考え方を取り入れることで、英語を単なる学習対象ではなく、内容を理解し意味づけるための道具として用いる学びを目指した。

2. 実践の概要

本実践では、以下の二つの視点から授業を構成した。第一に、ESD の視点である。地球温暖化について調べることを通して、それが自分たちの生活ともつながる地球的課題であることに気付かせるとともに、持続可能な社会の実現に向けて「自分にできること」を考えることを目的とした。第二に、CLIL の視点である。教科書題材である地球温暖化の導入や発表の一部を英語で扱い、英語を内容理解や表現のための道具として用いることで、語彙の定着及び英語学習への意欲の向上を図ることを目的とした。

3. 実践の概要

姫路市内公立小学校 5 年生 80 名を対象に、外国語科の全 5 時間で実践を行った。授業では、まずルーブリックを活用し、児童が学習の流れや評価の観点を把握できるようにした。具体的には、①英語でのやり取り、②音読、③語彙、④姫路市で起きている地球温暖化についての発表、の四つの観点について、めあてを設定し、単元後には自己評価を行わせた。活動としては、助動詞 can を用いた絵本の読み聞かせや教科書の役割読みを行った。「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」を「What Can You See?」に読み替えて活用したほか、教科書 “Yes,

you can.” (『Here We Go! 5』(光村図書, 2024)) を用いて音読発表を行った。さらに、地球温暖化をテーマにした CLIL 型授業を実施した。児童は、インターネットや書籍による調査に加え、家の人や教師へのインタビューも行い、「姫路市でも暑くなっているのか」「自分たちにできることは何か」といった問いについて考えた。その際、「I can ～.」「We can ～.」などの表現を用いながら、自分たちの考えを英語でも表現させた。また、単元前後には、「地球温暖化についての考え」「見方・考え方」「人との関わり・表現」「英語について」に関するアンケート調査を実施し、児童の意識の変容を把握した。

4. 成果と課題

本実践を通して、英語の語彙の定着や英語学習への興味の高まりが見られ、英語を内容理解や意味づけのための道具として用いる学びを展開することができた。

また、児童は地球温暖化の原因や現状を知り、それが自分たちの生活とも関わる身近な問題であると捉えることができた。その結果、「電気をこまめに消す」「水を出しっぱなしにしない」「エコバッグを使う」など、自分たちにできる具体的な行動を考える姿が見られた。

一方で、本実践は短期間の実践であったため、英語語彙の定着や英語学習への意欲、地球温暖化への関心が長期的にどのように変容していくのかについては継続的な検証が必要である。また、今後は教科横断的な学びをさらに取り入れながら、英語を内容理解の道具として活用する多様な授業実践を構築していく必要がある。

参考・引用文献

- 柏木賀津子他：『小・中学校で取り組むはじめての CLIL 授業づくり』, 大修館書店, 2020 年。
金森強：『CLIL で習得する小学校英語指導の基礎』, ミネルヴァ書房, 2024 年
環境省 HP : <https://www.env.go.jp/> (2026 年 3 月 11 日最終閲覧)
笹島茂他：『学びをつなぐ小学校外国語教育の CLIL 実践』, 三修社, 2019 年。
光村図書：『Here We Go! 5』, 2024 年

NPO 法人岡山 NPO センターの ESD・SDGs に関わる取組とその成果

野崎 晴貴（特定非営利活動法人岡山 NPO センター）

NPO法人岡山NPOセンターのESD・SDGsに関わる取組とその成果



第8回ESD実践研究集会 2026.03.20
(2025年度国内RCE実務者・ユース会議) 代表理事 高平 亮
主任アドバイザー 野崎 晴貴



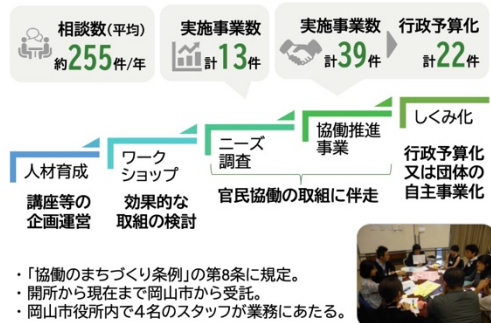
岡山NPOセンターとは

岡山に根差した「民」の立場の支援組織で、NPOなどの多様な主体と共に、地域課題の解決と価値創造を目的とした「一歩先の取組」と仕組みづくりを行っています。NPOの設立・運営支援、地域連携や市民参画の促進、災害支援、ESDやSDGsの普及啓発、気候変動対策など、幅広い事業を展開しています。

- 1998.12 前身体「岡山NPOサポートネットワーク」の設立。
- 2002.1 「NPO法人岡山NPOセンター」として事業開始。
- 2014.6 現在の「岡山市ESD・市民協働推進センター」開所。
- 2015～ 「ESD学生インターンシップ」事業を受託し企画運営。
- 2018.12 「SDGsネットワークおかやま」を設立。事務局を担う。

▶ ESD・市民協働推進センター

多様な主体をつなぎ協働を推進するコーディネート機関



▶ ESD学生インターンシップ

地域課題を学び、体験し、自分事にするインターンシップ



▶ SDGsネットワークおかやま

民間有志の呼びかけで立ち上がった岡山のネットワーク



▶ その他

子ども、災害支援、気候変動対策などテーマ型の取組も



令和 6 年度能登半島地震：住民主体の復興まちづくり支援

野崎隆一（特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所）

北村胡桃（特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所）

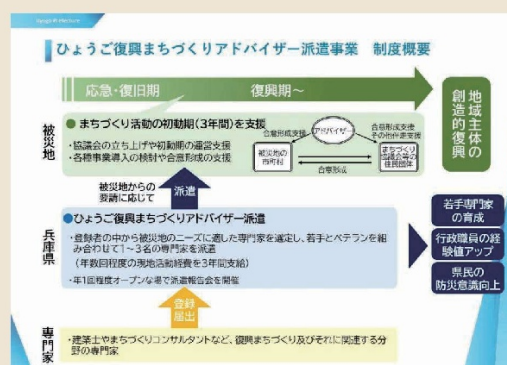
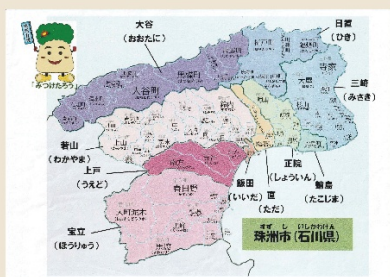
- 令和 6 年能登半島地震 - 住民主体の復興まちづくり支援

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所

神戸まちづくり研究所は、阪神・淡路大震災の復興過程で出会ったまちづくりの専門家やボランティアのリーダーが自発的に集い結成した「神戸復興塾」から、1999 年に生まれた NPO です。東日本大震災や熊本地震などで住民主体の復興まちづくりの支援に取り組んできました。令和 6 年 1 月に起きた能登半島地震でも、珠洲市を中心にこれまでのノウハウを生かして活動しています。

珠洲市 まちづくり協議会の立ち上げ支援 ～兵庫県「ひょうご復興まちづくりアドバイザー派遣制度」～

カウンターパート方式で珠洲市の支援を担当している兵庫県と、神戸まちづくり研究所が協議を重ね、兵庫県の専門家（建築士・コンサルタント等）を能登へ派遣する「ひょうご復興まちづくりアドバイザー制度」が令和 6 年 10 月より始動しました。兵庫県の経験を能登に伝える目的に加えて、兵庫県のまちづくりの専門家の育成の目的もあります。月 1 回程度訪問し、アドバイザーとしてまちづくり協議会の立ち上げや運営のサポートを行っています。令和 8 年 3 月現在、正院、鮎島、飯田の 3 地区のまちづくり協議会の立ち上げに関わりました。



輪島市町野町金蔵地区 集落の復興まちづくり支援

～認定 NPO 法人難民を助ける会 AAR Japan との連携～

【金蔵地区概要】能登半島北部・輪島市の北端に位置する、人口 160 人程の集落。3 つの山に囲まれた小さな盆地に位置。金蔵の集落からは四方に向かう道があり、古くからこの地域の中心集落だった。室町期に全村焼き討ちを受けた後、集落を再興するために外部からお寺を呼び込んだ。金蔵の集落の人口が少なくても各檀家が金蔵の集落に集まるため、その交流人口を利用して集落を維持し地域の中心集落となるまで再興された。現在の金蔵五ヶ寺には 600 もの檀家がいる。

【活動内容】金蔵を現地で支援している AARJapan からの要請を受け、住民同士の話し合いの場に参加を始めた。住民の復興への想いを聞き取り、集落としてどのように新たな地域づくりを進めていくのか、一緒に考えています。金蔵地区を離れ仮設住宅で暮らす方にも同様の場を設け、金蔵への想いを言葉にいただきました。今後も伴走していきます。



「教えることで学ぶ」小学生 STEAM 教室 — 小学生支援活動にみる ESD 実践の広がり —

橋本 瑞穂（広島県立庄原格致高等学校）

「教えることで学ぶ」小学生STEAM教室 —小学生支援活動にみるESD実践のひろがり— 広島県立庄原格致高等学校

【小学生STEAM教室発足の背景】
本校の医療・教職コースでは、医療職・教育職を目指す生徒の育成を行っている。しかし、実際の教育現場で学ぶ機会には限りがある。そこで、探究活動の一環として小学生STEAM教室を立ち上げた。

- ✓ 医療・教職コースの実践的な学びの機会を創出
- ✓ 児童生徒を対象にした実習の機会を創出
- ✓ 地域貢献の一環として教育分野から切り込む

【目的】
「医療・教職コースを有する高校として、人をサポートする仕事に就こうとする生徒に実践的な学びの機会を提供するため」

- ✓ 医療・教職コース生徒の実践的学び
- ✓ 地域貢献型STEAM教育の実践
- ✓ 小学生の理数体験機会の充実
- ✓ 科学・ものづくりへの興味喚起

- 【方法】
- ✓ 実施期間：2022年度～継続実施（4年目）
 - ✓ 実施回数：年間約20回（計81回）
 - ✓ 延べ参加者数：約1000名
 - ✓ 対象：未就学児～小学6年生

【内容】
理科実験、算数教室、華道・茶道教室、プログラミング、防災教育、司書体験、探究型ワークショップ等

- 【高校生の関わり】
- ✓ テーマ設定・教材開発
 - ✓ 活動設計（PBL型学習構成）
 - ✓ 当日の運営
 - ✓ 振り返り

- 【成果・効果】
- 小学生への効果（アンケート結果）
 - ・ 防災ゲームを通して、楽しみながら防災について学ぶことができた
 - ・ 家庭では教えないテーマを体験的に学べる貴重な機会となった
 - ・ 活動後、家庭でも内容について話題にするなど学びの広がりが見られた
 - ・ 小規模校では得難い、他校児童や高校生との交流機会となった
 - ・ クッキング教室を通して科学的原理（メレンゲの仕組み等）への関心が高まった

- 高校生への効果
 - ・ 主体性・協働性・課題解決能力が向上
 - ・ 人前で説明する力が向上
 - ・ 進路意識の明確化
- 振り返りには、
「伝える難しさを通して理解が深まった」「社会とつながる学びを実感した」といった記述が見られた。

【総括】
本実践は、高校生を担い手とするSTEAM教育の可能性を検証したものである。
その結果、異年齢協働による学習は、参加児童および高校生双方の主体性・自己効力感を高める効果を持つことが示唆された。

- 【今後の課題】
- ✓ 指導内容の質の保証
 - ✓ 高校生に対する体系的研修プログラムの構築
 - ✓ 運営体制の安定化（人的・時間的資源の確保）
 - ✓ 学校教育課程との接続の具体化（探究との連携）



@OFFICIAL_SHOBARA_KAKUCHI



@SHOBARA_KAKUCHI_HIGHSCHOOL

小学生STEAM教室と庄原格致高等学校のInstagramです。フォローしてください。

RCE 岡山 20 年のあゆみ

蛭田 由枝・川上 莉佳・檜原 申士

(RCE 岡山 (岡山 ESD 推進協議会) /岡山市役所 SDGs・ESD 推進課)

岡山 ESD 推進協議会

Okayama ESD Promotion Commission

RCE Okayama

ESD (持続可能な開発のための教育) とは
ESDとは、Education for Sustainable Developmentの略で、持続可能な社会を実現するために新たな価値観や行動の変容をもたらす、持続可能な社会づくりの担い手を育成する組織です。

岡山 ESD 推進協議会とは
岡山 ESD 推進協議会は、持続可能な地域づくりに取り組み市民団体や教育機関、企業、行政などで構成される組織です。
多様なステークホルダーをネットワークで結び、岡山地域の特性に応じたESDを効果的に推進することで、SDGsの達成に貢献します。

岡山 ESD プロジェクト 8つの重点取組
持続可能な社会の実現に向けて、共に学び、考え、行動する人が集う岡山地域を目指します。

- 持続可能な地域づくりの推進
- SDGs達成に向けた実践
- ユース・人材育成
- 地域コミュニティ・公民館・学校でのESD推進
- 優良事例の顕彰
- ESD活動の拡大
- 企業・経済団体の取組促進
- 海外国内との連携

取組事例

- ESD岡山アワード
- おかやまESDフォーラム
- ESDカフェ×SDGs
- ユースの集い
- ユネスコスクール高校ネットワーク支援
- 活動支援助成金
- ESDコーディネーター研修

05 20年のあゆみ

岡山 ESD 推進協議会の20年間のトピックス

2005 2014	2005…岡山 ESD 推進協議(RCE岡山)設立
2005	2005…世界初のRCEに認定 民間大学よりRCE (Regional Centre of Expertise on ESD / ESD を推進するための地域拠点) に「日本で最初のRCE」1つとして認定される
2014	2014…ESDに関するユネスコ世界会議 岡山/名古屋 「ESDに関するユネスコ世界会議」の開催会議 (ESD 推進のための公民館・CLC 国際会議、第1回グローバル RCE 会議、ユネスコスクール世界大会、ユネスコ ESD コース・コンファレンス、教育教育に関する国際会議)を岡山市で開催
2015 2019	2015…ユネスコ学習都市グローバル・ネットワーク加盟 岡山市が「ユネスコ学習都市」に登録される
2015 2019	ユネスコ/日本ESD賞受賞 「岡山 ESD プロジェクト」が「ユネスコ/日本 ESD 賞」を受賞
2017	2017…ユネスコ学習都市賞受賞
2018	2018…SDGs未来都市 内閣府から SDGs 未来都市に選定される
2025	2025…第14回グローバルRCE会議岡山開催

岡山 ESD 推進協議会 岡山市

36

岡山 ESD 推進協議会(RCE岡山) 令和7年度の活動紹介

第14回グローバルRCE会議

世界初のRCE関係者が集まり、これまでのESD活動の成果や今後の方向性について協議する会議を岡山市で開催しました。

■日程 2025年10月21日～23日 ■会場 岡山コンベンションセンター

■参加者 147名(31ヶ国) ※オンラインも含めると266人(47ヶ国)

■成果 「岡山宣言2025」の採択

■主催 国連大学サステナビリティ高等研究所・岡山市・RCE岡山(岡山ESD推進協議会)

岡山 ESD 推進協議会 20周年記念誌

岡山 ESD 推進協議会は2005年の設立から今年で20年を迎えます。20年の節目を記念して、これまでの歩みをまとめた記念誌を作成しました。

この記念誌では、当協議会のこれまでの歴史や活動、関わってくださった皆様の声を収録するとともに、次世代へつなぐ想いを込めています。

20周年記念誌



岡山 ESD 推進協議会は2005年の設立から今年で20年を迎えます。20年の節目を記念して、これまでの歩みをまとめた記念誌を作成しました。

この記念誌では、当協議会のこれまでの歴史や活動、関わってくださった皆様の声を収録するとともに、次世代へつなぐ想いを込めています。



岡山 ESD 推進協議会(RCE岡山) 令和7年度の活動紹介

活動支援助成制度

活動団体	ユース
岡山 ESD プロジェクト参加団体が実施するESDの活動に対して助成します。	岡山 ESD プロジェクト参加団体のユース(18～35歳)を対象にESD×SDGsに関する国内外の先進事例調査や研修に参加する活動に対して助成します。
▶助成金額:最大15万円(交付回数によって上限を設定)	▶助成金額:国内10万円、海外20万円
▶助成件数:39団体	▶助成件数:4件

ESDカフェ×SDGs

テーマに沿ったゲストスピーカーを迎え、自分の想いや疑問をもとに参加者と対話しながら理解を深めるイベント。

▶6/27(金) テーマ:公民館で活躍するユース
▶8/19(火) テーマ:平和
▶12/10(木) テーマ:子どもの権利
▶3/17(火) テーマ:岡山ESDの20年

ESD岡山アワード

国内外のESDの優良事例を顕彰し、世界のESDの推進に貢献するとともに、世界における岡山のプレゼンスを高めることを目的に実施しています。

▶応募件数:346件(81ヶ国)
▶賞金:各40万円(3,000ドル)
▶受賞件数:2件以内

ESD学生インターンシップ事業

大学生を対象に社会課題の解決に取り組む団体(NPO、公民館、社会福祉施設など)の業務体験機会を提供し、持続可能な地域づくりに参加する人材を育成します。

▶参加者:13名
▶受入団体:8団体

SDGs守ろう!海・川プロジェクト

美しい瀬内川を次世代に残すため、海や川のごみの削減を目指して清掃活動やフォーラムなどを通じて市民の意識の醸成をはかります。

▶「守ろう!海・川」川柳募集(応募数:236件)
▶SDGs海川フォーラム2026(2月7日開催)

チ。一地表面の変化から地震の発生源を探せー

中野 智都・深尾帆花（兵庫県立伊丹高校 2 年）



チ。～地表面の変化から地震の発生源を探せ～ 兵庫県立伊丹高等学校 2 年 中野智都・深尾帆花

1 はじめに

活断層データベース(産総研)によると、私たちが住んでいる伊丹市には東北東から西南西方向に延びる伊丹断層(図 1)がある。身近なところに大きな断層があることを知り、その断層によって地表面にどのような影響が出ているのかについて調査した。

2 横ずれ断層のモデル実験

地下の横ずれ断層の活動により、地表面がどのように変形するかについて、乾燥した砂を用いたモデル実験を行った。

●実験の準備物

- ①断層モデル実験装置、地層モデル作成材(図 2)
- ②粒子の大きさが違う 2 種類の砂
- ③炭酸カルシウム(表面の亀裂をはっきり見せるため)
- ④ふるい、定規(スケール)

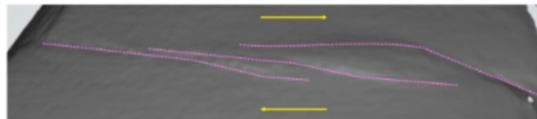
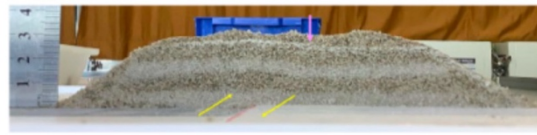
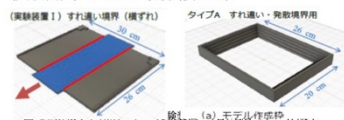
●実験方法

- ①砂で地層モデルを作る
- ②モデルに炭酸カルシウムを上にもふりかける
- ③定規を横に置き、プレートを 0.5cm ずつずらす

●実験結果

- ①杉型雁行の亀裂が地層モデル表面に確認できた(図 3)
- ②亀裂周辺に盛り上がった場所と沈降した場所が確認できた(図 4-5)

(実験装置) すれ違い境界(横ずれ)



3 伊丹断層周辺のフィールドワーク

伊丹断層付近を通る図 6 に示したルート A-D に沿って、レーザー距離計を使って地面の起伏を約 20m 間隔で詳細に測定した(精度は数 cm)。

調査結果(図 7) 北側から南側に向かって徐々に土地が下がっているが、4 ルートに分けて計測したところ、断層があると思われる箇所で傾斜が急激に大きくなっていることがわかった。これは、断層の活動によってモデル実験と同じ雁行配列の亀裂が生れたためだと考えられる。



4 考察と結論・今後の展望

モデル実験とフィールドワークの結果を照らし合わせると、右横ずれ断層の再現モデルの亀裂にあたる部分に、地表の急傾斜が確認できた。結論として、断層の活動による地表面の変化はコンクリートで舗装された状態でも確認できるということがわかり、逆に土地の不自然な隆起、沈降から、地下の活断層の存在を明らかにできる可能性もある。現時点では、伊丹断層の東側の延長線にある高槻一有馬構造線が、伊丹断層と地深部で 1 つの主断層によって繋がっている可能性があると考察しており、今後より広範囲かつ詳細な地形調査をしていきたいと考えている

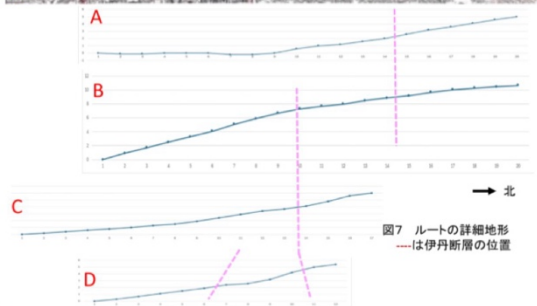


図 7 ルートの詳細地形
---は伊丹断層の位置

5 参考文献

「伊丹市 白地図」、地理院地図、活断層データベース(産総研)
岩本正人・竹村勝夫:プレート境界付近の地殻変動を再現するアナログモデル実験の開発と高等学校における実践 地学教育 78 巻 3 号、39-51、2025
アニメ「チ。一地球の運動について」

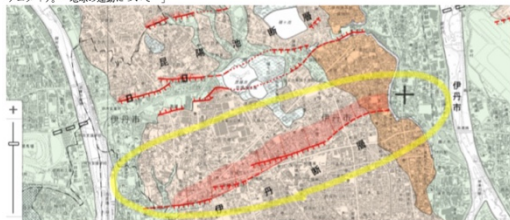


図 1 伊丹断層周辺地図(地理院地図に加工)
図 3 横ずれ断層のモデル実験 ①は 0.5 cm、②は 1.0 cm、③は 1.5 cm プレートを動かした状態
図 4 実験結果 ③の状態のモデルを水で固めた切断面 → は表面に現れた亀裂の位置

流域圏（water-region）における SDGs 推進情報の可視化

古澤 礼太（RCE 中部／中部大学）・安部 大樹（同）・中島 稜太（中部 ESD 拠点）



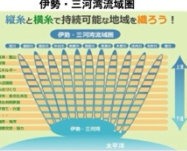
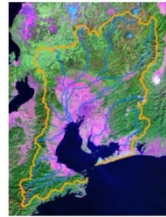
中部ESD拠点（RCE中部）の流域圏ESDに関する取組

～流域圏SDGs評価モデルの構築に関する研究を中心に～

発表者：古澤礼太（中部大学）、安部大樹（三重大学）、中島稜太（中部サステナ政策塾）

発表の概要

中部ESD拠点（RCE中部）は、2007年の発足当初より、流域圏を単位とする持続可能な社会づくりのための教育（ESD）を推進している。2022年度より、大阪・関西万博に向けて「いのちをつなぐ水と流域・地球市民フォーラム」を4年間にわたり開催（共催）するとともに、中部ESD拠点研究部門のメンバーを中心に、SDGsの達成に資する地理情報（GIS）を用いた評価モデルの検討を進めてきた。本発表では、「水と流域フォーラム」と連関させた流域圏のサステナビリティに関する可視化と課題解決および地域資源の発掘・再評価の手法開発に関する取組を紹介する。



※本発表は、中部大学「問題解決を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究拠点」2025年度共同研究「流域圏SDGs評価モデルの構築に関する研究—持続可能な流域圏のデザインに向けた指標活用と検証—」の成果報告を中心とする

結果

流域圏単位で持続可能な社会の構築をめざす「水と流域・地球市民フォーラム」と連携し、大阪・関西万博で発表された流域圏文明（water-region civilization）構築にむけた提言文（図1）の課題分類に対応する各種地理情報を収集し、デジタルアースへのインプットを行った。本プロジェクトで収集した、伊勢・三河湾流域圏、大阪湾流域圏、東京湾流域圏の日本三大都市を含む3流域圏の情報は、ウェブサイト上に公開し、今後5年間、3地域で推進する流域圏活動における活用方法を検討するため、NPO等のステークホルダーとのワークショップを開催し、具体的な活用方法を明らかにした。



大阪・関西万博で発表した提言文概要

伊勢・三河湾流域圏内の防災情報

これまでの研究について

- 伊勢・三河湾流域圏のSDGs評価を地図に表示
- 評価からデザインへ
- ・流域圏を単位としたSDGs評価モデルの構築
- ・地理情報とローカルSDGs指標の統合
- ・活動の可視化と共有を通じた接続
- ・持続可能な流域圏デザインの検討

3テーマと9課題のローカル指標と行動指標

テーマ	地域課題	SDGs	ローカル指標	ローカル行動指標（団体）
いのちをつなぐ	流域圏内の土地利用・移住・交流	SDG11.9,10.13,15	上流・下流交流回数/移住・交流プログラム実施自治体数/交流拠点数	上流・下流交流イベント回数/他地域団体との共同活動数/移住・関係人口をテーマにした取組有無
	循環経済（地産地消）	SDG2.8,12.13,17	地元産品を使った活動回数/地域事業者との連携有無/グリーン購入の実践有無	地元産品を使った活動回数/地域事業者との連携有無/グリーン購入の実践有無
	一次産業の伝統継承とイノベーション	SDG2.8,12.15	有機農業取組団体数/一次産業関連活動数	有機農業取組団体数/一次産業関連活動数
いのちを救う	災害対応	SDG11.13.9	防災活動回数/防災訓練実施回数	防災学習・訓練実施回数/危機意識調査の実施有無/防災で他団体連携有無
	生物多様性保全・気候変動対応	SDG13.14,15	自然度の高い区域面積割合/保全活動回数/保全対象（森・川・海）の数	自然観察・保全活動回数/生物多様性学習の実施回数/保全対象（森・川・海）の数
	公衆衛生	SDG3.6,10	下水処理普及率/医療アクセス拠点数	水・衛生・健康をテーマにした活動回数/医療・福祉分野との連携有無/脆弱性対象取組有無
いのちをかづける	持続可能な発展教育（ESD）	SDG4.12,13.17	ユネスコスクール数/ESD拠点数	ESD学習・WS実施回数/学校・大学連携有無/SDGs教材・発信有無
	流域文化の伝承継承とイノベーション	SDG11.15.4	文化資源活用事例数/祭り連携活動数	祭り・文化活動回数/自然と結びつけた文化活動有無/地域外文化交流有無
	多様な主体のパートナーシップ	SDG17.11.6	参加団体数/連携プロジェクト数	連携した団体数/分野横断型連携有無/流域内外連携回数

地理情報を使った3テーマ9の課題の可視化例



地図での客観的な情報+理解できる表現

市民に理解しやすい「デフォルメ」の重要性
ex.ハザードマップでは被害想定地域を把握できる
But水の動きや歴史的経緯は読み取りにくい
⇒cf.江戸期水害絵図は被害を直感的に描写！

研究成果

- ①流域圏（water-region）を単位とするSDGs評価モデルの構築と概念整理
- ②ローカル指標とローカル行動指標による「評価×地域活動」をつなぐ枠組みの提示
- ③地理情報・フィールドワーク・物語的表現を統合した参加型・可視化手法の研究展開

今後の展開

- ・他流域圏への応用展開—大阪湾流域圏、東京湾流域圏
- ・市民・行政・研究者による共有と協働
- ・フォーラムの継続と連携による流域圏を基盤としたSDGs実践の深化

ヘチマの栽培活動からひろく ESD — 子どもたちの気候変動への一歩 —

松野亜希（兵庫教育大学大学院）

岩見理華（兵庫教育大学）

ヘチマの栽培活動からひろくESD —子どもたちの気候変動への一歩— 松野 亜希 兵庫教育大学大学院、岩見 理華 兵庫教育大学

目的

兵庫県の公立小学校4年生46名を対象に、ヘチマを活用したグリーンカーテンづくりの環境学習を実践し、児童の地球温暖化・気候変動に対する認識と行動意図の変容を明らかにする。

方法

実践の効果を検討するため、児童の認知（理解）・情意（気持ち）・行動の三側面（ESDの三要素）に着目し、・質問紙調査（5件法・8項目）・自由記述・観察記録を収集し分析した。46名のうち、転校生、欠席者を除く43名を分析対象とした。

実施スケジュール

時期	学習内容
4月	単元「あたたかなる」と
5月	③ヘチマの種と観察・種まき ← 第一回観察記録
6月	グリーンカーテンについての学習
7月	単元「暑くなる」と ③ヘチマの葉・花・全体の様子 ← 第二回観察記録 ③グリーンカーテンの気温測定
9月	③全体と実の様子 ← 第三回観察記録
10月	単元「すずしくなる」と ③種取りとたわし作り
11月	③リーフレットづくりとまとめ
12月	③ふりかえり（最終アンケート実施）

①「栽培と観察」

- ・種まきと栽培計画
- ・草丈と気温の記録
- ・花や葉の観察



②「気温変化の体験」

- ・日向と日陰の気温測定
- ・体感と数値の比較
- ・グリーンカーテンの効果

測定日	天気	あり(℃)	なし(℃)	気温差(℃)
7月14日(月)	晴れ	33	32	-1
7月15日(火)	晴れ	34	33	-1
7月16日(水)	晴れ	35	34	-1
7月17日(木)	晴れ	36	35	-1
7月18日(金)	晴れ	34	34	0
7月22日(火)	晴れ	35	34	-1
7月23日(水)	晴れ	35	35	0

③「視野を広げる」

- ・絵本の読み聞かせ



地球の気候変動をテーマに、身近な生活と世界のつながりを考える絵本。
『たった2℃で』
キム・ファン文
ジョン・ジンギョン 絵
(童心社、2024年)

④「実の利用」

- ・収穫とたわし作り



⑤「まとめと広がり」

- ・種を届けるプロジェクト
- ヘチマのたわしと種をリーフレットとともにセットにし、家庭や地域の方々へ届

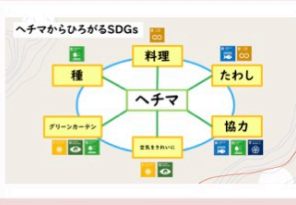


図 ヘチマから広がるSDGs とのつながり

【結果】

結果① 三側面別の量的傾向 (N=43)



- 三側面いずれも平均4.5以上
- 認知 (4.51) > 情意 (4.32) > 行動 (4.14)
- 現時的機運が反映される

結果② 行動側面にみられる個人差

- 行動側面（行動意図）で比較的大きなばらつき (SD: 0.93~0.99)
- 認知的側面（理解）は比較的小きなばらつき (SD: 0.57~0.65)
- 情意側面（価値意識・態度）は中程度のばらつき (SD: 0.63~0.84)
- 特に行動側面（行動意図）において個人差がみられる

結果③ 自由記述（「自分が気づいたこと・変わったこと」）にみられる変容

- 【認知的側面（理解）】
 - 「1週間ですごく暑かった」○「こんなにやわらかいとは思わなかった」
 - 「温度は変わらないと思っていた」
 - （季節の違いに気づく認識を含む）
- 【情意側面（感じ方）】
 - 「これくらいなにかえれるかな」○「暑くももつとこられる」
 - 「こんなにのびると思わなかった」（驚き・愛惜・気づき）
- 【行動的側面（意図）】
 - 「ももつとこでみんなを暑くする」○「これから暑くても大丈夫」
 - 「ヘチマを育てたい」（継続意図の表れ）

成果 ヘチマを題材とした学習を通して、認知・情意・行動の三側面における変容が確認された。

- ヘチマの育成を通して、地球温暖化や気候変動への理解が深まった。
- ヘチマの栽培やグリーンカーテンの体感的な活動を通して、気温と植物の働きに関係が気づいた。
- 収穫後の実を用いたたわし作りにおいて、資源の活用や循環について考えることができた。
- 理科の通常授業を活用した学びを通して、環境問題の取り組みにおける意識の変容が見られた。

ヘチマを題材とした体験的な学習は、環境問題を身近な問題として考えるきっかけとなった。

参考文献

- ・相場・松尾・枝原（2012）「ヘチマとツルレイシの新しい視点に よる教材化と実践」『理科教育研究』Vol.53 No.2. 201 -208.
- ・光村図書（2023）「特集 知ろう、地球の気候変動のこと」『道徳通信』no.6. p.1
- ・森戸・佐伯（2019）「ヘチマの栽培・観察が児童の意識に及ぼす影響—小学校第 4 学年「季節と生物」において—」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究 紀要』第47号. 169-179.
- ・文部科学省（2021）「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引」（令和 3年5月改訂版）

今後の課題

- グリーンカーテンの規模が小さく温度差が表れにくかったため、設置場所や規模を見直し、効果をより明確に検証できるようにする。
- 今年度は事前アンケートを実施できなかったため、次年度は事前・事後調査を行い、児童の意識や行動の変容についてより詳しく分析する。

身近な植物の栽培活動を通して、児童が気候変動や環境問題を自分の生活と結び付けて考える学びの可能性が示された。

1. 研究の背景と目的

現在、気候変動に対する子どもたちの危機意識は決して低くない。一方で、「自分に何ができるのかわからない」と感じている子どもも少なくなく、環境問題に対する認識は高まっているものの、具体的な行動へ結び付きにくいという課題が指摘されている(光村図書, 2023)。つまり、「知っている」と「行動する」ことの間には隔たりがあると考えられる。そのため、単なる知識理解にとどまらず、子ども自身の生活と環境問題とを結び付ける「自分ごと化」の学習が求められている。本研究では、ヘチマを活用したグリーンカーテン学習を通して見られる子どもたちの変容過程について、ESDにおける三側面モデルを用いて整理し、検討した。具体的には、①気候変動に対する認識(認知的側面)、②環境課題の自分ごと化(情意的側面)、③行動意図(行動的側面)の三側面に着目した。

2. 実践の概要

本実践は、兵庫県内の公立小学校第4学年2クラスを対象に、理科の授業内で実施した。全体で45分授業約20時間を用いた。学習は、ヘチマの栽培と観察、グリーンカーテンの温度比較、収穫後のたわし作り、振り返り活動へと展開した。単なる栽培活動ではなく、「観察→体感→活用→拡張」という循環構造を意識して学習を構成した点が特徴である。具体的には、草丈や葉・花の観察を継続的にを行い、気温との関係に目を向けさせた。また、グリーンカーテンの有無による温度測定を行い、数値と体感の双方から植物の働きについて考察した。さらに、収穫したヘチマを活用したたわし作りを通して、自然素材の循環的利用について考える学習を行った。加えて、絵本『たった2℃で...』の読み聞かせを取り入れることで、学校での体験と地球規模の気候変動問題とを関連付けることを試みた。最終的には、児童が作成したリーフレットとともに、ヘチマの種とたわしを家庭や地域へ届ける活動へと発展した。評価には、ESDの三側面に対応した5件法による質問紙調査、自由記述、観察記録を用いた。

3. 成果と課題

質問紙調査では、認知・情意・行動の三側面すべてにおいて高い傾向が見られた。特に認知的側面の値が高く、理解の深化から価値意識の形成、さらには行動意図へとつながる段階的な構造が示唆された。自由記述では、「環境をよくしたい」「未来につなげたい」「もっと育てたい」といった記述が見られ、気候変動を自分自身の生活と結び付けて考える様子が確認された。また、ヘチマを「育てる」だけでなく、「利用する」「広げる」という活動を取り入れたことで、資源循環や持続可能な生活への視点が育まれたと考えられる。一方で、行動的側面には個人差も見られた。特に行動意図の形成には、具体的な実践イメージをどれだけ持てるかが影響している可能性が示唆された。また、本研究では事前調査を実施していないため、厳密な事前事後比較による変容分析は行えていない。今後は、事前・事後調査の導入や自由記述の質的分析の精緻化を進めるとともに、学年間の接続を見通したカリキュラム化や地域との協働体制の構築へ発展させていく必要がある。

参考・引用文献

- 相場 博明, 松尾 薫, 柊原 礼士:「ヘチマとツルレイシの新しい視点による教材化と実践」,『理科教育学研究』, Vol.53, No.2, pp. 201-208, 2012 年
- キム・ファン(文), チョン・ジンギョン(絵):『たった2℃で…地球がもたらす環境災害』, 童心社, 2024 年
- 光村図書:「特集 知ろう、地球の気候変動のこと」,『道徳通信』, No.6, p.1, 2023 年
- 森戸幹, 佐伯英人:「ヘチマの栽培・観察が児童の意識に及ぼす影響—小学校第4学年「季節と生物」において—」,『山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要』第47号, pp. 169-179. 2019 年
- 文部科学省:『ESD(持続可能な開発のための教育)推進の手引』(令和3年5月改訂版), 2021 年

未来志向を育む ～ 児童期からの ESD 実践とその可能性～

前田渚（北九州市立大学地域創生学群眞鍋ゼミ）

三坂綾美（北九州市立大学地域創生学群眞鍋ゼミ）

／北九州市立大学 地域創生学群 眞鍋ゼミ／

未来志向を育む ～ 児童期からのESD実践とその可能性～

眞鍋ゼミとは？

教育を取り巻く課題やサステナビリティについて考え、実践的に学んでいるゼミです。活動は3グループに分かれています。高校グループでは探究学習やキャリア教育を軸にした授業づくり、小中グループでは子どもたちが将来に関心や希望を持てるよう体験的な学びを行っています。SDGs推進グループでは、学生や企業に向けてSDGsの重要性を発信しています。ゼミでは一人ひとりの関心を大切に、自ら問いを立て、仲間と対話しながら考え行動することを重視しています。試行錯誤を通して主体的に学び、教育的視野を広げることを目指しています。

チーム写真



背景

持続可能な社会の実現に向けてESDの重要性が高まっています。しかし、その実践は高校生や大学生を対象とするものが多く、価値観の土台が育つ初等段階での取り組みは十分とは言えません。そこで小中グループは、子どもたちが早い段階から他者や社会とのつながりを感じ、持続可能性を「考え方」として身につけることを目指しました。総合の時間において、文化や考え方の違いを面白いと受け止める態度や、「好き」を通して世界とつながる視点、未来を前向きに描く姿勢を育む授業を構想し、今年度より小学校で授業計画・実践を行うこととしました。

活動の写真



活動内容

小中グループは今年度、小倉中央小学校において小学4年生、6年生に対し授業計画、実践を行いました。6年生では未来構想を軸としたキャリア学習を行い、人間が働く意義や100年後の未来を考える活動を展開しました。4年生には全4回構成で異文化理解の授業を実施し、第1回では、「世界とは何か」を問い、自分の「好き」から世界とのつながりを考える導入を行いました。第2回では、各国の文化や食・遊びなどをテーマにグループごとの探究活動を行い、グループの中で仮説を立てたうえで調べる活動を行いました。最終回では2クラス合同の交流会を実施し、紙芝居・人形劇など多様な発表方法の中から児童自身が形式を選択したうえで完成させた作品をもとに互いの学びを共有しました。



方法・工夫

授業設計には、今年度9月に行った研修合宿での学びを反映させました。松下村塾でのフィールドワークを通じ、吉田松陰が志を育てる教育を重視していた点に着目し、知識をただ教えるのではなく、子どもが主体的に問いを立て未来を構想する構成を意識し、4年生の調べ学習の際には、あえてインターネットを用いず、書籍や資料を活用する方法にこだわりました。情報を自ら探す過程そのものを学びと捉えた点が特徴です。また、生徒が主体的に考え調べることができるよう、探究グループは最初の授業を踏まえた上で世界の何について調べたいか生徒の意思を尊重したグループを構成することを意識しました。

成果

異文化理解のための授業を行った4年生からは「生まれた国は違っても好きな食べ物が一緒で嬉しかった」「本の索引を初めて使った」といった感想が挙がり、異文化を前向きに受け止める姿勢や主体的な情報探索への関心が見られました。また、様々な発表形式を用意したことは表現の多様性や協働の意識向上につながったと考えます。6年生においては、未来を肯定的に描く姿勢が育まれ、自分と社会との関係を主体的に考える契機となったと考えます。



課題と今後の展望

今年度始動した本実践は現時点では単発的な取り組みにとどまっており、持続可能性の視点が継続的な思考様式としての程度根付いたかは検証が必要です。今後は北九州市内の学校との連携を深め、継続的な実践へと発展させていきたいと考えています。また、ゼミ全体としては授業企画・運営に主体的に取り組むことができた一方、眞鍋ゼミとしての専門性を十分に打ち出せることができていないという課題がみえてきました。今後は、特定分野に特化した授業づくりを目指し、論文や先行実践から学んだ知見を根拠に活かしながら、授業の質と教育的価値の向上を図っていきたくと考えます。

団体情報

眞鍋ゼミの活動は、
Instagram等で発信中！

↓ぜひチェックを👉↓

SDGs推進班Instagram↓



個眞鍋ゼミ公式Instagram



1. 眞鍋ゼミとは

教育とサステナビリティをテーマに、探究学習・体験活動・SDGs 発信の3グループで実践的に学ぶゼミである。一人ひとりが問いを立て、対話と試行錯誤を通して主体的に学び、教育的視野を広げることを目指している。

2. 具体的な取り組み

(1) 背景

ESD は重要性が高まる一方、高校生や大学生向けの実践が多く、価値観の基盤が育つ初等段階での取り組みは十分ではない。そこで小中グループは、子どもたちが他者や社会とのつながりを感じ、持続可能性を考え方として身につけられるよう、小学校での総合の授業を構想し実践することとした。

(2) 活動内容

今年度は小倉中央小学校で4年生と6年生を対象に授業を実践した。6年生では未来構想を軸に働く意義や100年後の社会を考えるキャリア学習を行った。4年生では全4回の異文化理解の授業を行い、世界とのつながりを考える導入、各国文化の探究、最後は紙芝居や人形劇などで発表しクラス内で学びを共有した。

(3) 方法・工夫

授業設計には研修合宿での学びを反映し、松下村塾でのフィールドワークから吉田松陰の志を育てる教育に着目した。知識を教えるだけでなく、子どもが主体的に問いを立て未来を考える構成とし、4年生の調べ学習ではインターネットを使わず書籍や資料を用いて情報を探す過程を重視した。また、生徒が主体的に考え調べることができるよう、探究グループは世界の何について調べたいか生徒の意思を尊重したグループを構成することを意識した。(写真1)

(4) 成果

4年生の異文化理解の授業では、異文化を前向きに捉える姿勢や主体的に情報を探す関心が見られ、発表形式の選択は表現の多様性や協働意識の向上につながった(写真2)。6年生では未来を肯定的に描き、自分と社会の関係を主体的に考える姿勢が育まれた。

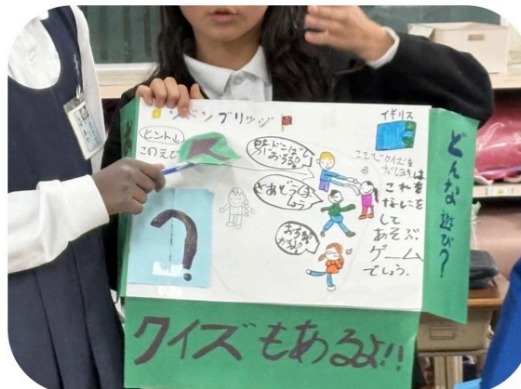
(5) 課題と今後の展望

本実践は今年度始動したが、現時点では単発的な取り組みにとどまっており、持続可能性の視点がどの程度定着したかは今後の検証が必要である。今後は北九州市内の学校と連携し継続的な実践へ発展させる。また、授業を企画運営する学生は、試行錯誤してより良い授業を展開する努力をしている反面、専門性を十分に取入れた活動ができていない状況である。今後は研究知見を基に特定分野に特化した授業づくりを目指す。

写真1：授業風景



写真2：小学4年生の発表様子



不登校生に効く体験活動 “潮風のいざない”

(血流の改善による心身の再生・廃船ヨットの修復再生活動他)

クラーク記念国際高等学校 三苫利光



1. 心と身体が甦るヨット修復活動

自己否定につながる課題の多い学校教育の現状の中で、不登校生徒に注目し、その心と身体が甦る教育プログラムを提案する。

不登校経験者の自己肯定感を向上させ、自尊感情を育てるために、廃船ヨットを丁寧に修復することで、わずか2時間の行程でも目に見える作業の完成度が達成感につながり、同時に、かすかに揺れる船体にいることで自然と全身の血流が改善する。潮風のリラックス効果と居心地のいいヨットの空間が、他人との距離を忘れさせ、次の一步を自然と踏み出している自分に気づく、廃船ヨットの修復活動の実践を紹介する。

2. ヨット修復活動プログラムの流れ

① ヨットの説明

陸上の展示ヨットで各部の名称、ヨットで大海原を航海することの意味を考える。

② ヨットの各部の名称とその操船の仕方をセール（帆）と舵（ティラー）の操作で一人ずつ学ぶ。（図1）



図1) ディンギーで基本操作の学習

③ 桟橋に係船したヨットに乗船し、キャビンで十分な自己紹介をし、熱中症予防を兼ね乾杯の練習をする。（図2）



図2) 前回経験者の音頭で乾杯

④ デッキで劣化した舵棒を磨く

サンドペーパー180番を使い、できるだけゆっくり木にかすかに触れるぐらいの力でゆっくりと木部を磨く。この時、舵棒が痛く感じないように心を込めて、木肌を磨くことを伝える。同時に風向きを考え風下に人がいないようにする。（図3）



図3) 梶棒の気持ちを考えて磨く

⑤ 木部にニス塗る

磨いた梶棒に油性ニスをできるだけ薄く、ゆっくりとかすかに塗っていく。（図4）



図4) 優しく丁寧にゆっくり何度も塗る

⑥ 協働作業へ移行

デッキ掃除および帆の採寸・収納など2.3人で協力できる作業をする。（図5）



図5) 協力し水洗い作業

⑦ デッキ・キャビンで協力して昼食の支度 焼き餃子、水餃子の調理を行う。（図5）



図5) デッキとキャビンに分かれて協力して調理

⑧ 最後に全員で昼食会と振り返りを行う。

博物館ができる過程を共有する～甕ミュージアム開館準備の実践～

三宅優佳（兵庫県立人と自然の博物館）

山下大輔・石川弘樹（薩摩川内市甕ミュージアム）

1. はじめに

甕ミュージアムは、鹿児島県薩摩川内市の下甕島に令和7年4月に開館した、甕島列島の地質や化石を中心とした島の博物館である。

一般的に博物館は完成した展示を公開する形で開館することが多いが、本実践では「博物館ができる過程」を共有することを重視した。そのため、開館準備の段階から展示設営や標本整理などの作業を公開し、地域住民や児童・生徒、来訪者が関わる形で準備を進めた。本発表では、博物館づくりの過程を共有した実践と、その中で見られた参加者の関わり方の変化について報告する。

なお、開館準備に先立ち、博物館構想や展示レイアウトの検討段階においても、地元小中学生や地域住民を中心に意見を聞き、一部を博物館のコンセプトや展示内容に反映させている。

2. 開館準備の実践

（1）博物館ができる過程の共有

開館準備では、展示設営や搬入、標本整理、ラベル作成などの作業を公開し、参加できる形で進めた。学校団体や社会教育施設の研修に加え、観光物産協会と連携した「開館準備お手伝いツアー」も実施した。また、地域住民から現生貝類や化石資料の提供を受けるなど、展示資料の収集にも地域が関わった。

これらの活動を通して、完成した展示だけでは見えにくい博物館活動に触れる機会となった。

（2）実際の作業への関与

本実践では、体験として用意したプログラムではなく、その時々の開館準備に必要な作業へ参加してもらうことを基本とした。標本の収集やクリーニング、展示設営、ラベル作成、時には片付けなどの作業を通して、参加者は博物館でどのような仕事が行われているのか、また、その作業がなぜ必要なのかを知り、博物館活動への理解を深める機会となった。

3. 多様な人の関与・関わり方の変化

継続的に参加した子どもたちは、放課後に博物館へ来館し、作業や見学を行うようになった。標本収集や展示資料に関する提案を行う子どもも見られ、博物館活動を身近なものとして捉え、主体的に関わる姿が見られた。また、当初は学芸員や地域住民から学ぶ立場であった子どもたちが、開館準備に参加する人へ作業内容を説明したり、一緒に作業を進める場面も見られた。

このように、継続的な関わりを通して、参加者が受け手から担い手へと関わり方が変化する様子が確認された。また、子どもだけでなく、地域住民による資料提供や展示制作への協力、内覧会のサポートなど、多様な主体が博物館づくりに関わり、博物館との関係が広がる契機となった。

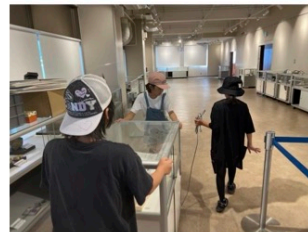


図1：開館準備における活動の様子

4. 成果・まとめ

開館準備への参加は、参加者が博物館活動を身近に感じ、その仕事の意味や必要性を理解するとともに、博物館への関わりを深める機会となった。また、継続的な関わりを通して、子どもたちが学ぶ側から来訪者や新たな参加者を支える側へと役割を変化させる姿も見られた。こうした役割の変化は、博物館づくりへの主体的な関わりが継続する中で生まれたものと考えられる。

完成した展示だけでなく、博物館ができる過程そのものを地域と共有することは、博物館への理解を深めるとともに、多様な主体が博物館づくりに主体的に関わる契機となった。

企業向け生物多様性研修 ～林業ネイチャーポジティブ研修の実践～

森口 大世 (ibipio)

ibipio

企業向けの生物多様性研修

～ 林業ネイチャーポジティブ研修の実践～

団体紹介

私たちは「ibipio」という名前で活動しています(していく予定です)。
まだ活動歴が浅いですが、社会人や企業を対象とした環境研修を実施していきます。
企業の研修として、森林の中でのワークショップを実施したり、e-learningを通して環境問題の知識普及を図ったりしています。メインメンバーは二人で、ともに森林科学科を修了しており、現在もアカデミアとのつながりを持っています。今後は法人化を視野に活動を本格化させる予定です。



背景

気候変動や生物多様性の喪失に代表される環境問題は、現代で人類が直面する大きな課題であり、グローバルリスクでも上位を占めている。(Global Risk Report 2026)

2050年までのカーボンニュートラルや2030年までのネイチャーポジティブの実現といった目標が設定されているが、市民や一個人での環境配慮の行動では効果が限定的であるため、目標達成のためには企業の活動と意識変容が必要不可欠であると考えられる。そこで、社会へのインパクトの大きい企業やそこに所属する社会人に対して、自然・環境への正しい認識や知識と意識の改革を目的として研修を行った。環境の持続性だけでなく、経済的な持続性(ビジネスとして成立するか)も本活動の主軸のひとつである。

活動内容

長野県諏訪郡富士見町に位置する森林で**ネイチャーポジティブ研修**を実施した。郡内にある企業の研修の補助として参画し、対象企業の社内メンバー、地元林業家の協力のもと、研修の企画と運営を行った。

当日は運営メンバーも含めて20名強が参加した。
研修では**林業と生物多様性のあり方**をテーマに座学や森林内でのフィールドワークを行った。午前中の座学では生物多様性を専門とする東大の助教授による、林業用林と天然広葉樹林の経済的価値や生物多様性機能の講義が行われた。午後は地元の林業家とともに皆伐予定のマツ林に入り、森林散策の後に広葉樹の同定ゲームを行い、森林から戻ってからは研修のお土産(輪切りコースター・ペンキ)を作った。フィールドワークの広葉樹種同定ゲームの詳細は次の通りである。

1. 参加者を3~4名のチームに分ける
2. ガイドブックをヒントに林床に生えている指定の広葉樹を見つけて印をつける
3. 見つけた樹種や個体数によって加点され、上位3チームには景品が送られる



フィールドワークの様子

方法

本研修において特徴的な点は、**研修で行ったフィールドワークが実際の林業業務の中の作業である点**である。今回の研修を通して、マツ林の林床に生えていた若い広葉樹(特に保全価値のあると判断されたもの)の多くを発見し、印をつけることに成功した。これらの樹木は本森林の皆伐前に移動され、保管・植樹される。
ゲームとして行った研修がそのまま生物多様性の保全に繋がっているという点で新規性があると考えられる。

また、昼食は地元の猟師・コックによるジビエ弁当とした(写真参照)。その際支給したドリンクは研修で同定した樹種であるダンコウバイを使ったクラフトコーラだった。食と紐づけることで参加者の意識向上や木への親しみやすさの形成を図るとともに、東京の企業の研修で地方にお金を落とすことで、地方創生や循環経済という面でも貢献した。



成果

本研修は参加自由の研修として土曜日に行われた。研修扱いであるため、出勤としてカウントされるが、東京から片道2時間以上かかることに加え、参加費(1万円/人)も徴収している。にも関わらず、定員はすぐに埋まった。これは環境や自然への関心の高さの表れでもある。

研修実施後のアンケートでは6段階評価で満足度が5.8点と非常に高い評価となった。満足度の高い理由は「**現場課題の実感**」「**自然への貢献感**」「**知識の持ち帰り**」という3つが主だと考えられる。「普段の業務では味わえない体験」「趣味とビジネスでは自然への関わり方が大きく異なることの実感」といった趣旨の感想が目立った。座学からの実習という段階を踏むことで、林業の現場課題を実感し、樹種の判別知識の持ち帰りを実感してもらえたことが高評価の一因だと考えられる。また、楽しい研修が自然保護に実際に貢献しているという貢献感が学習意欲の向上につながった可能性がある。



樹種の見分け方を勉強する様子

課題と今後の展望

- ①スケジュールにより本来予定していたアイデアワークショップが実施できなかった。また、せっかく森の中に来たのにゆっくり散策する時間が十分に取れなかった。
→時間と予算が許せば泊まりのほうが充実する。夕食の時間で企業間でのビジネス交流や自然の中でお酒を囲むなどの発展の可能性がある。
- ②座学的なワークやフィールド研修での貢献度の可視化を行い、実務とつなげる必要がある
- ③雨天時に室内でできる代替の研修をもっと作りこむ必要
- ④森林内でのワークを考えると参加者をこれ以上(20人以上)増やすことは困難→収益性と継続性のためには1回の研修ではなく、継続的な実施と研修後のフォローが必須

団体情報

- ・ 団体名: ibipio
- ・ 代表: 森口大世
(tai.moriguchi@gmail.com)
- ・ URL: ibipio.com



1. 背景

1990年代後半に入って少子高齢化という社会変動を基盤に福祉、医療等が再び、構築されるようになってきた。都市化、核家族化等の影響により、地域社会のコミュニティや家庭の形態も多様化してきた。女性の就労が、一般化されてきて子どもの子育てが、両親、特に母親の負担が大きくなってきている。地域の中で近隣の人間関係が希薄化し、地域の子育ての力も低下が著しい。子育てが孤立・無縁の中でおこなわれている。保育所保育指針の2018年の4回目の改定では、「保護者と連携して子どもの育ちを支えるという視点を持ち、子どもの育ちを保護者と共に喜び合うことを重視して支援を行うとともに、地域で子育て支援に携わる他の機関や団体など様々な社会資源との連携や協働を強めていくことが求められている」という背景がある。

2. 研究目的

第三部3年生96名が3年間で保育実習（保育所、施設）、教育実習などや座学では得ることのできない現場での経験をしてきた。授業で地域には様々な課題があることを学んできた。「保育」のなかの「子育て支援」の視点から地域の方と交流をし、対話を通して、地域で子育てをしている家庭の課題を探った。「自分たちでできることは何か」と課題を自らの事と捉えることから始めた。授業の中で地域交流という対面で地域の当事者団体と解決方法を話し合った。今年度は、その課題を共有できることとなった団体（生活協同組合）と「東加古川軒先市場」において学生が考えた企画と協働して実践が教育的（自身を変容させ、社会を変容させるための学び：Learning to transform oneself and society）に効果があったかどうかを分析し、地域の活性化にも貢献することを目的とする。

（1）授業（実践）の目的

地域の市場という身近な場での交流を通して、子どもや保護者が安心して参加できる遊びの場を提供し、地域全体で子どもと関わる様子を体験する。クリスマスをテーマにした遊びを通じて、子どもが季節や季節のイベントに親しみや興味、関心を持てるようにする。活動の企画、準備、実践を通して、子どもの発達段階や興味に応じた遊び

について考え、将来の保育実践につなげ、現場に活かされることを目的とする。

（2）方法（授業～実践まで）

授業の中で地域子育て支援について学び、実践の目的を知る。学生が授業の中で地域子育て支援の昨年の課題を踏まえ、何ができるか、アイデアを出し合う。グループに分かれて、課題について話し合い、グループでなにをするか決定する。

（クリスマスカード作り、的当て、輪投げ、ツリー作成）生活協同組合、東加古川軒先市場主催者と打ち合わせをする。カクドさんとコープの施設「虹」と配置を検討する。「東加古川軒先市場」にて12月6日（土）9:00～15時まで5グループ（1グループ1時間）の予定で実践をする。

（3）学生の自由記述から（一部抜粋）

・今後もこのような地域子育て支援を行うことで、子どもたちが地域の大人や大学生と関わる機会が増え、安心して過ごせる居場所づくりにつながると考えます。また、遊びを通して人と関わる楽しさを感じることは、子どもたちの社会性を育てることにもつながると思います。大学生にとっても、地域と関わりながら実践的に学ぶ機会となるため、継続的に行うことで地域全体の活性化に結びつくと感じました。今回のような季節の遊びの場を作ったり地域の特産品を紹介する場を作ったりすると活性化すると思います。遊びの場では親子や初めて出会う子ども同士、保護者の方同士が交流して繋がることができたり、特産品を紹介する場では子どもと地域のおじいちゃんおばあちゃんが交流したりできると思ったからです。季節や地域に触れながら人と人同士が繋がれる場があるとより活性化できると思いました。

3. 【実践から得られる期待される効果】

学生は、実習を経験してきたが、自らが主体となって地域の子育て支援を経験することは難しい。授業で地域の子育て支援の重要性を学び、地域の人々と交流し、課題を見つけ、解決方法を考える交流を重ねてきた。PBL学習（Project-Based Learning）を取り入れ、今回、東加古川軒先市場、生活協同組合の協力で実現できた。この実践で学生は「自身を変容させ、社会を変容させるための学び」（Learning to transform oneself and society）を少しでも経験できたと思われる。今後も教育の効果が地域の子育て支援に活かせるように結果を分析・考察し、授業を改善していく。

Project Neurol: いろいろな国の視点から考えるスマートシティ

吉永 徠愛 (西南女学院大学生 2 年)

Team Neurol

Project Neurol

～いろいろな国の視点から考えるスマートシティ～

Team Neurolについて

Team Neurolは、アジア太平洋地域のRCEユースと協働し、持続発展可能な社会に貢献できるスマートシティについて議論・提案を行う西南女学院大学人文学部英語学科の学生によるチームです。オンライン討論や模擬国連での発表を通して、ESDの理解促進とリーダーシップの育成に取り組んでいます。



このプロジェクトの背景

近年、気候問題や都市問題などが深刻化する中、持続可能な社会の実現に向けた国際協力の重要性が高まっています。本プロジェクトは、スマートシティをテーマに若い世代が主体となって議論を重ね、SDGs達成に向けた提案を形にすることを目的に実施されました。国ごとに抱える課題が異なる中で、言語の壁を越え、多様な視点を尊重しながら模擬国連で発表を行う経験は将来の国際協力につながる力を育む機会となります。また、本活動はESDへの理解を深め、リーダーシップの育成にもつながることが期待されています。

Neurolの活動

韓国、中国、マレーシア、インド、インドネシア、アメリカの100人以上の学生達と共にZoomを活用しながら、韓国・インド、日本、中国、インドネシアの4つの国を代表するチームに分かれて活動しました。この中で、各国のスマートシティ実現を目指すために現在行っている取り組み、また、未来へのアイデアを8回のセッションで意見を出し合い、最後に代表としてリーダーがプレゼンテーションをしました。第1回から第6回はセッションごとに、一人一人に課題が与えられ、次のセッションまでに参加者限定の電子掲示板に提出し、それぞれの意見が誰でも見られるようになっており、全員のアイデアを共有しました。一つ例を出すと、第2回目のセッションでの課題は、自分たちが選択した国のSDGsの課題、共有したい技術などをまとめるものでした。それぞれのアイデアを次のセッションで共有し、そこからチームでまとめていきます。第7回では、本格的なまとめに入りました。私たちが入っていた日本チームでは、洪水、地震などの自然災害から市民を保護するため、日本で試行されているAIベースの早期警戒システムを組みこんだ、気候耐性インフラの整備を推奨するというまとめができました。この7回にわたるオンラインセッションを踏まえて11月14日に韓国で市民の方々の前で日本代表として活動報告をしました。



心掛けたこと

本活動では、国籍の異なる学生同士でも円滑に話が進むように、事前に何をするのか把握しておくことや、電子掲示板での情報共有を心掛けました。各セッションの課題に対して自分の意見や、具体例を用意し、他の学生の意見と比較ができ、セッション内での自分の発言がより質の高いものになるように早めに投稿しました。また、すべての発言を一人で理解することが難しい場面もあり、参加している友人と通話をし、お互いに助け合いながら理解を深めました。担当の国が日本だったので、スマートシティの取り組みが身近で取り組まれているものや、課題も考えやすかったです。しかし、セッション内での発言は英語で多国籍だったので、発言への抵抗もあり、はじめは質問などがあっても言わずに終わることが多々ありました。しかし、全員が目的が同じ学生であり、このような場に慣れてきたので、疑問に思ったことは積極的に質問することを特に心がけていました。



この活動を通しての成果

本活動を通して、私たちは国際的な視点から地域課題を考える力や持続可能な社会の実現に必要な視点を学ぶことができました。毎月のオンライン会議では、当初は英語で発言することに抵抗がありましたが、議論を重ねる中で徐々に慣れ、主体的に意見を述べられるようになりました。また、韓国で開催された模擬国連での発表を通して、本プロジェクトの取り組みを地域の方々に広く伝えることができ、ESDや持続可能な社会への理解を促進する機会となりました。

課題と今後の展望

本活動を通して多くの学びを得ることができましたが、言葉の壁や発言への不安といった課題も見られました。オンライン会議では発言が消極的になってしまう場面もあり、参加者一人ひとりが安心して意見を述べられる環境づくりが必要であると感じました。例えば、言葉の壁を低くする工夫や事前準備の充実を図るなど、より多くの学生が主体的に参加できる仕組みを整えていきたいと考えています。また、今後は新しいテーマにも挑戦し、活動の幅を広げていきたいです。

各ホームページ

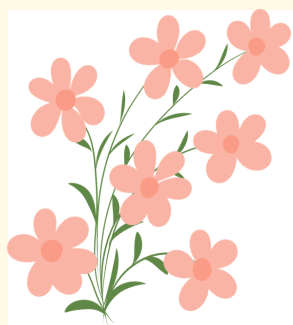
西南女学院



西南女学院大学人文学部英語学科





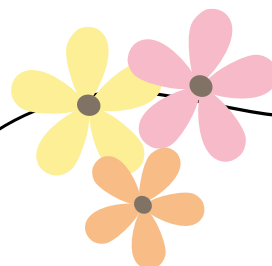


2026年3月20日、21日に行われた第8回ESD実践研究集会には計41名のユースが参加しました！
参加したユースから集めた声をお届けします！

第8回ESD実践研究集会

参加者のふりかえり

- ①印象に残った人・出来事・場面
- ②新しい気づき・学び
- ③よくわからなくなかったこと・もやもやしたこと
- ④これからの活動にどう繋げたい・繋げられそう？
- ⑤感想・意見



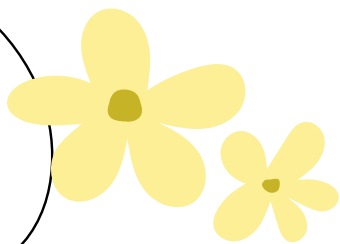
藤原ゆうな (ESDプラットフォームWILL・神戸大学)



②活動の中ではどうしても先の見えないことへの不安が勝り、自分（たち）のしていることにどうしても自信が持てません。ポスターを作るためにこれまでを振り返り誰かに伝えるための言葉を探す中で、自分たちが大切にしていることの再確認と、迷いながらも成し遂げてきたことへの気づきがありました。また本イベントを通してようやくこんなにも頼もしい自地域RCEの面々の存在に気づけました。WILLメンバーとしてだけでなく、RCEという大きな組織の中でも自分はひとりではないことは大きな励みになりました。

③・ポスター発表のやり方。遠巻きに見る人がいたり、もう少し詰めて見てくれれば…というシーンも。場の一体感や相互の配慮という点でもっと声かけなどできたのかなと心残り。
・何のためにボランティアをするのか？の問い直しが必要かもしれない。「ボランティア」＝「いいこと」の発想はボランティア活動に伴って起こる課題に鈍くなってしまいそう。

④他の地域・団体の様々な活動やワークショップで出たアイデアを種に、それぞれの活動がさらに発展していくといいな



山下優佳 (岡山県ユネスクスクール高等学校ネットワーク)

①妖怪と防災学の組み合わせが面白すぎてファンになっちゃいました。

②自分はつながっていないと思うようなことでも他の視点からはつながっていて、とても興味深い学びがあった。

③ユネスコやESDの活動をしている人がほとんどで、意見したことに共感や賛同が得られることが多かった。ただ、こういう集会に参加している人はそもそも似た意見を持っている人がほとんどなので、ある意味狭い関係での意見交換になっていると感じた。共感の場を広げるだけでなく、もっとユネスコの活動を批判している人や環境問題等を問題視していないような人との意見交換でぶつかり合う場が必要だと思う。コンフォートゾーンを抜け出すことが大切だと提唱する人が多いが、多くの共感が生まれるこの集会こそがユネスコ関係者にとってコンフォートゾーンであるような気さえしている。今後どうやって対立する人々と意見交換できるのかも考えていきたい。

野崎晴貴 (特定非営利活動法人岡山NPOセンター)



①国連大学の龍原さん。これからみなさんと一緒に頑張っていきたい感を終始感じていました。

②当事者性について。初めて聞く内容で、たくさん掘り下げて聞けたわけではないですが、とても共感しましたし今後への期待感もあります。

③ESDについて話すときに、よく「過去・現在・未来」のようなことを言いますし自分も使いますが、いつ？何についての？をあまり掘り下げて考えたことがなく、ふわっとしている感を感じています。過去もどのくらいまで振り返るのかとか。

④今回のイベントだけではないですが、細々とつながってきた兵庫-神戸のみなさんとの協働を目指して準備を進めているところです。

⑤ありがとうございました。基本的な知識等をそろえて話すという点では、もう少し「当事者性」の内容面についてもお話を伺えたら良かったなと思いますが、その話をしっかり伺い、考えられる機会が今後あることを期待しています。



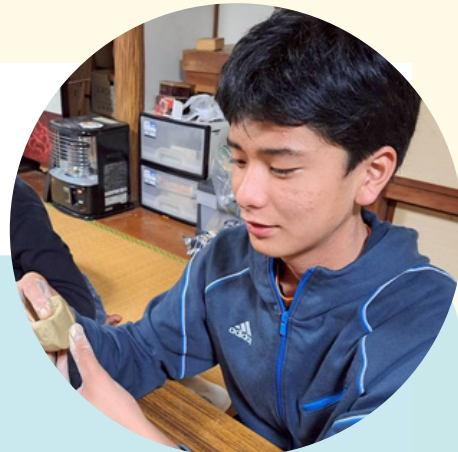
森唯花 (ESDプラットフォームWILL・神戸大学大学院)

①ESD・RCEリレートーク。他地域のRCEの活動について、時間を取って聞くことができて良かった。

②自分たちの目の前の活動だけにとらわれず、色々なヒントを得ながら柔軟に活動して行くことの大切さ。

④多様な人との対話や体験を通じて、新たな気づきや関心が生まれるような場づくりを意識していきたい。

大久保直太郎 (NPO法人KID'swork)



①ESD企画づくりワークショップにて、様々な感性を持った方々と企画を考えた際、斬新な視点を持った方に出会えたことです。それは、「体の健康と活動」という視点でした。

「健康無くして活動なし」確かにそうだなと、深く共感するとともに、自身の視野が広がり、活動というもののとらえ方を再度考え直される活動であり、記憶に残っています。

②自身の興味のある分野をより深めることが出来た。しかし、それだけでなく、一見自身の活動と無関係に見える分野に意外な繋がりを見出すきっかけになりました。また、将来就きたい職業にも深く関わる考え方に触れることもでき、大変満足しました。

③特にないです。大変勉強になりました。

④現在参加しているKID'sworkの活動に反映できる部分があり、これから高校生リーダーとして関わろうと、学んだことを活かす場が多くあると思います。そして、活かすためにもこれからの活動に健康で参加し、活かす場に積極的に飛び込んでいこうと考えています。

⑤今回の活動で、将来就きたい職業への興味がより一層強まりました。これからも、活動を続け、ESDの活動に携われるようにしていきたいと考えていますので、何卒よろしくお願いします。

長坂資弥 (耕さない農家)

①妖怪のお話が面白かったです。全体では、リレートークで多くの人が連続で喋るのが、短い時間の中、多くの人がアウトプット、インプットできて楽しく実のある時間だったと思います。

②自分が思っていること、知ってる事実はあるのですが、それがいざ出そうとすると、言語化できていないや、まとめられてなくて、出せなかったのが、これから話し合う場はたくさんあると思うので、必ず整理してまとめておくという準備が大事だと思いました。

③2日目の『企画をグループで作ろう』に関して、誰のための企画を作るのかわかりませんでした。一般の人たちへの企画なのか、僕ら持続可能を広める側での企画なのか。

④今後も多くの人とまともに話すことができるように整理して言語化して頭に入れたりリスト化したり、ノートに書いたりして、挑みます。

⑤ウィルの方々、みなさん本当にありがとうございました。その他、このイベントに関わっていただいた方々、ありがとうございました。

奥悠耶

(特定非営利活動法人KID's work (RCE北九州ユース))



①印象に残ったものとしては、各団体それぞれの形・軸を持って持続可能な活動を行っていることが、多くの発表をみて感じたことだ。また、特に感じた場面としては、1日目に色々な団体の意見を聞く工程を踏んでから、2日目に年代に分けて集まって企画を考えたのは、発想の転換や気づきが見れてとても面白かった。普段自分の周りで過ごしている人の考えとそうでない人の考えが同年代であってもここまで違うのかであったり、その違いからこの方向性は面白いという意見がでるのが、新鮮だった。

②新しい気づきとしては、普段教育部門ばかり関わっていて、持続可能な取り組みは教育に偏っていた。ただ、教育以外の持続可能な取り組みを沢山みることができ、それぞれの人がそれぞれの想いを持って、活動していることをしることができたのは大きな気づきであったと感じている。また、全国にこれだけの取り組みを行っている人々がいて、みなさんが積極的に繋がろうとしている姿がすごいなととても感心した。

④今回気づいた点に関して今後どのように生かしていくかだが、普段活動している団体や地域にもどったときに、どんなことを学んできたのか共有を行ったり、自分よりも下の世代に伝えていくことが大切であると思う。自分が学んで満足するなら、それは行く意味がないと思う。そうではなく、色々な見方考え方から、自分はこうしていきたい・この意見は自分ならこうだなという解釈や軸を持ちながら、現在所属する団体や地域での持続可能な活動を続けていきたいと思う。

⑤2日間ありがとうございました。



大西麻亜矢

(ESDプラットフォームWILL・神戸大学)

②今の社会を色々な角度から見ている人と交流ができて、刺激的でした。全国にこんなにも想いの強いユースがいることに驚き、心強く感じました。実務者が若者を巻き込むことへの課題感を持っていることが共有され、ユースと同じ課題感を持っていることに安心しました。

③急な変化は誰かを置いていく可能性がある、という一方で、今の世の中の急速な変化にどう対応行動していくのかは考えなければならないともやもやしました。

④まとまったようでまとまっていない議論を持ち帰り、モヤモヤしながら今後の活動に繋げて、また次の年にモヤモヤを持ち寄って何かが生まれるようなサイクルができたら面白そう。

白根愛子 (ESDプラットフォームWILL・神戸大学)



①中学生が堂々と話していたこと！すごいエネルギーをもらえました！

②2日目のワークショップにて、異なる世代が交わり意見を交わすことの重要性を実感できたこと。面白い発想から語り始めるユース、一方は自身の経験をベースに語り始める。「発想」と「経験」、「思い切りの良さ」と「慎重さ」。語り口は違えど、最終的にはどちらも豊かなアイデアが出ていたことにも驚かされ、議論の手法は様々なということを目の前で実感しました。そして後半の世代が交わるディスカッションでは、より深い視点でのアイデア、あるいは悩みが生まれていたと思います。多様な視点から意見を交わすなかで、シンポジウムでもキーワードに出ていた「ええ塩梅」が生まれてくるのではと期待が高まりました。

③みんな面白い実践を沢山しているのに、まだまだ知らないことだらけ。どうやったらうまく連携し、大きなエネルギーに変えることができるのか。

④より多くの人に関わってもらい、じわじわと社会が動くような実践を重ねていくには、「つくる側」と「体験する側」の境が緩やかなグラデーションを描けるような実践が大切だと感じさせられました。

⑤普段の実践から一度立ち止まり、色々な方とお話をする中で多くの気づきがありました。まだ言葉にしきれていない掴みもあります。今回学ぶことができたアイデア、概念を形にしていけるためにはどのような仕組みや動き方が鍵になるのでしょうか。これからもみなさんと「ああでもない、こうでもない」と議論しながら歩み続けたいと思います！お会いできたみなさん、ありがとうございました！これからもよろしくお願いいたします！

田中聖愛 (岡山大学)

①自分が、ESDの活動をやっていて感じたモヤモヤや、うまくいかないことを発表して、他の団体の皆さんとモヤモヤを共有できたことが印象に残っています。成果を発表するだけでなく、頑張っているからこそうまくいかないことを分かち合えたことが本当に良い経験になりました！

②ESDとは何かを考える上で、正解があるわけではなく、自分にとっての定義を持ち、活動に取り組むことが大切だと気づきました。

④イベントで得たご縁を大切に、岡山でESD活動の草の根を広げていきます！
本イベントをきっかけに、岡山RCEでは、市役所のESD推進課の職員さん、NPOの方、ユースが協力して、エコバスツアーを企画しよう！という話が出ています🚌
この実現に関わることができたら良いなあと思っています！
また、このイベントで得たユースのつながりを継続させていきたいなあと考えており、ESDユースで何かイベントかツアーができたらいいなあと思っています

⑤このイベントを通して、たくさんのユース、ESD関係者の方と繋がることができました！
参加して本当に良かったです！
岡山大学大学院に進学予定なので、次回の実践集会もぜひ参加したいです！

末廣晃 (ESDプラットフォームWILL・神戸大学)



①北九州の「にわとりキャンプ」は実践の内容に目を引かれました。食を通して命を考えるという食育の文脈、だが、スタッフ陣の方もいろんな点で大きく成長することが窺え、刺激になった。

③総合シンポジウムはもっとフロアからの発言も活発になるように、工夫が必要だと思った。

④離れた場所で日々、ESDの実践を行っている人たちがいることに勇気をもらった。RCE実務者会議・ユース会議の第一の存在価値は、他の場所を拠点とする「同志」たちの顔が思い浮かぶようになることだろう。

川上寛人 (次世代ユネスコ国内委員会)

①松岡先生がこれからのESDを考える上でのキーワードとして、「当事者性」「ネットワーキング」に加え、「For（～のための）」が重要」という視点を提示されたことが強く印象に残りました。前者の2つは私自身も以前から意識していた視点でしたが、「For」の視点は私にとって新しく、非常に興味深かったです。限られた時間の中でまだまだお話し足りないご様子だったため、機会があればぜひもっと深くお話を伺ってみたいと感じました。

②松岡先生が提示された「For（～のための）」という視点を得られたことが、大きな学びです。また、ESDという共通のテーマのもと、多様な活動をしている実務者の方々が、それぞれ自身の「当事者性」を拠り所（仮面）としながら熱量高く議論を交わしている姿を目の当たりにし、「これこそがESDのリアルな現場であり、醍醐味なのだ」と実感できたことも大きな気づきでした。

③特定の明確な「もやもや」があるわけではありませんが、ESDのような複雑なテーマにおいては、安易に正解を出そうとするのではなく、この「答えの出ないもやもや感」を抱えながらも長年考え続け、実践を重ねていくことが非常に重要なのだと改めて感じました。

④今回学んだ「For（～のための）」という視点を、自分自身のこれからの活動において常に問いかけていきたいです。「誰のための、何のための活動なのか」を明確にすることで、より本質的な実践に繋がれると感じています。また、多様な立場の人々が当事者性を持って議論する姿に大きな刺激を受けたため、私自身も自分の「当事者性」を大切にしつつ、積極的に他者とのネットワーキングを図っていきたいです。すぐには答えが出ないもやもやとした葛藤を抱えながらも、粘り強く活動を続けていこうと思います。

山本結子 (ESDプラットフォームWILL・神戸大学)



- ①・1日目の高田さんが挨拶でおっしゃっていた「雑多性」という言葉。WILLでよく使われるように思う「ごちゃまぜ」という言葉が近いのかもしれないけれど、雑多であるとはどういうことか、ごちゃまぜとはどういうことか、と改めて考えさせられた。
- ・2日目の企画作りワークショップで隣に座った方が、私の所属する別団体の先輩だったり、1日目のポスターセッション発表者の方が同じ市の出身の方だったりして驚いたこと。思わぬところで人って繋がるんだなあと感じた。
 - ・2日目の企画作りワークショップでテーブルに残っていた時に龍原さんとお話したこと。対話ってなんだろう。

②どのような場・ツールを用意するかによって、話しやすさ・話することができる内容は変わってくるんだな、と改めて感じました。

③いろいろな方との交流で新しい気づきを得られたように思う一方で、それをどう自分たちの実践に活かせばいいんだろう、と思いました。気づけた！と思っていることの解像度がそもそも低いのか(気づけた、と思っていることの中身を深掘りする必要がある・そのための方法を身につける必要があるのか)、得た気づきを踏まえて実践を変えていく方法をより学ぶ必要があるのか、どうなんだろうと思いました。どの活動に参加しても、考えること・感じることは多くある一方で、それをうまくアウトプットできていないように感じます。今ふりかえりを書いていて改めて感じました。



澤井正弘 (ESDプラットフォームWILL)

①正路さん（東灘こどもカフェ）

②いろんな団体の紹介が聞けて、良かったです。



真価を発揮する秋（とき）

神戸大学ヒューマン・コミュニティ創成センター・センター長

太田 和宏

2015年に採択された「持続可能な開発目標」SDGsはあと3年半で最終年2030年を迎える。17目標169課題の全てが数値化されているわけではないためその達成度を可視化するのは単純ではない。しかし、全体状況は芳しくない。国連『2026年SDGs報告』によれば、十分なデータ取得が可能な139項目に関して、“順調”on trackが15%、“比較的改善されている”moderate progressが21%で、残りの64%はネガティブな状態（“限定的成果”“不変”“悪化”）である。国際社会では全体の目標未達成を見込んで既にSDGs後継の国際協約の準備を進めている。その際の新しいキーワードは「持続的な福利」Sustainable Well-Being、略称はSWGsらしい。現在のSDGsの前身は「ミレニアム開発目標」MDGs 2000-2015だった。MDGs終盤も8目標の達成が難しいとみて最終年の3年ほど前、つまり2012年くらいから次なる目標設定の議論が始まった。MDGs 2000-15⇒SDGs 2015-30⇒SWGs 2030-45と達成できない国際戦略の共有がシリーズ化をされつつある。

どれも似たような項目を並べてはいるものの、その焦点とするところには変遷がある。MDGsは発展途上地域の貧困・教育・環境などの社会問題が主として掲げられていた。SDGsになると貧困格差などが引き続き取りあげられるものの、経済成長、雇用、イノベーション、資源活用などむしろ先進国社会の抱える課題に主眼が移る。そして次なるSWGsでは、おそらくより個人のレベルでの生活条件や生活の質、しかも先進国社会におけるそれらが焦点化されるものと予想される。

別の見方をすると、国際社会の主たる関心は「南半球の構造的課題」（MDGs）から「北半球の構造的課題」（SDGs）へと移り、そして「北半球の個人生活環境」（SWGs）へと変じようとしているといえる。北半球に住む私たちからすると、より身近で実感をもて理解できる課題へと国際社会の取り組みが接近しつつあるともとらえられる。逆に「南半球の人々」にとってみれば、国際社会の焦点がより遠ざかっていくように映ずるだろう。さらに言えば、南の社会の問題を考慮する程の余裕を失うほど、「北半球の人々」の生活環境がより深刻になっていることの証左でもある。

これらの国際協約設定方式の是非、またその内容の評価、その実効性については議論が必要であろう。しかしここでは、さしあたり世界が、個人の生活条件のレベルにまで思いを致さなければならないほど、問題が深化し、複雑になっているという現況を反映しているのだという事実は共有されるべきかと思われる。

今後SWGsの議論がどのような方向に進もうと、個人レベルの生活状態・環境をいかに充実したものにできるのかが世界の共通関心となるであろう。

個人や生活環境が主要な課題となるのであれば、これまでそこに深く関わって実績をつんできたのは、草の根レベルの社会活動であり、市民運動であることに疑う余地はないので、そこで果たすべき役割もいや益す。国家、行政、企業などでは掴みきれない領域とがっぷり四つに組んで呻吟してきた経験と知恵の蓄積がある。

市民、草の根レベルの活動ネットワーク構築と交流を重ねてきた RCE 兵庫・神戸が従来以上に役割を求められる時代になりつつある。RCE 兵庫・神戸として、こうした客観的時代状況を踏まえつつ、従来の蓄積にたって新たな取り組みにチャレンジをする段階に突入しつつあるように思う。新しい挑戦には常に過去からの蓄積と教訓への謙虚な振り返りと、それを超える新しい創造力が求められる。

こうした形で ESD 推進ネットひょうご神戸（RCE 兵庫・神戸）『ESD 実践研究 2025』がまとめられることの意義に改めて思いをいたしている。

ESD 実践研究 2025

2026 年 9 月 11 日発行

編集・発行 ESD 推進ネットひょうご神戸(RCE 兵庫-神戸)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11
Tel: 078(803)7970 / Fax: 078(803)7971
E-mail: rce.hyogo.kobe@gmail.com

編集／後藤聡美・黒木宏太・北村胡桃
